

---

# ノーデルシアの勇者 第一章

bunz0u

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ノーデルシアの勇者 第一章

### 【Zコード】

Z5063L

### 【作者名】

bunnou

### 【あらすじ】

高校生、高崎環はある口家のドアを開けると異世界に足を踏み入れていた。魔法の力を手に入れた環は、守るために戦いに身を投じていくことになる。

7月31日完結しました。

12月27日、続編開始しました <http://ncode.systu.com/n7606p/>

パブリでも掲載しています <http://p.booklog.jp/book/11481>

「いつてきまーす」

高崎環17歳はいつものように元気に家を出た。が、ドアの先にあつたのはいつもの見慣れた景色ではなく、変な格好をした大勢の人間が待ち構えている広場だった。

環は何の言葉もなくただただ呆然と立ちつくした。ぼんやりと周りを見まわすと、そこにいる人々は何かおかしかった。一言で言えば、ファンタジー映画のようだった。

居並ぶ人々はいかにもそれらしい格好をしていた。特に環の正面の一団はまさに王族という風情だった。中年の男と自分より少し上の年齢くらいの若い男。

「異界の勇者よ、よくぞ参られた」

中年の男はよく通る声で環に話しかけた。

「私はリチャード王。このノーテルシア王国を治める者だ」

リチャード王と名乗った男はまだしゃべろうとしていたが、環は手を上げてそれを遮る大声を出した。

「ちょっと待つてくれ。ここはどこだ？」

「それは私が説明しよう」

リチャード王と名乗った男の隣にいた、環と同年齢くらいの男が一步踏み出してそう言った。

「失礼。私はリチャード王の息子、エバンス。ここはあなたのいた世界とは違う、異世界だ」

「異世界？」

「そうだ、勝手なことだと言われるのは承知のうえだが、あなたは我々がこの世界に呼び寄せたのだ」

「わかんない話だな。まあ、とりあえず俺は高崎環だ。まあ、タマキって呼んでくれればいい」環は首をかしげて聞いた。「それで、これから俺をどうしようかっていうんだい？」

「我々の城に来ていただく。そこでこの世界について説明をしよう」「なるほどね」

環はそう言つてあらためて周りを見まわした。確かにここが全く別の世界だというのはよくわかつた。一人ではどうしようもなさそうな状況なのは完璧に間違いない。

「まいつたね、こじつは。ま、頼むぜ」

いかにも気楽な感じでそう言つた環とは対照的に、エバンスは重々しくうなずいて、近くに控えている騎士に手で令図をした。騎士は早足で環に歩み寄ると、地面に膝をついてベルトにつけられ鞘に納まつた剣とマントを差し出した。

「どうぞ勇者様」

「これを着ろつて」と…

そう言いながら、環はブレザーの上からマントを着けた。ベルト付の剣はどうしたものかとじばらく迷つていたが、今しているベルトの上から着けることにした。ブレザーにマントと剣、それに鞄といつ珍妙な格好になつたが、環はそれなりに満足したらしかつた。

「うん、悪くない」

「では勇者様、こちらに」

いつの間にか隣に来ていた眼鏡をかけた侍女らしき人物に手をとられ、環は歩き出した。迷子の子供みたいなもんかと思いながら、それなりに楽しそうにしていた。

どうやら城に向かっているようだつたが、環はそれを気にするどころなく、辺りをずっと見まわしていた。

見れば見るほどファンタジーの世界だつた。人々、市場、民家。全てがその手の世界のものだつた。家を出たら異世界に連れてこられたという理不尽な状況にも関わらず、不思議と怒りも悲しみも湧いてはこなかつた。

環が連れて来られたのは、城の中の大きなホールだつた。ホールには祭壇のようなものが中央に設置されていて、その前にはロープ

をまとめた若い女性がいた。女性が環の手を引く侍女にうなずくと、侍女は頭を下げる後ろに下がつた。

「勇者様、よくおいでくださいました。ありがとうございます」

ローブの女性は深々と頭を下げた。

「俺は高崎環だ。まあ、来たくて来たってわけじゃないんだけど。とりあえずよろしく」

環の気楽な挨拶にもローブの女性は落ち着いた態度を崩さずこわやさしく微笑んだ。

「タマキ様ですね。私はロレンザといつ者です」

「で、ロレンザさんは何者?」

「私は勇者様に魔法をお教えるよう命じられています。」

「魔法? 魔法っていうと火を出したり雷を落としたりできるアレン?」

「そうです」

「そりやす」。どうやつたら使えるのかな、それ

ロレンザは相変わらず微笑みながら、どこからか一冊の本を取り出した。それは豪華な装丁が施された、サイズで言えばA5くらいのサイズの分厚い本だった。

「これはスペルブックというものです」

「スペルぶっく? といつが、どこから出したのそれ?」

「所有者になればいつでも呼び出すことができます」そう言つてロレンザはさらに一枚のカードを取り出した。「そしてこれがスペルカードです」

「スペルカード?」

「スペルカードと契約できると、このスペルブックにその魔法が登録されて使えるようになります」

「へえ。その契約つてのはどうすればできるの?」

ロレンザはスペルブックを環に差し出した。

「まずはこのスペルブックに手を置いてください」

「じつか」

環がスペルブックの表紙に手を置くと、その場所が光り始めた。

「どんどん強くなる光に、

ロレンザは息を呑んだ。

「すごい・・・これだけの魔力があるなんて」「魔力？」

光が爆発的に広がった。光は数秒の間ホールを満たし、徐々に収まつていった。環とロレンザはさつきの体勢のままだつた。

「もう手を離してもいいですよ」

「ああ」

「今の光はタマキ様の魔力の大きさを表しています。これほどの光は記録でも見たことがありません」

「今のが俺の？」

「そうです。これでこのスペルブックはあなたのものです」ロレンザはそう言つてスペルブックを環に渡した。「それではスペルカードの契約をしましょう」

環はロレンザが差し出したスペルカードを受け取った。カードには爆発しているような絵が描かれていた。

「これは？」

「一番基本的な魔法であるバーストのスペルカードです。それはこう持つてください」

ロレンザはスペルカードを絵が描かれているほうを環に向けて、親指と人差し指ではさんで持つた。環もそれを真似した。

「いいですか、おそらくタマキ様が今までに経験したことのない感覚だと思いますが、恐れることはありません。まずはカードに意識を集中してください」

言われた通りにすると、カードが自分の体の一部になつたような感覚と共に、そこから未知の力が流れてくるような感覚があつた。

「魔力の流れを感じますか？」

「ええ、たぶん」

「それでは、”契約バースト”と声に出して言つてください。力を

集中して

環は目を閉じて、カードから自分の体に流れるを感じた。そして、腹に力を込めて口を開いた。

「契約！ バースト！」

カードが光ると同時に、今までの穏やか力の流れとは違う、大きな力が勢いよく環の体に流れ込んできた。

「うお！」

思わずあどすさつたが、カードはしつかり握っていた。力の流れは止まり、カードは上から光になつて消えていった。それと共に力の流入も止まつた。

「スペルブックを開いてください」

言われた通りスペルブックを開いてみると、そこにはさつきのカード、バーストが刻み込まれていた。それ以外は空白だった。

「おめでとうござります」ロレンザは微笑んだ。「これでバーストはスペルブックに登録されました。初めてで契約に成功するというのはすごいことですよ」

「このスペルブックっていうのは、ずいぶん空白が多いみたいだけど、魔法っていうのはそれだけ種類があるってことなのかな？」

「そうです。ですが、とりえず今日はこれだけにしておきましょう。他にも色々なことを知つていただきかなればいけませんから」ロレンザはさつきの侍女を呼び寄せた。侍女は再び環の手を取つて、ゆっくりと歩き始めた。環はされるがままになりながら、さつきの感覚を反芻していた。ふと我に返つて、侍女に声をかけた。

「ああ、そうだ。君の名前を聞いてなかつたけど」

「カレンです。タマキ様のお世話をさせていただくことになつております」「カレンね。で、なんでさつきから手をひいてくれてんのかな？」

「そのほうが確実ですかから」「そういうもんかな」

「そういうものです」

## 侍女の話と城案内

「こちらがタマキ様のお部屋です、  
環が案内された部屋はあまり派手ではないが、広く豪華な部屋だ  
った。ベッドやテーブル、椅子はどれも高級なものだというのはす  
ぐにわかつた。

「こりやすごい。スイートルームなんてもんじやないな」

「ここは最高級の貴賓室です」

「はー、そりやす」と

そう言いながら、環は鞄と剣をテーブルに置いて椅子に座つた。

「カレンも座つて」

「なぜでしようか?」

カレンは立つたまま眉一つ動かさずに答えた。

「ここには来たばかりでなんにもわかんないからさ、色々教えて  
もらいたいんだ」

「何をお知りになりたいのですか

「さつき王様がノーデルシア王国つて言つてたけど、この国つてい  
つたいどんな国なのかな?」

「我がノーデルシア王国は500年の歴史を誇る大陸最大の国です。  
国土は肥沃で政治、経済も安定していました」

「していましてことは、今は違うってことなわけ

「はい、5年前、闇王と名乗るものが現われてからは安定とは程遠  
い状況です」

「闇王?」

「闇の力を持つ魔物を使役する存在です。正体は不明ですが、人間  
のような姿をした悪魔だという情報があります」

「そいつを倒すために俺を呼んだったことでいいのかな」

「その通りです」

「なんで俺なの?」

「かつて世界の危機に異世界からの勇者を召喚し、その危機を治めたという伝説があります。勇者は類まれな魔力を持ち、希望をもたらした存在だと、その伝説は伝えています。タマキ様は優れた魔力の持ち主です、勇者に間違いありません」

「勇者ねえ」環は首をかしげた。「どうも実感が湧かないな。そも

そもここにいることが夢みたいだし」

「タマキ様はなじんでいるように見えますが

「なじんじやないけどさ。仕方ないんじやないかな、ここが俺の世界とは別の世界なのは間違いないみたいだし。目の前に大きな問題があるのは間違いないんでしょ、そういうのをスルーするのって気分が悪いんだよね」

「気分が悪い、ですか」

カレンは少し微笑んだ。環もそれをみて笑顔になった。

「やつと笑ってくれた。あれ、そういえば不思議なんだけど

「なにがですか？」

「なんでこうやって普通に話せてるのかな？ 言葉は違うはずだけど」

「それはわかりません。伝説では意思の疎通ができなかつたということはありませんので、何らかの力が働いているのだと思われます」「そういうもんか。まあ、便利だからそれでいいけど」

「それよりタマキ様、お疲れかもしだせませんが、これから案内したいところがあるのでですが」

「案内つて、どこに？」

「本日は城の中をご案内いたします。」

「城の中ね。荷物は置いてつてもいいかな

「はい」

環は鞄と剣をテーブルに置いたままにして立ち上がった。

「それじゃ、案内してもらうよ」

環とカレンが最初に来たのは食堂だった。数百人が収容できる食

堂には環も驚いているようだった。

「これはすごいな。城の人間は全部ここで飯を食うのかな」「ほとんどはそうです。別にここで食事をしなければいけない規則があるわけではないので、全員ではありません」

「すごいな。俺もここで食事することになるのか」

「いえ、タマキ様は自室で済ませていただくことになります。どうしてもとおっしゃるのであれば、ここで食事をしていただいてもかまいませんが」

「それはいいけどさ、いつも一人つていうのは味気ないからなあ。たまにはこうこうにぎやかなところで飯にしたいよ」

「そうですか。それでは次の場所にご案内いたします」

次は兵舎だつた。そこは城の中でも一番大きな区画で、通常の兵士から魔法使いまで、様々な者達の訓練施設や寝床が用意された。カレンは環を武器庫に案内した。

「タマキ様、気に入るものがここにあるでしょうか?」

環は様々な種類の武器を眺めながらいためいきをつけた。

「こりやすごいけど、俺はこんなもの触ったこともないよ」

「そうですか。訓練すれば使えるようになると思いますよ」

「そういうのは嫌だな。俺は魔法みたいなほうがいい」

「それでは魔法の訓練所にご案内します」

カレンが魔法の訓練所と言った場所は、かなりの広さと分厚い壁で囲われた広場だつた。「今は誰もいないんだな」「はい、それではまずこれを」

そう言つてカレンは一枚のスペルカードを取り出した。

「これはストーンスキンのスペルカードです。訓練を始める前に、まずこのカードと契約してください。これを使えば怪我の心配はありません」

「なるほどね。それじゃ、契約！　ストーンスキン」

バーストを契約した時と同じように、カードから力が流れ込んできた。それと共にカードは光になつて消えていった。

「さすがです。それでは早速使ってみましょつか。カードと契約した時の感覚を思い出してください」

「なんか力が流れ込んでくる感じのこと?」

「はい。その逆の力の流れを作るイメージです」

「力の流れね」

環は意識を集中して、自分の中にある魔力を感じた。それを体の外へと流すようにイメージを描いた。

「できたみたいですね。今度はそれを魔法の名前と一緒に放出来してください」

「よし、ストーンスキン！」

環は全身が力に覆われるのを感じた。カレンはいつの間にか手にダガーを持つていた。

「ちょっと待った、その手に持つてるのは?」

環は一步後ずさつたが、カレンは一気に間合いを詰めてダガーを横薙ぎにした。しかしダガーは環が出した腕に止められた。カレンはダガーをどこかにしまって、眼鏡を直して微笑んだ。

「これは? 切れてない、痛くもない。ところでそのダガーはどうから?」

カレンは環の疑問は無視して話を続けた。

「それがストーンスキンです。タマキ様の魔力があれば並大抵のことでは傷つかなくなるでしょう」

「確かに」環は思い切り地面を殴りつけた。拳は深く地面にめり込んだ。「全然痛くないし、体が硬くなってるからかな、パンチ力もすごい」

「次はバーストを使ってみましょう。やりかたは今と同じですが、こんどは手に意識を集中するのがいいです」

「今と同じね、こんな感じかな。バースト!」

かざした手からのものすごい爆発と共に環は吹き飛んで壁に叩きつけられた。頑丈なはずの壁は簡単にへこんでしまった。

「やれやれ、なんだよこれは」

環は頭をかきながら起き上がった。カレンはそれに手を貸しながら楽しそうな笑顔を浮かべた。

「本当にすごい魔力ですね。バーストは基本的な攻撃魔法で、本来はそれほど威力はないはずですし、術者が飛ばされるようなものではないのですが」

「こんな風に自分が吹っ飛ぶなんてことはないはずってわけか

「そうですね。これほど派手なバーストは初めて見ました」

「うまくコントロールできるようにならなきや駄目だな、こりゃ」

「大丈夫ですよ、ストーンスキンを使っていれば爆風くらいでは無傷でいられます。周りを巻き込むことだけを注意すれば問題ありません」

「そうは言つても、いつも吹っ飛ばされるわけにもいかないから、練習しないとな」

環はさんざん吹き飛びながら練習を再開した。カレンはそれを優しい微笑みで見守っていた。

「なあカレン。この魔法って別に手から出さなくともいいんだよな

「可能ではあると思いますが、どうするつもりですか？」

「こりつするのさ」

環は腰をおとして、右足を一歩後ろに引いた。

「バースト！」

右足の下で強力な爆発が起こり、その勢いで環は前方に吹き飛んでいった。そのままの勢いで地面に突っ込んだが、環はすぐに笑顔で立ち上がった。

「こりやすごいな

「確かにすごいですね、非常識もいいところです」

## スケルトンの襲撃

環とカレンが魔法の訓練をしていくころ、城の外では慌しい雰囲気が漂っていた。斥候隊からもたらされた情報、魔女がスケルトンの軍勢を率いて城に向かっているという情報のせいだつた。

「それで、避難の状況はどうだ」

エバンスが斥候を前にして落ち着いた様子で尋ねていた。

「はつ、現在全力で避難誘導をしております。魔女が到達するまでにはほとんどの避難が完了する見込みです」

「全ては無理か。バーンズ、軍の準備はどうだ？」

「第一陣はすぐに出撃できます」

「そうか。時間は稼ぎたいが、無駄な被害はできるだけ避けたいところだな」

「しかし、そうしなければ被害は大きくなります」

「そうだな」エバンスは腕を組んでロレンザに視線を移した。「ロレンザ、勇者タマキはどうしている?」

「タマキ様はカレンと魔法の習得を行っています」

「戦えると思うか」

「魔力は計り知れないものがあります。しかし、すぐに戦うのは難しいのではないでしょうか」

「だが、我らには勇者の力が必要だ。すぐにここに呼んでもらいたい

い

「はい

一方、環はカレンに見守られながら魔法の練習をしていた。

「タマキ様、だいぶ上達しましたね」

「ああ、あんまり吹つ飛ばなくて済むようになつてきたよ」

そこらじゅうを六だらけにしながら、環はさっぱりした顔をしていた。

「そろそろ他の魔法も使ってみたいんだけど

「まずバーストとストーンスキンを使いこなせるようにしたほうがいいでしょうね」

「けつこう使えると思うけど」

「まだまだ無駄が多いですね。いくらタマキ様の魔力が膨大とはいえ、無限ではありませんし、有効な使い方というものがありますから」

「失礼します！」

そこに1人の騎士が駆け込んできた。

「勇者様、至急城門前までお越し願いたいと王子の仰せです」

「王子って、あのエバンスって人か」

「そうです。重要なことだと思いますので、急ぎましょう」

カレンは環の手を取つて早足で歩きだした。

「ところでさ、その王子様つてのはどんな人なのかな」

「王子さえいれば次代は安泰だと言われています。さらに、武勇と智謀に優れ、民衆からも慕われています」

「大した王子様なんだな。それで、その王子様が急ぎの用つていうのはなにかな」

「それは、行けばわかります。タマキ様、少し面倒なことがあると思いますので、気を引き締めていただくのが良いかと」

「気を引き締めるつて、戦争でも始まるのかい？」

「似たようなものです」

話しているうちに、2人はエバンスの元に到着した。

「よく来てくれた勇者タマキ」

「单刀直入に聞くけど、何があつたんだい王子様？」

シンプルな環の問いにエバンスは楽しそうに笑った。

「エバンスと呼んでくれてかまわないよ、勇者タマキ」

「なら、俺のことタマキでいい。勇者っていうのはいらないよエバンス」

「わかった、タマキ。さて、君に来てもらつたのは、今やつかいなことが起こうとしているからだ」

「なんか化物でも攻めて来たとか？」

「その通りだ。我々が魔女と呼んでいる者が、スケルトンというモンスターを率いてこの城に侵攻してきている。手をこまねいているわけにはいかない」

「スケルトンつていうと骸骨の化物か。軍隊でも出すのかな」

「軍は少しなら出せるが、時間稼ぎ程度しかできないだろう。こちらの被害も大きいものになる可能性がある。動かないわけにはいかないのだが、うかつなことはできないんだ」

「そこで勇者とやらの出番つてわけになる?」

「そう、その通り」

エバンスは真面目な顔でうなずいた。そしてカレンに視線を移した。

「カレン。タマキは戦えるか?」

「今のタマキ様でも、スケルトン程度に引けをとるとは思えません」

「戦えるの? 僕が?」

「はいタマキ様。先ほどのあなたの訓練に比べたら、はるかに楽なものですが。魔女には注意が必要ですが、一人で戦つたとしてもタマキ様が負けることはありません」

「カレン、それは本気で言つてるのか?」

その断言に、エバンスは内心驚いていた。だがカレンが本気で言つているのは間違いかつた。

「タマキ様、恐れ入りますが、バーストを一発撃つてみてください。周りを巻き込まないよう」

「バーストね、そんじゃ軽く、バースト!」

あたりに爆音が響き、環は魔法の反動で数メートル後方に飛ばされた。そこにいた者は皆、啞然としていた。とても基本魔法と言われるバーストの威力ではなかつたからだ。

「こんなもんかな」

「次はストーンスキンを使ってみてください」

「はいはい、ストーンスキン!」

「どなたかタマキ様を斬つていただけますか？」

カレンの言葉にその場は騒然としたが、エバンスが一步踏み出してすぐに静かになった。

「いいのだな？ タマキ、カレン

「いや、いいのかな？」

「はい、問題ありません」

環は首をかしげていたが、カレンは自信を持つて言い切った。エバンスは腰の剣を抜いて、一気に間合いをつめると、環に袈裟切りに切りかかった、が、硬い音と共に、エバンスの剣は環の体に弾き返された。

「これは、信じられない。まるで岩山に斬りつけたようだ」

エバンスが剣を振るつた結果と言葉に、周囲の者達は敬畏の念をこめて環を見つめた。

「確かにこれなら負けることはない。タマキ、第一陣と共に出撃してくれるか？」

「出撃ね、そうすればこの町を守れるのかな」

「君の力があれば必ず守れる」

「わかった。それじゃ、さっそく行こうじゃないか」

「武器は必要ないのか？」

「使つたことないしいらなによ。魔法があるんだからなんとかなりそうだし。なあカレン」

「そうですね、行きましょう」

カレンの一言に環は不思議そうな顔をした。

「カレンも来るのか？」

「ええ、タマキ様のお世話役ですから」

スケルトン軍団が見えるところまで到着した環は、その軍団の数に驚いていた。

「これはすごいな、見渡す限り骸骨って感じだ」

「スケルトンはそれほど強くないモンスターですが、これだけ数が

集まると厄介です」

「こいつらの攻撃はストーンスキンを使ってれば大丈夫なのかな」「普通はそうはいきませんが、タマキ様ならスケルトンの攻撃は問題になりません」

「わかった。それじゃあ、ちょっと行ってくるか」

環は兵士達に向き直った。

「ちょっと行ってくるけど、みんなはここにいてくれ。怪我とかしてほしくないからね」

そう言つて、環は腰を落として走り出すように構えた。

「タマキ様、スケルトンを操っている魔女がいるはずです。その魔女を倒せばスケルトンは自然に消滅します」

「わかったよ、それじゃ行ってくる。ストーンスキン！ バースト！」

爆発と共に環は砲弾のようにスケルトン軍団の中に飛び出していく。その突撃だけで数十体のスケルトンがばらばらになつた。環はゆっくりと立ち上がりて辺りを見まわした。

「こんだけ骸骨ばっかりつていうのも壮观だな」

周囲のスケルトンが一斉に切りかかってきたが、防ぐこともせずにそのまま剣を体で受け止めた。一太刀たりとも環の体を傷つけることはなかつた。

「この程度なら1人でどうにでもできそうだ」

そうつぶやいた環にスケルトンは次々に襲いかかってきた。

「バアアアアアアアアストオ！」

全身に魔力をみなぎらせての凄まじい爆発があこつた。半径5メートルのスケルトンは跡形もなかつた。

兵士達はその光景を見て呆然としていた。ただ1人カレンだけは特に驚いた様子もなかつた。

「本当に非常識な人ですね。あれはもうバーストではない新しい魔法ですよ」

「確かにそうですね」

兵を率いていたバーンズはやつと驚きから開放されて、カレンに声をかけた。

「これは勇者様だけで何とかなつてしまいそうな様子ですが」

「そうですね。タマキ様はまだ加減というものがおわかりになつていないので、下手に動いたら巻きこまれてしまいます。危なくなる様子があるまではじつとしているのがいいでしょうね」

「危なくなると思いますか？」

「なりませんよ」

カレンの視線の先には、次々とスケルトンを撃破していく環がいた。

「いい加減にすつこんでろ！」

環は気合と共にスケルトンに蹴りをいれた。ストーンスキンで強化された蹴りは易々とスケルトンを粉碎した。すでにかなりの数のスケルトンを倒していたが、まだ魔女のいる場所には到達できなかつた。

「バースト！」

間髪入れずに後方のスケルトンを振り向きざまのバーストで吹き飛ばす。それでもスケルトンは限りがないように思えるほど湧いてくる。

「魔女とかいうのを見つけなきや、きりがないか」

環は腰を落として足に魔力を集中させた。

「一気に跳んでやる！ バーストオ！」

環は爆発の勢いで跳んだ。上空から見渡すと、はるか後方にスケルトンの密度が高い場所があるのが確認できた。

「あそこか」

そして着地というか、墜落すると、すぐに体勢を立て直して再び跳んだ。何回かの跳躍でやつと田指していた場所に到達できた。

「魔女さんよ、ちょっと顔を見せてもらいたいんだけどな」環はスケルトンの固まりに手をかざした。「バースト！」

スケルトンは吹き飛び、そこには魔女と思しき人物が残された。それほど環と年齢が離れているとは思えない、軽装の鎧に身を包んだ女だった。

「お前が魔女か。できればこの骸骨連中を連れて退いてもらいたいんだけどな」

魔女は環の言葉に、顔だけは動かしたが目は空ろで何の反応もなかつた。ただ手を上げると、吹き飛ばされたスケルトンの穴を埋めるように新しいスケルトンが集まってきた。

「話は聞かないか。それならその気になるまでつきあつてやるよ…」地面を蹴つて魔女に向かつて突つ込む環。スケルトンは次々に襲いかかってくるが、それは次々に殴り飛ばされていった。しかしそれだけでは追いつかず、環にはびっしりとスケルトンが張り付いた。しかしその口は笑みを浮かべた。

「まとめて弾け飛べえええええ！ バアアアストオオオオ！」

それまでとは比較にならない強烈な爆発がスケルトンを吹き飛ばした。魔女は何かの手段でそれを防いだのか、まったくの無傷だった。

「勇者か、お前の名は？」

相変わらずの空氣な田で魔女は環に問いかけた。

「やつと口をきいたか」環はほつとしたような表情になつた。「おれは高崎環。こことは違う世界から来た。あなたは何者だ？」

「わたし？ わたしは」魔女は顔をしかめて額に手を当てた。「わたしは魔女だ」

「俺が聞いているのはそんなことじやない！ あんたが何者でなんて名前かだ！」

「何者？ 名前？ わからない。お前はタマキか、勇者タマキ」

「俺のじやない、あんたの名前だよ。思い出せないとでもいうのか？」

「思い出す？」

「最初から魔女なんてもんじやないだろ、それを思い出せつて言つてるんだよ」

「いいかげんに、黙れ」

魔女は押し殺した低い声で言つと、環に手を向けた。それと同時に凄まじい衝撃波が環に襲いかかった。

環はその衝撃波を腕をクロスさせて受け止めた。

「話はちゃんと」じりじりと衝撃波によつて環の体が押されていった。「最後までするものだぜ！」

腕を開くと同時に気合と魔力を一気に放出し、衝撃波を吹き飛ば

した。

「まったく、そっちがその気なら話す気になるまで付き合つてやるうじゃないかって、おっと！」

魔女はいつの間にか環の目の前まで迫り、再び衝撃波を放とうと腕を突き出した。環もそれに大して腕を突き出し叫んだ。

「バースト！」

衝撃波と爆発が互いに相殺しあつた。環はすぐに蹴りを繰り出したが、魔女はそれを一步後ろに下がつてかわした。そして腕を空に突き上げた。

「スケルトン、集え」

その声に応えて、スケルトン達が一斉に魔女の背後に集まるように動き出した。

「贊をささげる」

闇としか形容しようがないものが現われ、次々に集まるスケルトンを吸い込むように飲み込んでいった。最後に魔女もその闇に飛び込んでいった。しかし、環がバーストの爆発で飛び、それを阻止した。

環に抱えられた魔女に、初めて表情らしいものが浮かんだ。それは怒りだった。

「放せ、これでは召喚が完成しない」

「そんなもん知るかよ。あんた人間なんだろ、あんなわけのわからんものに飲みこませるわけにはいかないな」

「放せと言つているんだ」

「うおつ！」

着地すると同時に、魔女の衝撃波で環は吹き飛ばされた。魔女は全てのスケルトンを飲み込んだ闇に走り出しだが、闇はどんどん小さくなつていった。

「やめとけ、間に合わない」

環は立ち上がりながらそう言つた。その通りに闇は魔女を飲み込むことなく消えた。

「これで防げたと思うな」

魔女は闇があつた場所に手を置いた。

「闇の力よ、贊に捧げた魂を喰らえ。そして魂の代価を今ここに現せ」

地響きと共に再び闇が地面に広がり、そこから巨大なスケルトンの頭部が現われ始めた。

「おいおい、骸骨飲み込んで巨大化とか、勘弁してもらいたいな」ウンザリしたような様子で呆れながら環はその光景を見つめた。頭、肩、胸、腰、足と巨大スケルトンはその姿を現していった。

「こいつは20メートルはありそうだな、魔女さんよ」

「不完全だが、貴様をつぶすには十分だ」

魔女が環に向かって腕を振り下ろすと、巨大スケルトンは動き出した。団体のわりに早い動きで環に迫り、踏み潰そうと足を上げた。環はそれを正面から受け止めた。

「ぐつ、さすがに重いな」環は今にも潰されそうに悶わらずにやりと笑った。「ちょっと試してみるか」

環は目をつぶつて小さな声でつぶやき始めた。

「魔力は力だ。その力の流れをうまく体の中でコントロールすることができれば、それを自分の力として使うことができるはず」

スケルトンの足が完全に止まり、逆に押し返され始めた。

「おおおおおおおおおお！」

気合と共に一気にスケルトンが押し返された。

「一気に潰すぜ！ バースト！」

环は爆発を利用して一気に飛び上がり巨大スケルトンの顔面を殴りつけた。その巨体が揺らぎ、ゆっくりと倒れていった。环は着地するとすぐにその倒れる影に入り、両手をかざした。

「砕け散れ！ バアアアアアアストオオオオオ！」

环に向かつて倒れこんだ巨大スケルトンは、爆発で粉々に砕け散つた。あつという間のできごとに、魔女は何もできずに見ているだけだった。

「さて、どうする魔女さん。あなたのペットは片付けたぜ。それとも名前を聞かせてもらおうか」

「いいかげんに、しろー！」

魔女は激昂して環に襲いかかってきた。環はそれをいなしながら楽しそうにしていた。

「だいぶ人間らしくなってきたな。その調子でもっと頼むよ」魔女の衝撃波をかわしながら、環は間合いを詰めていった。そして魔女の顔の前に手を突きつけた。

「このまま消し飛ばされたいか？」

一瞬魔女の顔に恐怖が浮かんだのを環は見逃さなかつた。手を引つ込めて環は魔女と距離をとつた。

「怖がることができるんなら應えてもらいたいね。あなたは何者なのか、なんで魔女なんて呼ばれてるのか」

「なぜ、そんなことを、聞く？」

「なぜって？ 勘だよ。どうもあなたには何かありそうな気がしてしょうがない。ひょっとしたら、あなたにもわからないことなのかもしぬれないのでな」

「わからない」魔女は頭を押されてうめいた。「わからないわからない！」

苦しむ魔女を環は黙つて見ていた。魔女はしばらく苦しんでいたが、膝をついて肩で息をすると、すっかり乱れた顔で環をにらみつけた。

「貴様だ、貴様がいるからわたしが苦しむんだ」

「かもしれない。でも俺がいなかつたらあんたはもっと多くの人を苦しめてたんだろうな。それよりはましだろう」

「人を苦しめる？ 違う、わたしは違う。そんなこと望んでいない、いなかつたはず」魔女はいきなり立ち上がり叫んだ。「あああああああああああああああああああああああああああああああああ！」

魔女は取り乱して環に向かつてただまつすぐに走った。環はそれに指を向けた。

「アーティストが歌詞を書く」とは

## もう1人の勇者

スケルトンの襲撃から数日、王国は上から下まで大騒ぎだった。スケルトンの軍団を1人で壊滅させた勇者タマキの存在がその原因だった。そして問題を複雑にしているのは環が連れてきた魔女の存在だった。

そんな中、エバンス、ロレンザ、バーンズの3人はエバンスの私室に集まっていた。

「タマキ様の力は我々の想像以上のものだったようですね」

まずロレンザが口を開いた。バーンズはそれにはうなずいた。

「確かに想像以上でしたね。カレン殿は予想していたようですが」「バーンズ、お前の目からはどう見えた?」

「魔法の威力は凄まじいものでしたし、その動きも常人離れしていました。キングスケルトンを一撃で殴り倒してしまってほどです。ほとんど雑魚を相手にしているように見えました」

「話を聞けば聞くほどすごいな、タマキは。それだけの力があれば魔女を倒してしまうのは簡単だつただろうがな。なぜ生け捕りにしたのだ?」

「カレンが聞いた話では、勘だと言つていたそうです」

「勘か、いい勘だ。だが、そのおかげで知られたくないことを知られることになつてしまつたな」

「エバンス様、それに関して王様はなんとおっしゃつているのですか?」

ロレンザの質問にエバンスは難しい顔をした。

「父上はまだ態度をはつきりさせていないが、魔女を始末してしまえという意見もあるらしい」

「そのようなことをすれば余計な疑念をまねくだけではないでしょうか? タマキ様は何かを感じたからこそ、魔女を倒さずに捕らえてきたのでしょうか。いつのこと、全てをお話するべきなのでは?」

「私もロレンザ殿に同感です。あれだけの力を持つ勇者様に下手な小細工を弄すべきではないかと」

「そうだな、タマキはいい男に思えるし、余計なことで距離を作ることはしたくないものだ。魔女の正体を明かしてもいいかもしねないな」

3人は黙つて考え込んだ。そこでドアがノックされた。

「エバンス様、カレンです」

「カレンか、入れ」

「失礼いたします」

カレンは頭を下げて部屋に入ってきた。

「タマキの様子はどうだ？」

「今は自室でお休みになつています」

「そうか。カレンよ、タマキのことに関してお前の意見を聞かせてもらいたいのだが」

「はい」

「タマキは魔女の正体に関して何か言つていたか？」

「いえ。タマキ様はただ魔女が無事かどうかということだけを気にされています。今回はほかに気にする必要がある人間はいませんので」

「そういえば、タマキはこの町を守れるかと、出撃前にそう聞いていたな。彼が戦うのは、ただ守るためか」

「戦うのを楽しんでいたのなら、魔女を生かしておくことなどしなかつたはずです」

「どんなに大きな力を持つしていても、それに溺れず、自分の信念を貫く人間なのだろうな。私も、誠意を持って接するしかあるまい。カレン、今からタマキに会いに行くぞ」

「はい、エバンス様」

4人は部屋から出て行つた。

環はベッドに寝転がつて上を見ていた。あの朝、家を出たと思つ

たら、変な世界に足を踏み入れて、魔法やら骸骨の化物やら、あつという間に色々なことが襲いかかって来た。

それでも誰も傷つけずに済んだ。化物はずいぶん倒したが、あれは生物とは言えないのは戦つてみてよくわかった。そしてあの魔女とかいう人は何だったのか。何かに操られているように見えた。まだ意識は戻っていないらしい。

環は自分の右手を顔の前にもつてきて、それをじっと見つめた。これからこの手で何をする事になるのかと、思わずためいきが出た。魔力のせいか体は疲れていないが、なにか心に隙間が生まれているような妙な感覚があった。

「タマキ様、カレンです。起きていらっしゃいますか？」

環の思考はカレンの声で遮られた。

「ああ、起きてるよ。鍵はかけてない」

カレンがドアを開けてエバンスを室内に導いた。環は体を起こした。エバンスはソファーに腰をおろした。

「タマキ、休んでいるところをすまないな」

「いや、別にいいよ。それで、何の用かな？」

「ちょっと話がしたいと思つたのだが。かまわぬいか？」

「ああ、別にいいよ」

「圧倒的な戦いぶりだったが、タマキは元の世界では何をしていたのだ？」

「別にただの学生で、勉強してただけだよ。喧嘩ならともかく、あんな化物は相手にしたことにはなかつたね」

「勉学をしていたのか。しかし、戦いが怖いとは思わなかつたのか？」

？」

「怖い？ そういえば全然思わなかつたな。なんでだらう？」

「タマキがそれだけ胆力があつたということだらう」

エバンスはそう言って笑つたが、カレンは少し顔をしかめた。環はそれに気がついた。

「カレン、俺何かまずいことを言つたかな」

「いえ、なにも」

「それよりタマキ、なぜあの魔女を捕らえてきたのだ？」

「なんとなくだよ。人間みたいだし、何か様子がおかしかったからね。事情がありそうじゃないか」

「事情か」エバンスは腕を組んで少し考え込むような表情になつたが、すぐに意を決したような表情に変わつた。「事情は大いにあるのだ。しかもタマキ、君に関係がある」

「本来は君にこれを話すかは、今父上達が討議しているところだ。だが、我々のために戦つてくれた君には知る権利がある」「知る権利っていうのは、何を？」

「魔女の正体だ」

「それを何で？」

「魔女というのは元々、タマキと同じ世界から我々が召喚した勇者なのだ」

「それはつまり、いや、なんでこんなことになつてるんだよ」

環は少々取り乱していた。エバンスはそれにかまうことなく話を続けた。

「彼女はミヤザキヨウコと名乗っていた。君ほどではないが優れた力を持つていて、我々に協力してくれたのだが、闇王に敗れて捕らえられてしまつたのだ」

「それで魔女になつて敵として現われたつていうわけなのか」

「そうだ。だが君が取り戻した」

「なるほど。何かあるとは思つたけど、そういうことだったのか。でもなんでそれを隠してたんだ？」

「以前に勇者がいて、しかもその勇者が敗れていたなど、言えるものではない」

「それはまあ、言いたくないだろうけどさ。それはちょっととな、気分が悪いよ。ひょっとして同郷の人間を殺すところだつたんだぞ。カレンも知つてたんなら言ってくれよ」「もうしわけありませんでした」

カレンは素直に謝罪の言葉を口にして頭を下げた。エバンスはそれを見て自分も頭を下げた。

「カレンを責めないでほしい。」これは我々の総意だったのだ

「わかつたよ。それで魔女、じゃなくてミヤザキさんはどうなるの？」

「まだわからない。しかし、こつしてタマキに真実を知らせた以上、処刑などということはないはずだ」

「処刑つて、そんなことやつたら暴れるよ、俺は」

「タマキ様が暴れたらこの国は滅んでしまいますので、どうか自重してください」

「ああ、そうならないと約束する。私が監を説得しよう。なに、タマキが暴れると言えば納得しない者はいまい」

エバンスはさわやかに笑い立ち上がった。

「カレン、タマキを頼む。必要なことはなんでも手配してくれ」「はい、エバンス様」

カレンの返事にうなずいて、エバンスは部屋を出て行つた。環は緊張の糸が切れたのか、ベッドに倒れこんだ。

「ところでタマキ様、今着てらっしゃる服ですが、だいぶ傷んでしまっているようですね」

「ああ、そうかな。あれだけ派手にやつたわりには大丈夫みたいだけど」

「預けていただければ、同じものはできませんが、似たものなら作ることはできます」

「できるの？」環はブレザーを脱いだ。「じゃあとりあえず、このブレザーだけよろしく。あと、ミヤザキさんの見舞いに行こうと思ふんだけど、案内頼むよ」

「はい、じ案内いたします」

カレンはブレザーを受け取り、環の手をとつた。

「いや、いちいち手をひいてくれなくても」

「そのほうが確実ですから」

## 聖なる泉へ

「失礼します」

環はそう言つてドアを開けた。部屋には数人の侍女らしき人がいた。カレンが目で合図をすると、侍女達は礼をして部屋から出て行った。

環は黙つてベッドのそばまで歩いていくと、そこで寝ているヨウコの顔を見た。

「意識は戻つてないんだな」

「はい、医者の話では命に別状はないようですが、闇王の呪縛から解き放たれたのはヨウコ様が初めてですからくわしいことは何もわかりません」

「でも案外簡単に目を覚ましそうに見えたんだけどな」

「それはタマキ様の巨大すぎる魔力が呪縛に影響を与えたのだと思います」

「それじゃあ俺の魔力を注ぎ込めば目を覚まさせることができるんじゃないかな？」

「おやめください。最悪命に関わります」

「駄目か。じゃあ、どうすれば目を覚まさせることができるんだろうな」

「ロレンザ様なら何かご存知かもしません」

「あの最初に魔法を教えてくれた人か。賢者さんてやつ？」

「賢者？ そうですね、そう呼ぶのもいいかもしれません。今度からそうしよう」

「じゃ、行こう」

2人は部屋から出て、祭壇のあるホールに向かった。ホールではロレンザが分厚い本を開いて何かを調べていた。

「賢者ロレンザ様、タマキ様が伺いたいことがあるそうです」

「賢者とは何事ですか？ カレン」

ロレンザは軽く笑つて振り向いた。

「ミウ「さんのことで聞きたいことがあるんだ。あの人の目を覚ます方法は何かないのかな」

「目を覚ます方法ですか。今ちょうど調べていたところです」

「それで、何かわかつたりしたのかな」

「ええ、これは我が国に古くから伝わる伝説ですが、北にある森の中心に、精靈の泉というものがあります。その泉には邪悪な力を淨化する力があるというものです」

「精靈の泉ね。そういうことならわざと行くひじやないか。場所は？」

「タマキ様、少々急ぎすぎではないでしょうか」

「いや、そんなことはない」カレンの質問に環は首を横に振った。  
「闇王つてのがまだいるんだろ、いつ攻めてくるかわかつたもんじやないし、それにミヤザキさんだつてほつといいたらどうなるかわからぬじやないか」

「たしかにそうかもしだせませんね。ですが、それには一つ問題があります」

「問題？」

ロレンザの言葉に環は首をかしげた。

「精靈の泉が応えるのは精靈の加護を受けた者だけです」

「精靈の加護つていうのは、それは誰なんだい」

「エバンス様です」

「つまり、王子さんに同行してもらわないといけないのか。それは面倒くさいことになりそうだ」

「残念ですが、それほど面倒なことにはなりません」カレンは大して残念でもなさそうに言つた。「エバンス様であれば喜んで同行するかと」

「そうなの？」

環の疑問にロレンザは笑顔でうなずいた。

「はい、その通りです」

3人はエバンスを探して城内を歩いていた。なぜかカレンはその居場所がわかるようで、環の手をひきながら、迷うことなく進んでいった。

「カレン、本当にこっちにエバンスがいるのか」

「はい、この時間は庭園にいらっしゃいます」

「庭園、そんなものまであるんだ」

「もちろんです。ところでタマキ様、それよりも新しい魔法を契約していただかなくてはいけません」

「魔法か、確かに2種類じゃ寂しいよな。あと何種類ぐらい覚えればいいの」

「あと6種は契約していただきます」

「6種類か、それって大変?」

「大丈夫ですよ」ロレンザはスペルカードを取り出して微笑んだ。

「タマキ様ほどの魔力があるなら、簡単にできることです」

「そつか、じゃあ庭園で練習できるかな」

「それはご遠慮願います」

「わかつたよ」

カレンにたしなめられて環はうなだれた。そうこいつしているうちに、庭園に到着した。そこにはカレンの言つた通り、エバンスがいた。花の手入れをしているようで、環達には気がついていないようだった。

「土いじりって楽しい?」

環が声をかけると、エバンスは振り向いた。穏やかな顔をしていた。

「楽しいぞ。それより3人揃つてどうしたのだ」

「エバンス様、ヨウコ様のことで新しくわかったことがあるのです

「わかつたこととはなんだ? ロレンザ」

「ヨウコ様は眠ったまま目を覚ます気配がありません。しかし目を覚ますことができる方法が見つかりました」

「精靈の泉か

「はい」

「私の出番のようだな」

「ですが、いいのですか？　今はそういうできる状況ではないと思いますが」

「我々を救えるのはタマキだけだ。だから、その願いをかなえるのは何よりも最優先にすべきだ。これは信義の問題なのだから」

「さすがエバンス。わかつてらつしゃる」

環は満面の笑みでエバンスの肩を叩いた。

「ああ、邪魔がはいらぬうちにさっそく出発しよう」

「また王や大臣達が色々と心配されると思こますが」

カレンのつっこみに、エバンスは首を横に振った。

「かまわん。今はそんなことよりやるべきことがあるのだ。行こう

タマキ」

「おお、早速出発だ」

「カレン、バーンズを呼んできてくれ。裏の門に集まる」とこしょう

「はい、ただちに」

カレンは音もなくその場を去つていった。

「さて、ヨウゴを乗つけていくための車を用意しよう。タマキは一緒に来てくれ、ロレンザは裏の門までヨウゴを連れてきてくれ」

しばらくして、一行は城の裏の門に集まった。

「準備はいいな」

「ちょっと質問なんだけど、精靈の泉ってどれくらい遠いのかな。

あと馬車で行けるの？」

「ゆっくり行つても日が沈む前に帰つてこられる程度の距離だ。道もあるから馬車も通れるし、特に危険もない」

「そつか、それならわかつてと出発だ」

「タマキ様」

早速歩き出そうとした環をカレンが止めた。

「タマキ様は馬車に乗ってください。到着までにスペルカードの契約を済ませてしまいましょう」

「みんな乗らないのか？」

環の言葉にエバンスは首を横に振った。

「私は歩く、こんな機会でもないとなかなか森を歩きまわることもできないからな。バーンズ、御者を頼む。ロレンザはタマキと一緒に後ろに乗ってくれ」

ロレンザとバーンスは言われた通りにした。環とカレンもロレンザに続いて馬車に乗り込んだ。馬車の内部はヨウコが寝かされていて、あと3人も入るとほぼ満員だった。カレンは6枚のスペルカードを取り出して環に手渡した。

「これはそれぞれどんな魔法なのかな」

「それは私から説明いたしましょう。まず一番上のカードはアイスバイト、氷の牙を出現させます。次がファイアボール、これは爆発する火の玉を作り出します」

「うんうん、それでこの3枚目は？」

「それはライトニングボルト、雷の矢を作り出します。次はプロテクション、それは魔法の盾を作り出します」

「魔法の盾？ ストーンスキンとはどう違うの？」

「ストーンスキンは直接体の防御力を高める魔法ですが、プロテクションはあくまでも魔法の盾です。ストーンスキンでは炎や氷、雷にはそれほどの効果はありませんが、プロテクションを使えばそれらも全て防ぐことができます」

「そりやすごい、それでこの最後の2枚のカードは」

「1つはヒーリング、体力の回復をする魔法です。軽傷ならばすぐ治すことも可能です。そしてもう一つがマイティ、身体能力を向上させます」

「身体能力の向上か。あのでかい骸骨と戦った時は魔力を使ってすごい力が出せたんだけど、それと同じかな」

「いえ、マイティではそこまでの力は出せません。しかし、マイティならば一度使えばしばらくの間は有効ですし、他人にかけることもできるのです」

「確かに、あのやりかたは瞬間的にしか使えないみたいだもんな。他人にもかけられるのも便利そうだ。魔法様々」

カレンはその環の言葉にうなずいた。

「その通りです。タマキ様は非常識な魔力をお持ちですが、それもまたに使わなければ効率は悪いですし、制御を失敗することもあるかもしれません」

「なるほどね。しつかり覚えないといけないんだな」

## 泉の精霊と闇の気配

泉までの道のりはのんびりしたものだつた。環は魔法の契約を済ませ、周囲に被害が及ばない種類のものを練習していた。

「よし、プロテクション」

環は自分をの前に壁を作り出すイメージでプロテクションを使つたのだが、そのイメージ通りにはいかずに、馬車全体を覆つほど巨大な魔力の盾が出現した。

「ちょっとでかすぎだな」

「ちょっとどどころではありませんね。プロテクションはイメージ通りに展開できなければ使いにくい魔法ですよ」

環はプロテクションを解除して難しい顔をした。

「そうなの？ でかいほうがいいような気がするけど

「大きければ魔力の消費も激しくなりますし、維持するのも大変になります。それにプロテクションは1点でも破られてしまつと消失してしまいます」

カレンの説明に環は納得したように何度も首を縦に振つた。

「なるほどなるほど。確かにあのサイズをずっと集中して維持するのは戦いながらだと難しそうだよな。ロレンザさん、何かコツみたいなのはないの？」

「コツ、ですか」ロレンザは両手を前に突き出した。「プロテクション」

突き出した両手の間に円状の魔法の盾が出現した。

「こうして、手の間に作るようになると、イメージしやすく、比較的簡単にできると思います」

「こうかな」環はロレンザと同じように両手を突き出した。「プロテクション」

形は多少いびつだが、環の両手の間に魔法の盾が出現した。それはロレンザのプロテクションよりも強い輝きを放つていた。

「おお、できた」

「ライトニングボルト」

その盾に向かっていきなりカレンがライトニングボルトを放った。

それは魔法の盾に当たり消失した。

「カレン、いきなりそれはきついって」

「うまくいっているかは実際に試すのが一番ですから。それにタマキ様ならば大丈夫でしょう」

「いや、駄目だつて」

「タマキ、着いたぞ」

そうしているうちに、馬車が止まってエバンスが外から声をかけてきた。タマキは口ウロを抱えて馬車から降りた。その目の前には小さな泉があった。透き通るような泉は、確かに普通ではない存在が感じられた。

「これが精霊の泉か」

「そうだ、美しい泉だろう。我が王家の守護を司る存在でもある」

「それで、精霊っていうのははどういって？」

「まあ見ていてくれ」

そう言つとエバンスは泉に足を踏み入れて、どんどん歩いていった。腰辺りの深さのあるところまで歩くと立ち止まった。

「なあカレン、エバンスは何をしようとしてるんだ？」

「精霊に語りかけているんです。見ていればわかりますよ」

環はエバンスに注目した。立っているエバンスを中心に波紋が広がっていくのが見えた。さらに、水が霧状になりゅっくりとエバンスの体を包み込んでいった。そしてその霧は次第に人のような形を作つていった。

「あれは？」

「精霊がエバンス様の体を借りて姿を現そうとしているのです」

ロレンザは落ち着いた様子で環に解説をした。そうしているうちにも霧はほぼ人間のような形になつた。大きさは人間の2倍ほどで、霧で出来たシルエットという感じのものだつた。

「異界からの勇者よ、よく来た」

泉全体からこの世のものではない声が聞こえた。

「あんたが精霊さんか。今日は頼みがあつてきただ」

「わかつていい、今我が子から聞かせてもらつた。勇者よ、その娘を我がもとに」

環はヨウコを抱えたまま泉に足を踏み入れた。精霊は手にあたる部分を伸ばしヨウコを包みこんだ。環は手を放しヨウコの体を精霊にゆだねて、泉から出た。

「どれくらいでミヤザキさんは田が覚めるの?」

「これは、少し時間がかかるであろう。いや、待て」精霊の声が少し緊張を帯びたものになつた。「ひとつやら森に邪悪な存在が足を踏み入れたようだ」

「邪悪な者つて、どれくらい?」

「いくつだ」

「タマキ様、ちょうどいい実践練習ができるのですよ。ただ、使うのはバーストとアイスバイトだけにしていただけますか?」

「なんでもた」

「タマキ様の魔力でほかの攻撃魔法を使われたら火事になつてしまします」

「たしかにそうだな。わかつた、いい実践練習になりそうだし、ちよつと行ってみよう。それで精霊さん、その闇の手の者つていうのはどこにいるかわかるかな」

「焦ることはない。邪悪な気配はここを目標してきてる」「そういうことなら、ここで迎え撃とうか」

環の提案にカレンはうなずいた。

「勇者様、我らにできることなありませんか?」

バーンズは環にそう聞いた。環は少し考えるようになり、あいに手を当てる。

「みんなは馬車とエバンスを守ってくれないかな」

「了解しました」

3人は馬車とエバンスを守るために後ろに下がった。環はそれを確認すると、邪悪な気配というのを迎え撃つために道のど真ん中に立つた。

「あれが邪悪な気配つてやつの正体か」

環の視線の先には数十体の異形の魔物達がいた。スケルトンやらその他人間とも他の動物とも全く違う禍々しい連中だった。

「スケルトンにピットデーモン、オーガもいますね」

「カレン、なんでここにいるの。いや、まあいいか、あの小さいのがピットデーモン?」

「そうです、素早い動きに注意してください。あの巨体がオーガですね、見ての通り、力が強い魔物です」

「あとなんか浮いてる霞んだボロきれみたいなのもいるけど」

「イビルミストですね。魔法を使う魔物で普通の攻撃はなかなか効きません」

「それじゃとりあえず、アイスバイト!」

環が腕を振ると氷の牙が3つ出現し、魔物達に向かつて飛び出していった。そして激突。ピットデーモン数体とスケルトン数体がその餌食になつた。

「まずまず。じゃ、次は」

成果を確認している環に向かつて、イビルミストからお返しがうわけなのか、氷の牙が放たれた。

「プロテクション!」

それは魔法の盾に阻まれ砕け散つた。そのまま盾を展開したまま、環は走り出した。

「こいつも試してみるか、マイティ!」

身体能力が強化され、環の走るスピードは更に早くなつた。その間もイビルミストからの攻撃はやまなかつた。しかし、それはことごとく魔法の盾に阻まれた。さらにピットデーモンが襲いかかってきたが、それは一気に跳躍してかわした。

「まずはボロきれからだ、バースト！」

爆発がイルミストを吹き飛ばした。環が着地するタイミングで、

オーガが腕を振るつた。

「ストーンスキン！」

それを環は腕を上げて防いだ。マイティで強化された力はその一撃を受け止め、踏み止まることができた。

「なるほど、マイティで出せる力はこれくらいか。それじゃ、環の体内で魔力が一気に膨れ上がった。「終わりにさせてもらう！」

オーガは蹴りの一発で吹き飛ばされた。それに巻き込まれたスケルトンとピットデーモンが潰れた。残った魔物が環を囲んで一気に飛びかかった。

「バースト！」

飛びかかってきた魔物は残らず吹き飛ばされ、あとはオーガを残すのみになつた。なんとかさつきの蹴りのダメージから立ち上がり、オーガは環に向かつて突っ込んできた。

「いくぞ、アイスバイト！」

複数放つたものとは比べものにならないサイズの氷の牙がオーガに向かつて飛び、その体を貫いた。

「さすがタマキ様です。実戦に強いですね」

「そちらしいね。じゃ、戻ろう」

そうして、環とカレンが泉に戻ると、エバンスはすでに泉から出ていた。

「なんだタマキ、早かつたな」

「まあ、あんまり數も大したことなかつたからね。それで、ミヤザキさんは？」

「彼女はまだ目覚めていないが、もう大丈夫だ。それよりも、この森に魔族が侵入したというのは気になるな、早く戻つたほうがよさそうだ。みんな馬車に乗り込め」

「いや、俺は一足先に戻るよ。なんか嫌な感じがするんだ」

「そうか、頼む」

「じゃ、一足先に行つてきます」  
環はそう言って、バーストで跳んでいった。

## 闇王

城に戻つた環を待つていたのは燃えさかる城下町だつた。環は急いで城壁に登りその状況を見渡した。不思議なことに魔物の軍勢は全く見当たらなかつた。環は手近にいる兵士をつかまえた。

「一体何があつたんだ？」

「勇者様、闇王が、闇王が攻めてきたんです！」

「闇王か」環が再び城下町を見渡すと、城壁に近い位置で爆発が起つた。「あそこか、バースト！」

一気に爆発があつたところまで跳ぶと、そこには姿は人間に似ているが、まとつている雰囲気が全く違つ何者かがいた。

「あんた、闇王つて奴かい？」

「なんだ貴様は？　いや待て、人間ではありえない魔力だ。ということは貴様も人間どもが呼んだ勇者か？」

「そう、あんたを倒すために呼ばれたつてやつ。ここで会えてちょうどよかつたよ」

「ほう、どうするつもりだ？」

「悪いけど、倒させてもらう」

環はそう言って闇王に指を突きつけた。

「前の勇者よりもできるようだが、貴様に何ができる。前の人間と同じようにしてやろ」

闇王は環のことを嘲つた。環はそれを黙つて受け止めてから、全身に魔力を溢れさせて闇王をにらみつけた。

「黙つてもらいたね、まずはストーンスキン！」

魔力が一気に開放された。

「バアアアアストオ！」バーストの爆風で加速された環が一直線に闇王に突つ込んでいく。「くらええええ！」

「ぬるい！」

轟音。そして砂煙。その砂煙が晴れると、あれだけの勢いで突つ

込んだ環は闇王の片手で弾き飛ばされていた。城壁にめりこんだ環はそれでも何事もなかつたかのようにそこから抜け出した。

「さすがにやるな。そうこなくちやこつちも張り合いかないつてもんだ」環は手を挑発するようにクイクイと動かした。「突つ立つてないでそつちからこいよ」

「ならそうしてやろう」

瞬時に闇王は環の目の前に現われた。そして手をかざした。

「燃え尽きろ」

「バーストオ！」

闇王の手から炎が噴出すると同時に環のバーストが炸裂した。互いに相殺しあい爆風と熱風が吹き荒れた。しかし2人は止まらない。環が横に跳ぶと闇王は後ろに飛び、連続で火の玉を放つた。

「アイスバイト！」

鋭利な氷の牙が次々にファイアボールを貫いて消していく。環は休まず次の魔法を放つ。

「お返しだ！ ぶつつけ本番ファイアボール！」

だがそのファイアボールはあっさりと闇王に握りつぶされた。2人の動きが止まり、闇王はつまらなそうに鼻をならした。

「少しほどけるようだな、人間」

「それはどうも」

「貴様のことは覚えておいてやろう、無駄なあがきをした人間としてな」

「無駄かどうかはわからないぜ」

「たわごとを」

闇王は腕を一振りした。たちまち環を炎の壁が包み込む。しかし環は落ち着いている。「さすがに派手な魔法だな、バースト！」爆風で炎を消し飛ばした。はずだつたが、炎の壁はすぐにその形を取り戻した。闇王は右手を上げてその手を握った。炎の壁が環を飲み込むように動き出した。

「もういっちょバーストッ！」

「逃がさん！」

爆風で上に逃れた環に闇王は雷の矢を数本放つた。雷の矢が環の体を貫こうという時、両手を前に突き出した。

「プロテクション！」

雷の矢は魔法の盾に阻まれて凄まじい放電と共に消失した。そのまま環は勢いよく地面に墜落氣味の着地をした。

「やれやれ、今のはけつこう危なかつたぜ」

ゆらりと立ち上がる環を闇王は無言で見据えた。

「貴様、本当に人間か？ そんな戦いかたは見たことがない」

「ま、これは俺だけのやりかだから、あんたが見たことなんであるわけがないぜ」

「そうか、だがこの私にはおよばない」

「いや、人間の力を見せてやる！」

環は右手を高々とかかげた。

「マイティ！ いくぜ！ バースト！」

爆風と共に闇王に突っ込んでいく環。闇王はその場から動かず、腰を落としてかまえた。環は体内の魔力を全力で集中して拳を叩き込んだ。環の右手と闇王の左手が激突した。衝撃が2人の間に起つた。互角のように見えたが、勢いのついた環を動かすに止めた闇王が明らかに優勢だつた。

「まだまだだ！」そして左手を闇王に向かつて突き出した。「ぶつつけ本番その2、ライトニング！ ボルトー！」

「甘い」

闇王は右手を突き出し、魔法の障壁を発生させた。環の放つた雷の矢はその障壁に受け止められた。

「止めさせるかよ！」

障壁に受け止められた雷の矢にさらに魔力が込められる。輝きと放電が勢いを増していき、障壁に亀裂が走つた。

「ちつ」

闇王が飛びのくのと障壁が崩壊するのは同時だつた。環はそれを

すぐに追いかけた。

「力比べといこうじゃないか」

そしてがつちりと手四つに組み合つた。

「貴様は無謀な奴だな」

「そうでもないかもしないぜ！ うおおおおおおおおおおおお！」  
環は魔力を全快にして全力で闇王を押しつぶそうと力を込めた。  
2人の魔力が激突して、強力な衝撃波が発生した。大地そのものを  
きしませるようなパワーのぶつかり合いは両者とも一步も退かない。  
「はああああああ！」

しかし徐々に環の魔力が増大していく。闇王は徐々に押されてい  
く。

「バアアアアアアストオ！」

爆風で闇王は弾き飛ばされ、壁に叩きつけられた。環はさすがに  
消耗したようで、追い討ちをかけることができず、膝に手を置いて  
それを睨みつけた。闇王はゆっくりと立ち上がった。

「なるほど、大したものだ。私も本氣を出さねばなるまい」

そして1枚のカードを取り出した。それには禍々しい悪魔が描か  
れていた。

「今、血の盟約行使せよ。ダークデーモン！」

闇王の足元に血の渦が広がっていく。闇王はそれに飲み込まれて  
いった。全身が飲み込まれると、血の渦は逆に回転しながら、恐る  
べき悪魔の頭部がそこから出てきた。それは環の10倍以上の巨大  
さがあった。

「これは、参ったな」

さすがの環も数歩後ずさつた。悪魔はどんどん姿を現し、その異  
様な姿が明らかになつていった。

血のような皮膚の色に太い尻尾、山羊と人間を混ぜたような禍々  
しい顔。巨大な戦斧と鎖を持ったその姿は、悪魔という言葉すらか  
すんで見えるものだつた。

「人間よ、恐怖するがいい。貴様に勝利はない」

地の底から響くような声がダークモンから発せられた。

「恐怖？ 不思議とそんなものは感じないんだよ。それに、やってみなくちゃわかんないんだろ」

「無駄なことだ！」

ダークモンは鎖を環めがけて叩きつけた。環は横に跳んでそれを避けたが、すぐにダークモンの足が襲いかかってきた。

「ぐつ」

ただ振り上げただけの蹴りだったが、環はそれをまともにくらつて再び城壁に叩きつけられた。こんどは城壁にめりこむどころではなく、一部城壁が崩れた。

「まったく」城壁に埋もれていた環はゆっくりと立ち上がった。「すごい力だよ。正面から殴りあつても勝ち目はないな、これは」

「ならば逃げ出すといい。命が惜しいであろう」

「だけどな、あいにくここを通すわけにはいかないんだよ。それに、

こっちにも切り札の1つや2つはある」

環はこんな状況にも関わらず、笑った。

## 切り札と決着

ダークデーモンと対峙する環は意識を集中し、全身に魔力を行き渡らせた。

「さて、本格的に始めようじゃないか」

「すぐに終わる」

言葉と共に、ダークデーモンは戦斧を薙ぎ払った。

「バースト！」

環は爆発で跳びあがりそれをかわすと同時に、ダークデーモンの顔面を蹴り飛ばした。さらにその顔面めがけて手をかざした。

「おまけだ、ファイアボール！」

火の玉がその顔面を襲つた。ダークデーモンは少しよろめいたが、すぐに体勢を立て直し落下中の環を鎌で打とうとした。

「アイスバイト！」

複数の氷の牙が鎌の軌道を変え、空振りになつた。環は着地と同時にすぐにダークデーモンの足元に走りこんだ。

「でかい奴は足元からつてな、バアアアアアアスト！」

膝の裏あたりに1発バーストを放ち、追撃をかけようとした。だが、そこに尻尾が降つてきてそれをなんとかかわすだけになつた。そこに戦斧が振り下ろされ、それを両手をクロスして地面にめりこみながらもなんとか受け止めた。

「ほう、この斧で断ちきれんか」

「ああ、ちょっと心配だったけどな、ぐつ」

さらに戦斧に力がこめられ、環は膝をついた。なんとかもちこたえるのが精一杯だったが、それでもまだ、その表情には余裕があつた。

「バーストオ！」

爆発の勢いで横に跳んでなんとか戦斧の圧力から逃れた環は、ダークデーモンから距離をとつた。

「どうした？ もう終わりか」

「そう焦るな、これから奥の手を見せてやるよ」

環はダークデーモンに向かつて手をかざした。

「アイスバイト！」だが氷の牙は出現せずに、ただ魔力だけが環の手に集中した。「アイスバイト！ アイスバイト！」

今度は魔力が可視化されるほど凝縮された。環は少し苦しそうな表情を浮かべた。そこにダークデーモンの鎧が襲いかかった。それをなんとかかわし、もう一度手をかざした。

「アイスバイト！」さらに凝縮された魔力をおさえるのに苦労している様子だったが、環はにやりと笑った。「くらえ！ 5倍チャージアイスバイト！」

今までにない巨大な氷の牙が出現した。ダークデーモンはそれを戦斧で受け止めた。

「ぐうおおおお」

しかし、弾き返せずそのまま押し込まれはじめた。すぐに環はその足元に走りこんだ。

「バアアアスト！」

そして押される方向とは逆方向にバーストを炸裂させた。上体を押され足元を逆方向にすぐわれた格好になつた。ダークデーモンは勢いよく頭から倒れた。

「バースト！ 2倍チャージバースト」

環は今までにないほど高く跳びあがり、その顔面めがけて急降下した。

「うまくいくかわからんが」環は全身に魔力をめぐらせ、さつきのチャージと同じ要領でそれを何倍にも増幅した。「さすがにきついが、いくぞおおおお！」

落下の勢いと増幅された魔力による強烈な拳がダークデーモンの顔面に直撃した。凄まじい轟音と土煙が舞い上がり、何も見えなくなつた。すぐにその中から環が弾き飛ばされたが、なんとか着地して踏みとどまつた。

土煙が晴れると、そこには立ち上がりつたダークデーモンがいた。その顔には環の拳による傷がしっかりと刻まれていた。

「今のは少しは効いたみたいだな」

環は肩で息をしながら再び拳を握り締めた。ダークデーモンは大きく口を開けると、そこから炎を吐き出した。

「プロテクション！」

半円状の魔法の盾が環を中心に出現し、炎を遮った。

「精霊の力よ！ 命の水よ！」

突然のエバンスの声と共に大量の水がその炎に襲いかかり、環に襲いかかる炎を遮った。

「タマキ、下がれ！」

その声に応じて環は後ろに跳んだ。声のしたほうを見ると、城壁にエバンスが剣をかまえて立っていた。その横のカレンが一枚のスペルカードを取り出して、タマキに向かつて投げた。

「タマキ様、そのままスペルカードを使つてください」

環は足元に落ちたスペルカードを拾つた。カードには雷の絵が描かれていた。

「それは雷そのものを操る、ライトニングのカードです。強力すぎる所以気をつけて使ってください」

「わかった、ありがたく使わせてもらひよカレン。契約、ライトニング！」

ライトニングのカードが光になり消えるのと同時に、環の体内に今までの魔法とは全く違う魔力の流れが生じた。今までのものが体内の魔力をそのまま魔法に変換するものだとするなら、それは魔力を放出して環境に影響を与える、操るものだと感じられた。

「水よ！」

動き出そうとしたダークデーモンにエバンスが再び水を放つたが、それは簡単に戦斧で退けられた。さらに鎖がエバンスを狙つて振り下ろされようとした。

「そろはいくか！ ライトニングボルト！」

環の放つた雷の矢によつて鎖の軌道はずらされ、鎖はエバンス達から離れた城壁を直撃した。

「2人は下がつてくれ、他の人も城内に！」

「わかつた、頼んだぞタマキ！」

エバンス達が城内に入るのを確認してから、環はダークデーモンに向かつて笑顔を向けた。

「さて、そろそろ決着をつけようと思つんだけだ

「ずいぶんと自信があるようだな、人間」

「自信ね、それほどあるわけでもないんだけど、まあどうあえずやつてみるか」

環は手を空にかかけた。

「ライトニング！」

轟音とともにダークデーモン雷がダークデーモンの持つ戦斧を直撃した。戦斧は手から弾かれ、その足元に落下した。

「加減してこれなら、いける」

環はそうつぶやき、落ちた戦斧に向かつて走った。ダークデーモンは戦斧を拾おうと手を伸ばしていた。

「バースト！」

爆発で一気に加速した環はその手に体当たりをして弾いた。そして体をひねりダークデーモンの背中を正面に捉えた。

「ファイアアボール！」

火の玉が炸裂しダークデーモンは一步よろめいた。環は地面を削りながら着地した。

「まだまだあ！ バアアアスト！」

今度はダークデーモンの後頭部めがけて跳んだ。しかしそこに鎖が振り向きざまに打ちつけられようとした。

「バースト！」

バーストで跳ぶ軌道をわずかに変えた環はそれをかわして、ダークデーモンの顔面に突っ込んでいった。だがその口が開き、炎が吐き出された。

「プロテクション！」

環は魔法の盾を全身を包むように発生させ炎に突っ込んでいいき、そのまま突っ切った。

「甘いぜ！ バースト！ バースト！ 3倍チャージバアアアアアアストオオオオ！」

3倍にチャージしたバーストがダークデーモンの頭部に叩き込まれた。ダークデーモンはよろめき、ゆっくりと倒れていった。そのまま環は城壁の前に着地して振り返って片手を空にかざした。

「ライトニング！」 環は顔をしかめた。「くそつ、1回チャージだけでもきついな。だけど、やるしかない」

ダークデーモンはすでに起き上がり始めていた。

「ライトニング！ ライトニング！ ぐう、くそ！ ライトニング！」

すでにダークデーモンは立ち上がり、戦斧を拾うと環に近づいてきた。

「ライトニング！」 環は片膝をついたが、すぐに立ち上がった。「まだまだ！ ライトニング！ ライトニング！」

真っ向から戦斧が振り下ろされた。環はそれを片手で受けたが、再び片膝をつくことになった。戦斧に力がこめられ、環はさらに押される。だが、ライトニングのチャージは止めない。

「おおおおお！ ライトニング！ ライトニング！」

押しつぶされそうな環に鎧が振るわれた。しかし、その苦しげな表情にも関わらず、改心の笑みを浮かべた。

「10倍、ライトニイイイイイイイ！」

環の絶叫と同時に地面が割れるような轟音が響き、天も割れるような稻妻がダークデーモンを貫いた。

ダークデーモンの動きが止まり、その場に崩れ落ちていった。

ダークティーモンが倒されてから2日が経つた。環はその間、目覚めることもなく眠り続けていた。ベッドの横にはカレンが座つてその様子を見守っていた。そこに、ドアが開かれエバンスが入ってきた。カレンは立ち上がり頭を下げた。

「タマキの様子はどうだ?」

「まだお目覚めになりませんが、心配はないかと思います」

「そうか、あの闇王を打ち倒したのだ。これだけ深く眠るのも当然だろうな」

「はい、ですが、魔力と体力の消耗以外の理由があるような気がします」

「それがなにかはわからないのか?」「わかりません」

カレンがそう言つと、それに答えるように環の目が開いた。  
「ああ、よく寝た」

環は目をこすりながら起き上がつた。それから部屋を見回すと、カレンとエバンスを見て意外そうな顔をした。

「あれ、2人とも何やつてんの?」

「お目覚めですね。体調はいかがですか?」

「体調ならば、つちりかな。ところでどれくらい寝てたのかな」

「2日です。大変ゆつくりとお休みになつていきましたよ」

「そんなに寝てたのか。ところで」環は自分の着ているものを確認した。「俺の服は?」

「新しいものがもう出来上がっていますので、これからお持ちします」

カレンは部屋を出て行つた。エバンスはそれを見送つてからカレンが座つていた椅子に腰を下ろした。

「タマキ、礼を言わせてもらいたい」

「礼？ ああ、闇王つていうのを倒したことね」

「そうだ。まさかあのような悪魔になるとは思わなかつたが」

「確かに、あのダークデーモンつていう化物には驚いたね。あので

かい図体が消えたのも驚いたけど」

「魔族というのはそういうものなのだ。もともと闇と混沌から生まれたものだからかもしれない」

「ふーん。そういえば、あの助けてくれた時の水はなんだつたのかな」

「あれは精霊の力を借りたものだ」

「あの泉の奴ね。それって誰にでもできんの？」

「いや、精霊の加護を受けた者だけだ。数は極めて少ない」

「少ないつていうと10人もいないとか」

「ああそうだ。私とヨウコ、それとあと6人ほどしかいない」

「へえ、少ないな。俺は使えないのかな、それ」

エバンスは首を横に振った。

「生まれた時か、あるいはこちらの世界に召喚された時から決まっているのだ。召喚された時というのは、ヨウコのことで初めてわかつたことなのだが」

「そうなんだ。それで話は変わるんだけど、そのミヤザキさんの様子はどうなの？」

「もう用は覚めている」

「そつか」環は立ち上がった。「それじゃあ挨拶に行こう」

そこにちょうどタイミングよく、カレンが服を持って戻ってきた。

「その前に、まずは着替えをしてはいかがでしょう」

環はその服を受け取つて一通り確認した。

「すごいな、着てきたやつよりもよくできてるくらいだ。誰が作つたの」

「私です」

「カレンはなんでもできるんだな。それじゃ、着替えてさつさと行こうか」

環はゆっくりドアを開けて顔だけ突っ込んだ。

「どうもはじめまして」と

ベッドの上の上体を起こしたヨウコは驚いたような顔をして環を見た。

「は、はじめまして」

ヨウコは慌てて頭を下げる。環はそれを見て、笑顔でうなずきながら部屋に入った。

「その服。といふことはあなたが高崎環さんですか？」

「そう、改めてはじめまして。高崎環つていこます」

「私のほうも改めではじめまして。ミヤザキヨウコです」

「えーっと」環は自分と一緒に畠嶺されてきた紙とペンを取り出し、自分の名前を書いてからヨウコに渡した。「どんな漢字か書いてもらえます?」

富崎葉子。紙には綺麗な字でそう書かれていた。環はそれを見て安心したように息を吐いた。

「やつと名前の書き方がわかった」

「聞いていただければお教えすることもできましたが」

カレンは冷静に言つたが、環はとりあえず聞かなかつたことにした。

「それで、さつやくなんだかど、富崎さんはこいつちに来る前は何をやつてたんですね？　あ、俺は高校生です」

「私は、別に変わったことはない、ただの会社員でした」

「へえ、どんな仕事をしてたんです？」

「IT系の技術職です」

「なるほどなるほど。じゃあ、そろそろじつひでのことの話を始めますか」

環はやつて椅子を3つ引きずりてきて、ベッドの周りに適当に配置した。

「エバンスもカレンも座つて。それじゃ、富崎さん。いひちに来て

からのこと話を聞いてもらえますか？」

「はい。私がこの世界に来たのは3ヶ月前になります。理由は環さんと同じで、勇者として、です」

「それで、魔法とかを教えられて、化物連中と戦うことになつたと」

「そうです。ただ、私はあまり魔法は使えませんでした」

「そういえば、エバンスの話だと、精靈の加護っていうのを受けてるんですよね」

「はい。最初は何かの声が突然聞こえてきて驚きました。でも、エバンスさんのおかげで精靈の声を聞くようになることができて、精靈の力を借りることができるようになつたんです」

「ほー。王子様直々だつたんだ。俺は」環はカレンをちらりと見た。

「かなり強引に仕込まれた気がするけど」

「タマキ様は才能がありますから、英才教育です。結果もしつかりしたものではありませんか」

そう言つたカレンは、完璧なだけにわざとらしい笑顔を見せた。

「あー、わかつた、わかつたよ」

2人のやりとりを見て、葉子は少し笑つた。

「仲がいいんですね。環さんはこの世界に来てまだ1週間くらいしか経つていなんですね」

「え、ああ、そういえばそんなもんしか経つてないんだなあ。骸骨が襲つてきたのはこっちに来た当日だつたし」

「その時、私を助けてくれたんですね」

「あれはけつこうすごかつたなあ」環は笑つた。「でもなんでもんなことになつたんですよ？」

「それはよく覚えていないんです。闇王っていう人、じゃなくて魔物と戦つた時に私は負けてしまつたんです」

それを聞いたエバンスはうつむいて沈痛な表情を浮かべた。

「私が一緒だつたらそんなことにはさせなかつたのだが」

「まあ過ぎたことだし、結果オーライでいいじゃない。でも、どうやって魔族の仲間になんかされたんだろ？」

「それはおそらく、魔族の魂の一部を埋め込まれたのだと思います  
「魂の一部？」

カレンの言葉に環は首をかしげた。

「はい、魔族の魂は混沌と悪意から生まれたものですから、普通の人間がそれを埋め込まれたら、それに飲まれてしまいます」  
「それで、ほとんど魔族みたいになってしまつ、といふことなわけ  
か」

「そうです。魔力は増大しますし、身体能力も格段に上昇します」  
「なるほど、すごい話だ」

環はそう言ってから、葉子とエバンスの顔を交互に見た。

「そんな状況をなんとかしたんだ。すごいね、俺」

「そう、全てタマキのおかげだ。ありがとう」

「本当にありがとうございました」

エバンスと葉子が頭を下げたのを見て、環はとまどつたような表情になつた。

「まあまあ、そんなかしこまるもんじゃないって。俺は状況に流されてやつただけだし。それにしても2人とも息が合つてるね」  
環がそう言つと、エバンスと葉子は田を見合わせて微笑を浮かべた。それを見て立ち上がつたカレンは環の肩に手を置いた。  
「タマキ様、そろそろ私達は退場しましょう」

「え？ なんで」

「もう少ししたらおわかりになりますよ。さあ、行きましょう」

「ああ、そうするよ。それじゃ2人ともまた後で」

環も立ち上がり、カレンと一緒に部屋から出て行つた。残されたエバンスと葉子はそのドアを見た。

「面白い男だな、タマキは。ヨウコの世界にはああいう者がたくさんいるのか？」

「まさか」葉子は首を横に振つた。「精靈もずいぶん驚いているみたいでしたけど、あんな不思議な人は見たことがありません」  
「そうだな」エバンスは葉子の手をとつて微笑んだ。「我らを祝福

しても「うのにあれほどふさわしい人間もいまい」

## 伝説

環とカレンは並んで廊下を歩いていた。

「そういえば飯がまだなんだけど」

「すぐに準備はできますよ。部屋と食堂、どちらでお召し上がりになりますか？」

「せっかくだから食堂に行こう」

環は早足で歩きだした。カレンはそれに遅れることなく確実に後をつけていった。

「ところでタマキ様。あのチャージというものについて詳しく教えていただけませんか？」

「ああ、あれ。まあ魔法を発動直前で止めておいて、まとめて使うと威力が上がるんじゃないかと思つてやつてみたんだよ。魔法1発に込められる魔力には限界があるみたいだし」

「またずいぶんと非常識なことを考えましたね」

「うまくいったじゃないか、けつこうきついけどね。それより、あのライトニングのカードは何なの？ 普通の魔法とは感じが違つたけど」

「あれはほとんど伝説上の存在で、我が国の建国の英雄が使つたといふものです」

「ひょっとして、建国以来誰も契約できなかつたってことかな」

「そうです。魔力で環境そのものを急激に変える、とか作り出すというようななんでもない魔法ですからね。タマキ様のような非常識な魔力があつてようやく使えるのです」

「まあ確かに、とんでもない威力だつた。他にも似たようなものがあつたりする？」

「ありますよ。それよりも食堂に着きましたが、何を召し上がりますか」

「じゃあ、パンとなんか果物でもよろしく

「はい、少々お待ちください」

カレンは一礼すると食べ物を取りに行つた。環は席について辺りを見まわした。食堂にはほとんど他に人はいなかつたが、環は注目されていよううだつた。

「やあどひもみなさん」環はいきなり立ち上がりて大声を出した。

「えー、高崎環です。一応勇者というやつです」

「タマキ様、何をしてらつしやるのですか」

カレンがパンと果物、飲み物を乗せたトレイを持って戻ってきた。

「いや、挨拶でもしておこうと思つてさ」

「そうですか。喉に詰まらせたりしないようにゆっくつ召し上がってください」

環はトレイを受け取つて、早速パンと果物をかじり始めた。あるいはトレイを口を開いた。

「とにかく、魔王ってやつはあれで本当に倒せたのかな

「と、言いますと」

「いやね、確かにダークデーモンとかいうのは倒したけど、ひょつとしたら逃げられたりしたんじやないかって気がするんだ」

「自分自身を贅にして呼び出したものを倒されたのですから、無事なわけはないのですが、しかし、タマキ様の勘といつのは気になりますね」

「そう思うだろ」

「ロレンザ様の意見を聞かせていただいたほうがよさそうですね」

「それじゃ、行こうか」

環はそう言つて立ち上がると、りんごのような果物をつかんで、それをかじりながら歩き出した。

「タマキ様、無作法ですよ」

「まあ別にいいじゃない」

環とカレンは祭壇のあるホールに到着した。ロレンザは目を閉じて立っていた。

「ロレンザ様、闇王のことでタマキ様が気になることがあるところなのです」

「どうぞ」とでしょうか？」

「いや、あの連中が使う召喚術についてやつのことと詳しく述べてもらいたいんだけど」

「魔族達が使う召喚術は贊を捧げて強大な闇の存在を呼ぶものです。キングスケルトンのような比較的あまり強力でない存在は、普通の魔物と変わりません。しかし、力のある者が自分自身を贊とすると、その者自信が変化をします」

「つまり、でっかい骸骨は小さいのをダシにして呼び出したもので、生贊にした連中とは別の存在だけ、闇王みたいな奴がやると、召喚といつよりは変身しちゃうわけ？」

「その通りです。それで、なにが気になつていてるのでしょうか？」

「いや、生贊つていうのは自分の魂を使うわけでしょ、だったらその魂の一部だけを使って召喚つていうのを完成させることもできるんじやないのかな。ほら、富崎さんを魔女にするのに魂の一部を埋め込むつて言ってたじやないか、つまり、魔族つていうのは魂を切り売りできるわけでしょ」

ロレンザは環の意見を聞いて考え込んだ。

「確かにそれは可能かもしません。ですが、いくら闇王でもあれだけの力を持つ存在を呼び出すのに魂の一部だけで済むとは考えられません」

「うーんそういうもんか。それじゃあ、あの闇王以上の奴つていうのはいるのかな？ ダークティーモンなんて化物が存在するんだから、もつと色々なのがいてもおかしくないんじゃないの」

「闇王以上の存在ですか、確かにそれは可能性があります。ただ、魔族のことがあまりわかっていないのです」

「それなら、もつと上の奴がいると考えておいたほうがいいか」

「そうですね。まだ戦いは終わっていないのかもしれません」

「そりなんだよな」環は一人で納得したように首を盾に振った。

そういうわけだから、あのライトニングと同じ博物館もののスペルカードを見せてもらいたいんだ。もつと強い奴がいるなら間違いく必要になると思う

「わかりました。すぐにお持ちします」

ロレンザはホールから出て行った。カレンはそれを見送つてから静かに口を開いた。

「タマキ様はまだ戦いが続くと考えているのですね」

「まあね。あれで終わりだとはどうしても考えられないからさ。準備はしつかりやつておきたいんだ」

「最後まで、そうして戦うつもりですか？」

「乗りかかった船だから」

気楽な感じで首をかしげて環は笑つた。カレンはその顔をじっと見て、ふつと息を吐き出した。

「私もその船には最後まで乗せていただきますよ」

「どこに着くかはわかんないんだけどねー」

「2人とも、何の話をしていたのです？」

そこに小さな箱を持ったロレンザが戻ってきた。環は笑顔で手を横に振つた。

「別に世間話、世間話。それより、その箱が

「はい」

ロレンザは箱を開けた。中には2枚の古びた感じのするスペルカードが納められていた。

「1枚はメテオストライク、燃える岩を落とす魔法です。そしてもう1枚はブリザードストーム、狭い範囲に猛吹雪を起こす魔法です」「またとんでもない感じの魔法だなこりや」

「それでは契約を」

ロレンザが差し出した箱から、環は2枚のカードを手に取つた。

「それじゃまずはこっちから、契約、メテオストライク！」

スペルカードが光になり消えていった。

「次はこっちだな、契約、ブリザードストーム！」

同じようにもう一枚のスペルカードも光となつて消えた。

「こんだけ強力そうだと、試すわけにもいかないのが欠点だよな」環は腕を組んでうなつたが、すぐに気を取り直した。「じゃあ、チ

ヤージの練習でもしようか」

「闇王に対してもしたという、魔法を限界以上に増幅するものですか？」

「そう、1発に込められる上限が決まってるみたいだから、今はいちいち魔法を寸止めしてその力を溜めてるんだ、1回ずつ溜めてるから10倍で使うなら10回も魔法を使わきやならないんだけど、それはちょっときついんだよね。1発使うだけで一気に10倍まで増幅できたりするといいんだけど」

「私の知る限りでは、そのような話は聞いたことがありません。ですが、伝説の中にならば、なにかが見つかるかもしれません」

「さっきの魔法を使えたっていう建国の英雄さんか。その人は俺みたいに異世界から来たのかな」

「それはわかりません」

「そうなの？」

「はい。ですが、伝説では初めて異世界から勇者を召喚したのは、その英雄なのです」

「おもしろそうな人なんだ。じゃあ、そっちのことは調べてもうりつておいて、後で聞かせてもらいつよ。それじゃようしく」

## 環の想いとカレンの力

それから数日の間、環はロレンザに話を聞く以外はほとんど自室に閉じこもっていた。

「タマキ様、たまには外に出たほうがよろしいのでは？」

食事を持ってきたカレンはテーブルの上にそれを並べながら言った。環は起き上がろうとはしなかった。

「魔力をもつとうまく使おうと思つてさ。色々試してたんだ」

「魔法の增幅ですか」

「そう、でもなかなかうまくいかないんだよね。まあ全然駄目ってわけでもないんだけど」

「どうしたことです？」

「魔法に込められる魔力には限界があるとしても、ひょっとしたら無理矢理魔力を注ぎ込めばなにか起こるんじゃないかと思つてやってみたんだけど」

「どうなったのですか」

「3倍くらい魔力を使ってみたら、まあ5割くらいは増幅できたかな」

「効率が悪い方法ですね」

「まあ、使えないはないよ、チャージとは違つてこれならすぐに使えるしや。まあこの方法は魔法の発動を止められないからチャージはできないんだな、最後の1発には使えるけど」

環は起き上がってテーブルに着き、パンをちぎりてシチューに浸けて口に放り込んだ。

「それで、今日はどうなさるのですか？」

カレンは水差しからコップに水を注いで差し出した。それを受け取った環は一口飲んでから考え込むように腕を組んだ。

「さて、どうしようか」

その時、ドアがノックされた。カレンがすぐにドアを開け、兵士

と言葉をかわした。カレンはすぐ振り返った。

「タマキ様の勘が当たつたようです」

環は城壁に立っていた。

「まだ見えないな」

「ここまで到達するには、あと3日は余裕があるはずだ」隣に立つエバンスは笑つてそれに答えた。「もちろん、黙つて待つているつもりはないが」

「軍隊を出すつもりかい」

「そうだ、今出撃の準備をしていく」

「敵の正体はわかってるの？」

「魔物の軍勢ということくらいしかわからない。斥候の報告では、数はかなり多いということだ」

「出撃を止めることはできないのかな、俺が一人で行こうと思つんだけど」

「1人で行くのか。確かに、そうしたほうがいいのかもしれないな」

「そう、軍隊はここを守るために残しておいたほうがいいよ」

「しかし、本当に1人で大丈夫なのか？ 閻王よりも強大な敵かもしれないんだぞ」

「だから1人で行くんだ。」うつちやなんだけど、あんな奴より強いのがいたら、軍隊じゃ相手にならないでしょ

「残念だが、その通りだ」

「まあ、そんのがいたら、俺だって1人でどうにかできるかはわからないんだけどさ」

「そうか、それでも行く気なんだな。我々を守るためか？」

「そんなところかな」そう言つて環は笑つた。「軍隊のほうは頼んだよ」

「わかつた。君を信じる。軍は止めるように進言してこいつ」エバンスはそう言つて城内に戻つていった。「帰つてきてくれよ、タマキ

「まかせておきなさいって」

環は気楽な様子で手を振つてエバンスを見送つた。その横に立つているカレンは、対照的に固い表情だった。

「すぐに出発なさいますか

「そうするつもりだけど」

「それでは馬車の手配をしてきます。城門前で待つていてください」

「わかった、まかせるよ」

城門前でカレンを待つていた環は、馬車の御者をしているカレンを見て少し驚いた顔をした。

「あれ、カレンが御者やるの？」

「そうですよ。野宿もしなくてはいけませんし、タマキ様だけではどこで戦えばいいのかもおわかりにならないでしょ？」

「それもやうか。じゃあ出発しよう」

環はさつと馬車に乗り込んだ。そして城壁にいるエバンスと葉子達に向かつて手を振つた。

「いってきまーす」

出発してしばらくしてから、環はカレンの隣に移動した。

「どうしました？」

「いや、この町とか色々見ておきたくて。考えてみれば、いつもここからあんまり外を見てなかつたし」

そう言つ環にカレンは笑顔を向けた。

「それではよく見ておいてください。タマキ様が守るうとしているこの世界を、よく見ておいてください」

「そうだよな、よく見ておきたいな。別に、守るつてこいつのに理由は要らないんだけど」

「理由もなく命をかけるのですね」

「理由なんて探したらそんなことはできないよ。できるからやる、それで十分じゃない？ でもまあ、あるならあるで困るからでもないね」

「やはりタマキ様は非常識ですね。」

「ま、そうかもね」

「そうであつて、心の底から良かつたと思います。」

それから2人は黙つて馬車に揺られた。町をぬけ道なりに進んで行き、見通しのいい草原に辿り着いた。

「タマキ様が戦うには、こうした場所のほうがいいでしょうね」

「そうだね、ここなら思つ存分暴れられる」

「それでは野宿の準備をいたします」

そう言つてカレンは手際よくテントの設営や諸々の準備を始めた。それが終わると再び馬車の御者台に戻つた。

「私は城に戻ります。タマキ様、危なくなつたなら必ず退いてください」

「わかつた。まかせておいてくれていよいよ」

環が手を振るとカレンは馬車を反転させて城の方向に帰つていつた。環はそれを見送つてから辺りの散歩を始めた。

カレンはしばらく進んでから、おもむろに馬車を止めた。  
「さきほどから監視をされているようですが、なにかご用でしあうか?」

カレンがそう言つと、馬車の前方の空間が揺らぎ、人間の形をしたもののが姿を現した。

「気づいていたか。貴様、何者だ」

「名乗るほどの身分はありません」

そう言つたカレンはいつの間にか右手にダガーを握つていた。

「そんな得物でどうにかできるとでも思つているのか」

「さて、どうでしようか」

カレンは馬車から飛び降りて魔族の前に立つた。そして、ダガーを構えて軽く力を込めるが、それを基点に炎がロングソードのような形を作り出した。

「魔法剣だと? 貴様、本当に何者だ?」

「ですから、名乗るほどの者ではありませんよ」

カレンは一気に間合いを詰めて袈裟切りに炎の剣を振るつた。魔族は上空に飛びそれをかわすと火の玉を4発放つた。カレンはそれに対して剣にまとわせた炎を飛ばした。その炎は火の玉をかき消し、魔族をも呑み込んだ。

「これで終わりではないと思いますが」

カレンがそう言つと、魔族がその背後に着地した。

「大したものだな、だがこれはどうだ！」

魔族は氷の牙を爪のようにして飛びかかつていつた。カレンは再びダガーに力を込めると、今度は氷が剣を作り、それを振り向きざまに一閃した。剣は魔族の氷の爪を砕き、さらにカレンは左手で魔族の胸を突きをいれて弾き飛ばした。

「そろそろ終わりにさせていただきます」

そう言つてカレンは目を閉じて眼鏡を外した。氷の剣が消え、カレンの雰囲気が変わつた。魔族はそれにはかまわずカレンに突っ込んでいった。そしてカレンの目が開かれた。

そこには血のような赤い瞳があつた。そして、右手のダガーに力を込めた。

「混沌の力よ」

つぶやくと同時にダガーが全てを吸い込むような深い闇をまとつた。そのダガーを振り上げると一気に巨大な闇の大剣が構成された。

「まさか！」

魔族の顔が驚愕に染まり、止まるうとしたが、そこに闇の大剣が振り下ろされた。魔族はその闇に呑み込まれ、跡形もなく消え去つた。

闇の大剣もすぐに消えた。カレンは目を閉じると、眼鏡をかけてからゆっくりと目を開いた。そこには赤い瞳はなかつた。

テントから這い出した環は朝日に照らされる草原を見渡した。まだ魔物の軍勢は見えなかつた。環はカレンが置いていつた食料の中から果物を手に取つてかじつた。

「化物連中が来るまで、まだ時間はあるのかな」

環は草の上に寝そべつて待つことにして、そうして数時間後、遠くに魔物の姿が見えてきた。

環は立ち上がり、魔物達を見て、その位置をよく観察した。そして手を空に向かつてかかげた。

「まずは挨拶代わりだな。メテオストライク！」

魔物達の先頭に燃えさかる岩が落ちていった。それが落ちた衝撃と炎で大量の魔物が薙ぎ払われた。それを埋めるようにさらに大量の魔物が出現した。環はそれを見て頭をかいた。

「それにしても多いな。じゃ、第2弾だ。ブリザードストーム！」

今度は猛吹雪が起こり、大量の魔物が凍らせれたり吹き飛ばされたりした。それから環は魔物達に向かつて歩き出した。魔物達がはつきり見えてくると、今回は弓矢で武装しているスケルトンがいるようだつた。

「まずはストーンスキン、それとマイティ」

さらに進み、弓の射程距離に入つたようで矢が飛んできた。環は矢を片手で払いながらどんどん近づいていった。そして、軍勢の目の前に到着してから立ち止まつた。

「よお、ボスさんいるんだる、出でこいよ」

魔物達が左右に割れていき、フード付のローブをかぶつた人間の形をしたもののがその間を歩いてきた。そして、それがフードを取つて出てきた顔を見た環は、苦笑いを浮かべた。

「俺の勘が当たつたのかな。あんたは倒したと思つたんだけど、逃げられてたんだな」

「逃げた？ 違うな、異世界の勇者よ。貴様が倒したのは我が分身にすぎない」

「まがい物だつたつていうのか」

「そうではない。力は小さいがまぎれもない我が力の一部だ」「あんまり聞きたくない氣がするんだけど、力の一部つていうのはどんなもんなのかな」

「5分の1程度だ。まさか人間に倒されるとは思つていなかつた」

「あれで5分の1か。『冗談だらまつたく』環は苦笑いではなく、今度は楽しそうに笑つた。「でも、5分の1は倒したんだから、少しは楽になつてるわけだ」環は腰を落とした。「バースト！」

爆風で突つ込んでいつたが、闇王が手をかざすと、殴りかかるうとしていた環は闇王の目の前で止められた。

「5分の1にも通用しなかつた攻撃が通じると思つたか」

闇王の手から衝撃波が放たれ、環は周囲の魔物を派手に巻き込みながら吹つ飛んでいった。闇王はさらに特大の火の玉をそこに放つた。それは、狙い通り環の飛ばされた地点に直撃し、大きな爆発を起こした。

「アイスバイト！」

しかし上空から環の声と共に、氷の牙が2発放たれた。闇王は全く動こうとしなかつた。しかし、氷の牙は闇王の目の前で粉々に砕け散つた。

「こいつはどうだ！ ライトニングボルト！」

立て続けに雷の矢を放つたが、それも同じように闇王の目の前で消え去つた。それでも環は落下の勢いを利用して、闇王に蹴りをくらわそうとした。

しかしそれも同じように闇王の目の前で止められた。見えない壁を思い切り蹴つたような感覚があつた。環は蹴りの反動を生かして後ろに飛び退き、闇王と再び対峙した。

「魔力の壁だな。それも、とんでもない頑丈さだ」

「そうだ。貴様ら人間の低級な魔法など通用しない」

「それならこいつはどうだ！ ライトニング！」

雷が闇王を直撃したかに見えたが、そのおかげた手から煙が立ち昇るだけで、闇王そのものにはダメージが全くないよう見えた。

「ファイアボール！ 2倍チャージファイアボール！」

闇髪いれずに放つた2倍ファイアボールも同じように片手で受け止め、消された。

「2倍程度じゃ駄目なら、もっとやつてやるまでだ！ つてちょっと待て！」

しかし、闇王は雷の矢を数10発放つた。環はそれをかわすのが精一杯で、魔法をチャージすることができなくなつた。それでも、環は笑みを浮かべた。

「いいこと思いついたよ」

そう言つた環は、さらに続けて放たれた雷の矢をかわしながら、魔法を使うことを強くイメージした。

魔力が具現化した瞬間、魔法を発動させずにその力を溜めるのが環が行つているチャージというものだった。

そのためには実際に魔法を使って、その発動を無理矢理止めるというようにしていったのだが、環はそれを全て自信の想像の中で実行しようとした。成功すれば実際に魔法を使って力を溜めるよりはるかに早い。

「よし、今度は5倍チャージファイアボールだ！」

イメージでのチャージはぶつつけ本番でうまくいった。さつきのファイアボールよりも明らかに大きく、勢いもあるものが闇王に襲いかかつた。

闇王は巨大な氷の牙を出現させ、その火の玉を貫き、消滅させた。環は横に飛びそれをかわした。

「なかなか面白いことをするな、人間」

「そうだろ。あんたに全然かなわないってことはなさそうだ」

「貴様、名はなんという」

「俺は高崎環。覚えておいて損はないぜ」

「タカラサキ、タマキ」闇王はそつぶやき、環の顔を凝視した。「この世界の理の外にある者が」

「なんだそれは？」

「ここで死ぬ貴様には知る必要のないことだ」

闇王の体に、目で見えるほど魔力がみなぎった。

「あいにく、まだ死ぬつもりはないんだよ」

環も体中に魔力を充実させた。それと同時にイメージでのチャージを始めた。それが終わる前に、闇王が動いた。環に向かって一直線に突っ込み、素早い突きを繰り出してきた。環はかわすことができずに、その突きをもろに胸に受けた。

「ぐお！」

ストーンスキンで強化された環にも、その突きの威力は十分すぎるほどだった。環はなんとか後ろに吹っ飛ぶことでその威力を消したが、闇王はそれを上回るスピードで、今度は脇腹めがけて蹴りを繰り出した。

「がつ！」

なんとか腕を下げるガードしたが、勢いを殺すことはできずにそのまま横に飛ばされ地面を転がった。さらに闇王は跳びあがり上空から踏みつけようと迫った。環は魔力で強化した腕の力だけでなんとか飛び退いてそれをかわした。

「10倍！ ブリザードストーム！」

一瞬前に環が倒れていた地面に着地した闇王を凄まじい吹雪が包んだ。

「バースト！」環は爆風で後方に跳びあがり、その吹雪の中心地点に意識を集中した。「これも10倍だ！ メテオ！ ストラアアアアイク！」

巨大な隕石としか形容のしようがないものが、吹雪の中心地点に落ちた。吹雪も周囲の魔物もほとんど吹き飛ばすほどの凄まじい衝撃と爆風だった。

それが収まつてから、環がその爆心地を見ると、そこには人の形

をしたもののが傷一つなく立っていた。

「おいおい5割増しだぜ」環は片膝を地面につき、苦笑を浮かべた。

「冗談だろ」

闇王はゆっくりと歩き出し、確実に環に近づいてきた。

「なるほど、我が分身が消された時よりもさらに力をつけたようだな。だが、終わりだ」

「いや、まだだ！」環は立ち上がり、自分を鼓舞するように叫んだ。  
「アイスバイト！ ライトニングボルト！ ファイアボール！」  
3つの魔法が闇王に向けて放たれた。闇王の足が止まつたが、ど  
れもそれに届きはしなかった。環はそのわずかな時間で限界まで魔  
法のチャージを行つた。その負担に、体がぐらつき、両膝をつきそ  
うになつた。さらに、全ての魔力を込めた。

「これがありつたけだ！ 20倍！ ライトニイイイイイイイイイイイイイイ！」

雷が閃くのと環が倒れるのは同時だつた。闇王のかかげた右手は  
それを防ぎきることができずに、黒く焦げ、ボロボロになつていた。  
だが、闇王は倒れていなかつた。

闇王はゆっくりと歩き、うつぶせに倒れた環を見下ろした。そし  
てゆっくりと魔力を込めた左手を上げた。

「終わりだ。理の外にある者よ  
その左手が振り下ろされた。

「それはさせません」

環に振り下ろされるはずだつた闇王の左手は、闇の大剣が横薙ぎ  
にされたのに阻まれた。だが闇王は後ろに飛び退き、その左手には、  
わざかに闇の大剣がかすつただけだつた。

「それは、混沌の力」

闇王はわざかな驚きを交え、つぶやいた。カレンは赤い瞳を光らせ、倒れた環の前に立ちはだかつた。そして、闇の大剣が消滅する  
と、今度は同じ闇をロープのように形作り、環と自分自身を包み込  
んだ。

「それでは、失礼いたします」

闇が2人を包み込み、次の瞬間にはその場所には何もなくなっていた。闇王はそれを見て微笑を浮かべた。ボロボロの右手と切りつけられた左手の傷を交互に見て、その微笑は明らかに笑いになった。

「おもしろい」

闇王は辺りを見まわした。魔物は環と闇王の戦いに巻き込まれ、ほとんど残っていなかつた。その光景を見て、さらに笑つた。

## 心を支える力

「タマキの様子はどうなのだ」

エバンスはなんとか自制してゆっくり歩きながらも、顔には焦りを浮かべていた。

「まだ意識が戻らないようです」後ろを歩くロレンザは落ち着いた口調だった。「魔力と体力の消耗による衰弱で命に別状はないというのが医者の見立てですが、カレンは違う意見があるようです」

「カレンが？ それはすぐに聞く必要があるな」

エバンスは歩みを速めた。そして、環の部屋の前まで来ると、いきなりドアを開けて中に入った。中にはベッドに寝かされている環と、その側の椅子に座るカレンがいた。カレンは立ち上がり、エバンスに頭を下げた。

「タマキの様子はどうだ」

「危険な状態です」

「医者は命に別状はないと言つていいようだが？」

カレンは首を横に振った。

「エバンス様。これは私の推測でしかないことですぐ、このままではタマキ様が目覚めることはありません」

「どういうことだ。何が問題だというんだ？」

「タマキ様の魔力の源です。それは、精神、心だと思われます」「心、だと」

「はい。おそらくタマキ様は『自身の心を魔力に変ええていたのです』

「なぜ、そう言えるのだ」

「ヨウゴ様のこと思い出してください。の方は戦いには恐怖を抱いていらっしゃいました。しかし、タマキ様にはそれがありませんでした。そして、ご自分が恐怖を感じなかつたことに不審を抱いてらっしゃいました」

「しかしそれだけでは、そつは言えまい」

「タマキ様のこの世界への適応の早さと動じない態度は、あまりに不自然ではないでしょうか？おそらくタマキ様にとって一番大きな、守る、という心以外がほとんど魔力に変えられていたからこそ、そうなったのではないでしょうか？」

「たしかにタマキにとつて、守るということは重要なことだつたようだが」

「そして、ダークティーモンと戦われた後、タマキ様は2日間目を覚ますことがありませんでした。いくら魔力を消耗したとしても、肉体的なダメージはそれほどでもないのに、そのようなことがあるものでしょうか？」

「つまり、その間タマキは失った魔力を取り戻すために、心のほとんどを魔力の回復に使つていたから目覚めなかつたというのか。だが、最初の戦いの後ではそのようなことはなかつた」

「それは消耗した魔力が少なかつたからではないでしょうか。そして、今回の戦いではタマキ様は持てる魔力のほとんどを使ってしました」

「本来、タマキの心は回復はするはずだが、魔力が戻らない限りは空ろなままだというのか」

「はい。タマキ様の魔力の容量を考えますと、魔力が回復しきる前に肉体が持ちこたえられなくなつてしまします」

「なんということだ」 カレンの推測にエバンスは歯をくいしばつた。「だが、人間ならば自身が生きる意思というのは根源的なもののはずだ。その心だけでもあれば目覚めることも出来るはずだ。だが、タマキの心の根本にあるものは」

「タマキ様にとつて、心を止めることは何かを守ること、なうのでしようね」

「どうか」 エバンスは全身から力が抜けたようになり、椅子に座り込んだ。「我々は彼のために何もできないのか？ 彼は我々のためにしか行動していらないというのに」

その落胆した言葉で、その場は沈黙が支配した。しばらくそのまま

まの状態が続いたが、カレンが一步踏み出して、その沈黙を破った。

「方法は、あります」

ロレンザはその表情を見て、顔色を変えた。

「カレン、まさかあなたの力を使うつもりではないでしょうね。あなたのお推測が正しいという保証はないのですよ。それに、使うとしてもどう使うというのですか？」

ロレンザの問いに、カレンは口を開じてしばらく考え込むよつこしてから、おもむろに口を開いた。

「タマキ様に私の魂の一部を渡します。純粹な混沌の力ならばタマキ様の魔力を回復させることもできるはずです」

「そんなことができるというのか

「できます」

カレンはうなずいたが、ロレンザは首を横に振った。

「あなたは特別なのですよ。普通の人間が純粹な混沌の魂を少しでも得れば、その力に飲み込まれて魔族となるだけでしょう」

「いえ、そうならないための方法ならあります」

「それは、どういうことだ」

「タマキ様に渡す混沌の魂には封印を施しておきます。私だけが力の解放と制御を行えるようにするのです」

「魔力の回復のためだけに力を解放して、あとは封印しておくといふことなのか。魔力が回復したら魂を取り戻すことはできないのか」

「それはできません。魂を渡したら、それはタマキ様のものになります。それに、タマキ様ならば、混沌の力を使うこともできる気がするのです」

「カレン。そのような憶測は危険です」

「しかし、このまま何もしないでいることはできません」

カレンは珍しく感情的になつて声をわずかに荒げた。エバンスとロレンザはその静かな迫力に口をつぐんだ。

「申し訳ありません」カレンは落ち着きを取り戻し、頭を下げた。

「ですが、私にまかせていただきたいのです」

「わかった」

エバンスは間をおいてから、重々しく首を縦に振った。

「ロレンザ、行くぞ」

部屋には環とカレンの2人だけになった。カレンはベッドの傍らの椅子に座ると、目を閉じてから眼鏡をゆっくりと外した。その目が開けられると、そこには赤い瞳があった。

カレンは環の胸の上に手を置き、そこに意識を集中した。カレンの体から全てを飲み込むような闇が滲みだし、その手に集まつた。

「混沌の力よ」

その声に応えるように、カレンの手が触れそうなほど闇に包まれた。1つ大きく息を吐いてから、その闇を一気に環の体内に流し込んだ。しばらくの間は、何も起きたように見えなかつた。

「解き放て」

カレンの声と同時に環の体がわずかに痙攣した。そして、その体をうつすらと闇が包み込み始めた。カレンはよりいつそう意識を集中させた。

環を包んでいた闇がその体に取り込まれた。カレンはそれを確認すると、環の胸に置いていた手をどかし、目を閉じてから眼鏡をかけた。

目が覚め、体を起こした環の目に入ってきたのは、ベッドの傍らで自分を見守っているカレンだつた。

「確かに俺は戦つて、負けたはずだと思ったんだけど」

「はい、その通りです」

「なんでここにこうして寝てるんだろう」

「私がお連れしました」

「カレンはただ者じゃないと思ってたけど、あの闇王って奴の前からよく俺を連れてこられたね」

「私にはちょっとした特技がありまして。けつこう役に立つものな

んですよ

「へえ、今度見せてもらいたいな。それで、俺はどれくらい寝てた、というか倒れてたのかな」

「まだ1日ですよ」

「それだけか。正直言つて、もう目が覚めることはないんじゃないのかと思つてたよ」

カレンはその言葉に少し表情を硬くした。

「なんというかさ、倒れた時は消耗したというより、気力がなくなつていつたんだよ、何も。それこそ目を開けてる気力すらなくなつた」

「タマキ様、それはあなたの魔力に関係があります

「魔力に?」

「はい。タマキ様は心を魔力に変えているのです。ですから、魔力が急激に使われると、それを補うために心が使われるのです」「空っぽになるのか。意思のない体になるつてことなのか」

環は自分の両手の掌を見つめた。そして、その両手を握り締めた。「それならなんで、今こつして起き上がつていられるんだ」

その問いに、カレンは眼鏡を外して環の顔を見つめた。

「私の目を見ていてください」

そう言つて一度目を閉じると、ゆっくりと目を開いていった。環はそこにある赤い瞳を黙つて見入つた。しばらくそうしていてから、カレンは目を閉じ、眼鏡をかけ直した。

「何が見えましたか?」

「何でも見えたような、何も見えなかつたような、不思議な感覚だつた」

「タマキ様に見えたのは、純粹な混沌です。全てを飲み込み、全てを生み出す力です」

「何でそんなものが見えるんだよ」

「それが私の魂だからです。そしてタマキ様、今あなたのの中にもそれは存在します」

カレンの言葉を聞き、環は自分の胸に手を当てて何かを考えた。

「そうして、胸から手を放して顔を上げると、カレンの顔をじっと見  
た。

「そうか、目が覚めたのはそのおかげか。カレンには助けられてば  
つかりなんだな」

「いえ、うまくいく確証などはありませんでした。失敗したら、タ  
マキ様は人間でない存在になっていたかもしれないのです。責めら  
れても、感謝されるようなことはしていません」

「その人間でない存在っていうのは」

「魔族です。混沌の力の負の側面、全てを飲み込む力に支配された  
存在です」

## 混沌の存在

環はベッドから出て城内を歩いていた。カレンはその後ろに影のようになっていた。

「タマキ様、どちらに行かれるのですか」

「まず飯、と言いたいところだけ、ロレンザさんで聞きたいことがあるから、ホールだよ」

ホールの入り口に着くと、ちょうどロレンザが戻ってきたのと鉢合わせした。ロレンザは少し驚いた表情を浮かべた。

「タマキ様、目が覚めたのですね」

「ああ、カレンのおかげで助かったんだよ」

「うまくいったようで安心しました。それで私に何か用でしょうか？」

「ああ、そのことだけ、とりあえず中で話そつ」

3人はホールの中に入り、適当な椅子に腰を下ろした。

「用つていうのは、まあ聞きたいことがあるんだけど、闇王が俺のことを探して外にあるものとか言ってたんだけど、それってなんなんだろうって思つてさ」

「理の外にある者、ですか」

ロレンザは何かを思いついたようすで、立ち上がりて1冊の本を持つてきてそれを開いた。

「理の外にある者。それは我が建国の英雄の別名です」

「闇王はそれを知つてゐるのかな。そうだとしても、なんで俺のことをそんな風に呼んだんだろう」

「わかりません」ロレンザは首を横に振った。「ですが、その英雄は魔族を打ち破つたという伝説があります。それならば、その英雄と同じ魔法を使うタマキ様のことをそう呼ぶのはおかしいことではないと思います」

「ひょっとしたら魔族の連中は、その伝説をこいつよりよく知つたりするのかな」

「魔族との戦いに関しては、そうかもしれませんね」「でもわかんなないなー。なんで今更そんな話を引っ張り出してくるんだろう?」

環が頭をひねつていると、エバンスがホールに勢いよく入ってきた。

「タマキ! もう動けるのか?」

「ああ、大丈夫だよ」

エバンスはそれを聞いても安心できない様子で、タマキの正面に立つと、その両肩をつかんだ。

「本当に何ともないんだな?」

「もちろん。ばっちらりだよばっちらり」

エバンスはそれを聞いて、息を大きく吐き出した。そして自分も適当な椅子に腰を下ろした。

「ロレンザ、何の話をしていたのだ?」

「闇王がタマキ様を、理の外にある者、と呼んだということです」

「それは、伝説の英雄の呼び名だな。なぜその名を」

「それがわからないんだな」環はそう言って立ち上がった。「考えてもわかりそうにないから、飯でも食いにいくとしようか」

食事を終えた環は、水を1杯飲んでから正面に座るカレンに向き直った。

「ところで、平和そ�だったから聞くの忘れてたけど、闇王はどうなったの」

「タマキ様と闇王の戦いに巻き込まれて魔物はほぼ壊滅してしまいました。闇王も傷ついたため、今回は退いたようです」

「それじゃあ、しばらくは時間があるんだ。あの闇王と戦うための対策を考えないとなあ」

カレンはそれを聞いて眼鏡の位置を少し直した。

「対策ならば、あります」

「それは、どんな?」

「場所を変えましょ」

カレンが立ち上がり、環はそれについて食堂から出て行った。しばらく歩いてから、環は目的地に気づいた。

「そつか、魔法の訓練所に行くんだ」

「はい。今の時間だと誰も使っていないはずですから」

訓練所に到着してみると、カレンの言葉通り、そこには誰もいなかつた。カレンは環のほうに向き直った。

「タマキ様の体には、私の魂の一部、純粹な混沌の力が存在しています。今はその力は私が封印しているのですが、封印と言つても完璧ではありません」

カレンはそう言つてどこからダガーを取り出した。

「見ていてください」

カレンがダガーを握る手に少し力を込めるとい、ダガーを基に炎の剣が出現した。

「へえ、これはすごいな」

「封印していくとこれくらいの力は使えるのです」

「それが俺にもできるってこと?」

「はい。ですが、おそらくすぐにはできないはずです。そこで、少々荒っぽいやりかたになるのですが」

カレンは炎の剣を消してダガーをしまい、環に近づいてその手をとり、自分の両手で包んだ。

「ほんの少しだけ、タマキ様の中にある混沌の魂を開放します。違和感を感じたらすぐに言つてください」

「わかった」

環は目を閉じて自分の中に意識を集中した。最初は何も感じられなかつたが、すぐに自分が飲み込まれるような強烈な違和感を感じた。

「待つた! ストップ!」

違和感は收まらなかつたが、それ以上広がつていくような感覚も止まつた。

「タマキ様、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫。しかしこれはすごい、本当にこんな力が使えるのかな」

「使えなければいけません。それでは封印します」

カレンがそう言つと、環の中の違和感は小さくなつていった。だが、小さくなつてもその存在を感じ取ることはできた。カレンは環の手を放し一步下がつた。

「混沌の力を感じることができますか？」

「ああ、わかるよ。それで、これをどうすればいいの？」

「まずは、想像してください。例えば、ときほどの私の魔法剣のようなものを強く思い描いてください」

「想像か。じゃあ俺が使いたいものは」

「拳ですね」

カレンの言つたことは図星だったようで、環はにやりと笑つてそれをに答えた。

「火傷とかしないよな」

「しようと思えばできますが、そういうイメージしない限りは大丈夫です」

「それなら安心」

環は目を閉じて右手を顔の高さまで上げて、握つた。その拳に力が込められてから数秒後、その拳を炎が包み込んでいた。環は目を開けてその光景をじっくりと観察してから、力を抜いて炎を消した。

「はー、これははす」

「さすがです」

「非常識だつて言つんだろ。でもこれは使えそうだ」

「使える、と言いますと」

「闇王には遠くから魔法を撃つてもほとんど防がれてたんだ。まあ直接突っ込んでいつてもダメだったんだけどさ、まあそこはなんとか隙を作つて、こいつで殴りつけてやればけつこう効くんじゃないかな」

「そうかもしませんね。ですがそれだけではなく、他のものも使えないことはいけません」

「魔法で言つたら、あとは氷と雷。どうせなら両手でやってみるか」  
今度は両手の拳を上げた。目を閉じず、軽く力を込めるが、右の拳が氷、左の拳が雷をまとつた。

「これだけの短時間でここまでできるものですね。」

カレンは心の底から感心しているようだつた。環は満足げにうなずいて、両手の氷と雷を消した。

「なんかけつこう疲れるね、これは」

「慣れないせいですよ。今日はこれくらいにして、タマキ様はお休みになるべきだと思いますが

「わかった、そうするよ」

2人は環の部屋に戻つたが、その前にはエバンスが険しい表情で待つていた。

「タマキ、重要な話がある。カレンも一緒に来てくれ」

エバンスはそう言つて部屋のドアを開けて中に入つていつた。環も首をかしげながらそれに続いた。

「話つていうのは？」

環の問いに、エバンスは透明な石のようなもので出来た、指でつまめる程度の小さなキューブ状のものを取り出した。

「これを見て欲しい」

エバンスがキューブを空中に放り投げると、それは静止し、小さな闇王の幻影が出現した。

「人間の勇者、理の外にある者よ。貴様と決着をつけたことにした。時間は3日後、貴様と戦つたあの場所だ。混沌の力を使う女も連れて來い。来なければ、こちらから行く」

闇王の幻影が消滅し、キューブが床に転がつた。環はそれを拾い、握りつぶした。

「受けようじゃないか」

「私も」指名を受けたようですから、「一緒にいたします」

## 2対1の決闘

ゆづくつ進む馬車の中で、環はゆつたりと寝そべっていた。カレンはそれとは対照的にきつちりと座って、何か細かいものを作っていた。

「なあ、カレン。ちょっと聞きたいことがあるんだけ?」

「なんでしょうか」

環は寝そべつたまま、カレンも手を動かしながらだった。

「カレンの力のことを知ってる人はどれくらいいるの」

「片手で足りますよ」

「少ないなあ。それじゃもう一つ、生まれはこの国?」

「いえ、違うはずです。私は物心ついた時には、ある人と旅をしていましたので」

「そのある人っていうのは?」

「わかりません。それは私の記憶から抜け落ちています。覚えているのは、誰かと一緒にいたということだけです」

「ふーん。じゃあ、その記憶でも探しに行こうか」

「それは探して見つかるものなのでしょうか」

「さあ、どうだらう?」

そこで会話は途切れたが、しばらくしてから今度はカレンが口を開いた。

「タマキ様は元の世界に帰りたいとは思わないのですか?」

「元の世界ね。今はここでやることがあるし、それに」環は言葉を切つて口をこすつた。「段々、元の世界の記憶がぼやけてきてるんだだ」

「つらいのではありませんか」

「それほどつらいってことはないんだけどさ。それでも、向こうの記憶が全部消えたらどうなるんだかとは思つね」「そうですか」

「ま、今そんなことを考へてもしようがないよ。ところでさ、カレンはその格好で戦うの？ あんまり戦闘向きには見えないけど」「戦い向きの装備も持つてきていますよ」カレンは自分の足元に置いてあるスースケースのような皮製のものを手で叩いた。「タマキ様の服装も戦いに向いたものでもないと思いますが」

「いや、これはけつこういけるよ。それに一式全部、新しく作つてもらつたからさ、気分もいゝし完璧だね」

「作つたかいがありました」

カレンがそう言つと、環は起き上がり大きく伸びをした。

「ちょっと外の空氣を吸つてくるよ。その間に着替えておけば？ 着いてからじや慌しいしさ」

「では、そうさせていただきます」

環は御者台に移動した。カレンが足元のケースを開けると、そこには地味だが丈夫そうな長袖とズボン、皮製の鎧とブーツ、グローブ、ベルト、ショートソードが納められていた。

「久しぶりですね」

馬車は環と闇王の戦いがあつた場所に到着した。そこには生々しい戦闘の跡が大量に残つていた。御者を務めていたバーンズはその光景を見て嘆息した。

「これは凄まじい」

「確かに、改めて見るとすごいなこれ。ほとんど俺がやつたんだよなあ」

「ここを選んだ闇王に感謝しなくてはいけませんね」

カレンの言葉に環は声を出して笑つた。

「それは言えてる」

リラックスタした2人の様子にバーンズは安心したような表情を浮かべた。

「一緒に戦いたいところですが、そうしたところでタマキ様やカレン殿の足手まといになるだけでしょう。私は馬車を安全な場所に待

機させておきます

「はい。帰りもお願いします」

「よろしく」

カレンは頭を下げ、環は手をひらひらと振った。バーンズはそれに対して膝を折つて礼をした。

「ご武運を」

バーンズは立ち上がり、馬車に飛び乗つて去つて行つた。それを見送つたカレンは振り返り、空に顔を向けた。

「いつまでそんな高いところから見ていいつもりですか？」  
「勘のいいことだ」

カレンの声に応えたのは、上空から降下してきた闇王だった。闇王は環とカレンの数歩先に降り立ち、2人をじっくりと観察した。「何を見てるんだよ。俺は別に変わったところはどこにもないぜ」「そのようだな」

闇王は構えは変えなかつたが、明らかに雰囲気が変わつた。カレンはそれに応じるように腰に下げたショートソードを抜いた。環は両手を下げたまま、全身の力を抜いた。

最初に動いたのはカレンだつた。ショートソードに炎をまとわせ、それを上空に向かつて振るつた。炎が飛び、上空から降つてきた火の玉と激突、消滅した。

カレンはすぐに周囲に注意を向けたが、後方から飛んでくる、人の頭ほどの石に対する対処が遅れた。

「ストーンスキン！」

環がそこに飛び込み、石を拳で粉碎した。

「準備がいいなあ、闇王さんよ」

そう言つた環が闇王を見ると、その顔は暗い笑いを浮かべていた。

「貴様らの都合のいいようにしてやつたのだ。これくらいの挨拶は当然だらう」

そう言つた闇王は後方に一気に飛び退くと同時に、氷の牙を6発放つた。

「カレン右を頼む！」

「はい！」

2人は同時に前に飛び出した。環は両方の拳に氷をまとわせ、カレンはショートソードに氷をまとわせた。環は2つの氷の牙を殴つて碎くと、残りの1つは身をかがめてかわした。カレンはぎりぎりまでひきつけてからショートソードの一振りで3つを同時に碎いた。闇王は防がれるのがわかつていたようにすぐに次の行動に移った。環とカレンに向けて掌を向けて両腕を突き出し、そこから炎を噴出した。

「プロテクション！」

環も両腕を突き出し、魔法の盾でその炎を防いだ。

「俺を飛び越える！」

カレンは一瞬の躊躇もせずに環の頭上を飛び越えた。

「バースト！ バースト！」

1発目の爆発が炎に穴を開け、2発目が環を飛び越えたカレンを後押しした。カレンは勢いよく飛び、爆発が作った穴を通り闇王に迫った。

「ハアッ！」

振り上げたショートソードが炎をまとい、凄まじい勢いで闇王に振り下ろされた。しかしそれは闇王が手をかざすと見えない壁に阻まれた。

「まだまだあ！」

しかし、今度は爆風を利用して上空に跳んだ環が、落ちていく勢いと雷を拳に乗せて闇王に突っ込んでいった。その拳も見えない壁に阻まれた、かのように見えた。

「もういっぱあああつー！」

環は逆の拳にも雷をまとわせ、闇王に向かつて振るつた。甲高い音と共に見えない壁が消失し、拳がもう少しで闇王に届きそうになつた。しかし闇王は上空に飛び上がり、それを回避した。

「逃がしません！」

カレンはベルトに挿してある投げナイフを素早く取り出して、それに氷をまとわせると闇王に向かつて正確に投げた。さらにショートソードに炎をまとわせ、その炎も飛ばした。

「バースト！」

そのナイフと炎を追うように環が跳んだ。闇王はカレンの攻撃を弾いたが、跳んできた環に対して隙を作ることになった。

「いくぞカレン！」

環は両拳に炎をまとわせ、それを上から闇王に思い切り叩きつけた。それをもろに受けた闇王は勢いよく地上に落下した。下ではカレンがショートソードに雷をまとわせ、闇王の落下に合わせて渾身の力を込めてそれを振るつた。確かな手応えと同時に、闇王の体は吹き飛ばされた。落下中の環はその飛ばされた地点をよく見て、手を天にかざした。

「くらえ！ 20倍ライト一イイイイング！」

飛ばされた闇王が落ちた地点を、雷が正確に射抜いた。着地した環とカレンはその地点を見据え、油断なく身構えた。

2人の予想通り、煙が立ち昇る場所から闇王はゆっくりと立ち上がりつた。ダメージを負っているのは明らかだったが、闇王の顔は笑つていた。

「どうか、これが理の外にある者と混沌の力を使う者の力か」

そこで闇王の表情が変わった。その鬼気迫る人間離れした雰囲気に、環は思わず息を呑んだ。カレンは射るような視線を向けていた。

「我が力の全てを持つて貴様らを滅ぼす！」

闇王は両手を広げ、顔を天に向けた。

「ドゥームティーモンよ！ 盟約にしたがい我にその力を！ 破滅と死を！」

晴れていた空に突然暗雲が発生し、日の光が遮られた。そんななかで闇王の周囲だけは不気味な薄い光に包まれていた。カレンは何も言わずにそれに向かつて走り出した。

「よせカレン！」

環の静止を聞かず、カレンは闇王に向かっていったが、それは剣が届くはるか手前で跳ね返された。環は倒れたカレンに駆け寄つて闇王を見た。

「なんだよこれは。冗談みたいな力だ」

あまりの力の奔流に環は呆然とした。そうしているうちに、闇王を包む光は濃くなつていき、その姿を飲み込んでいった。

その光が闇王を完全に飲み込んだ時、光が溢れ環とカレンは思わず目をそらした。そして、再び目を向けると、そこには闇王と大きさは変わらないが、その禍々しさは桁違いになつている存在がいた。

「お前は、何だ」

環の問いに、その存在は心に直接語りかけてくるような低い声を出した。

「私は破滅の運命を司る存在。お前達に審判を下すため、盟約に従いこの者に力を貸す」

環はその言葉を聞いて、立ち上がったカレンに苦笑いを向けた。  
「話し合ひの余地はなさそうだよ」

環とカレンはドゥームテーマモンと対峙していた。姿も形も闇王とほとんど変わらないその存在は、それだけでも消耗を覚えるほどな相手だった。カレンはショートソードを握りなおした。

「タマキ様、魔力はどれくらい残っていますか？」

「20倍でライトニングとかそっちの魔法が3発くらいは使えそうだ。でも30倍で2発にしたほうがよさそうだな。それくらいまでなら、なんとか使える」

「わかりました」

カレンは眼鏡を外して、それをベルトに着いている眼鏡専用ホールスターとでも言つべき物に納めた。そして目を閉じた。

「なあカレン」

「なんですか？」

「その眼鏡って何かいわくつきの特殊な物なの？ 力を封印するとかそういう類の」

「いいえ、ただのアクセサリです。まあ、気分の問題でしょうか」カレンは口元に笑みを浮かべ、目を開いた。赤い瞳がドゥームテーマモンをまっすぐ見据えた。

「私が仕掛けます。タマキ様はできるだけ魔力を消費しないようにして好機を待つてください」

「わかった。無理はしないでくれよ」

「はい！」

カレンは返事をすると同時に闇をロープのように形作り、それで体を包むと瞬時に消えた。次の瞬間には、闇のロープをまとっていないカレンがドゥームテーマモンの背後の上空に現れた。そこから一気に落下しながら、炎をまとったショートソードを渾身の力で振り下ろした。

だが、それはドゥームテーマモンの指一本に止められた。その指が

軽く動かされるとカレンの体が簡単に弾かれた。しかしカレンはうまく着地するとすぐにショートソードを振るい、まとつた炎を飛ばし、それを追うように走った。

ドゥームデーモンは右腕の一振りで炎をかき消し、それに続いて袈裟切りに振るわれた氷の剣を左手でつかんで受け止めた。

「どうした？ こんなものではあるまい」

その右腕がカレンに振り下ろされた。

「そろはいくか！」

環が勢いよく突っ込み、ドゥームデーモンの後頭部めがけて炎をまとつた拳を叩き込もうとした。だが、ショートソードをつかんでいた左手が動き、カレンの体ごと環に叩きつけた。環は拳を止め、なんとかカレンを受け止めたが、その勢いで2人とも後方に飛びされた。ドゥームデーモンは余裕を持っているようで、追撃はしなかつた。

カレンはすぐに立ち上がり、環は首を横に振りながらゆっくりと立ち上がった。

「こいつは強いな

「はい。一気に決めなければ私達が不利です」

「何か奥の手みたいなのはあるのかな」

「2つほどありますが、1つはあまり使いたいものではありません。もう1つもあまり乱発できるようなものではありません」

「でも、出し惜しみもできないな」

2人は改めてドゥームデーモンに対峙した。その姿を見て、それは不気味な笑顔のようなものを見せた。

「そうだ、貴様らの全力で来い」

ドゥームデーモンは火の玉を1発放つた。環とカレンは左右に分かれてそれをかわしたが、火の玉は軌道を変えて環に襲いかかった。

「後ろです！」

カレンの警告の声で環は背後の火の玉に気づき、振り向きざまに炎をまとわせた拳をそれに合わせた。

「ぐおっ！」

相殺したように見えたが、衝撃で環の体は後方に吹き飛ばされた。カレンは環をフォローしようと方向転換した。だがその進行方向にドゥームデーモンが高速で移動して、道を塞いだ。

カレンはショートソードに雷をまとわせると、その胸に向かつて強烈な突きを繰り出した。ドゥームデーモンはそれをいなし、カレンの背中に手を向けると、そこから氷の牙を放つた。カレンはなんとか振り向くと、ショートソードでそれを受けたが、勢いを殺せずそのまま吹き飛ばされた。ドゥームデーモンはさらにカレンに追い討ちをかけようとした。

「5倍！ 連射バージョンライトニングボルト！」

そこに環の声と同時に、5発の雷の矢が飛んできた。ドゥームデーモンは魔法の盾を発生させそれを防いだ。

「まだまだ行くぜ！ 2倍バースト！」

爆発を利用して勢いをつけた環は拳に雷をまとわせ、その盾に全力でぶつかった。拳は盾を貫き、一気にひらかれた。

「10倍！ ファイアボール！」

至近距離から火の玉が直撃し、環はその爆風に飛ばされた。すぐに体勢を立て直しドゥームデーモンの姿を確認した。多少のダメージはあつたようだが、それでもしっかりと立っていた。

「バースト！」 環は再び勢いをつけてドゥームデーモンに突っ込んだ。「おおおおおおおおおおお！」

右に炎、左に氷をまとわせた拳を連續で振るつた。ドゥームデーモンはそれを的確に腕で防ぎながら後ろに下がつていった。さらにそこにカレンが側面から雷をまとったショートソードで切りかかっていました。

「なるほど」ドゥームデーモンは2人の攻撃を捌きながら語りかかるようにしゃべり始めた。「人間にしておくには惜しい連中だ。それだけの力があるのなら我が眷族にしてやってもいいくらいだが」「黙れ！」

環は叫んで渾身の力を込めた拳をドゥームデーモンの顔に叩き込んだ。さらにカレンのショートソードも振り下ろされた。どちらも防がれたが、その胴体が一瞬空いた。

「10倍！ バアアアアアアストオ！」

ドゥームデーモンは強烈な爆発に吹き飛ばされた。環は落下点の目測をつけると、すぐに次の一撃に移る。

「20倍！ メテオ！ ストライク！」

燃えさかる巨大な岩がドゥームデーモンを直撃した。その衝撃波が2人を襲つたが、カレンは闇のロープをまとうと、姿を消し、その落下地点の上空に姿を現した。

「混沌の力よ！」

ロープになつていた闇が消え、ショートソードに新たな闇が集まり、それが大剣となつた。落下の勢いを乗せ、カレンはそれを炎に包まれるドゥームデーモンに振り下ろした。

次の瞬間にあつたのは衝撃。そして、カレンの闇の大剣を肩に切りつけられながらも、それを受け止める傷ついたドゥームデーモンの姿だつた。

「我が肉体をここまで傷つけるとはな」ドゥームデーモンは闇の大剣をつかむ手に力を込めた。「だがこんなものなどおおおおお！」闇の大剣が握りつぶされ、霧消した。さらにドゥームデーモンはカレンの腕をつかんで、思い切り地面に叩きつけた。

「がつ！」

カレンはうめいたが、それでもショートソードは手放さなかつた。ドゥームデーモンはもう一度カレンを叩きつけようとしたが、そこに環が飛び込んできた。炎の拳がその顔面を打ちぬき、ドゥームデーモンは吹き飛ばされカレンを放した。環はそのカレンを抱きとめた。

「カレン大丈夫か！ 5倍ヒーリング！」

カレンの体が柔らかい光に包まれ、息をするのも困難な状態からすぐに回復した。それでも足元がふらつくカレンに、環は肩を貸した。

て2人で立ち上がった。その視線の先には、立ち上がるドゥームモンの姿があつた。

「タマキ様、奥の手というものを使いこになりました」

「奥の手ね、どうするんだ?」

カレンはなんとか1人で立ち、ショートソードを鞘に収めてから、環に自分の左手を差し出した。

「私の手を握ってください。強く」

環は右手でその手を強く握り締めた。

「私はタマキ様に魂を委ねます」

「俺はどうすればいいんだ」

「力の源、心を私に委ねて下さい」

「わかった」

環は力強くうなずいて、ドゥームモンを見据えた。そしてカレンの手をさらに力を込めて握った。

「俺の心をカレンに委ねる」

「私の魂をタマキ様に委ねます」

つないだ手を中心には、2人の力が混ざり合つた。環にはカレンの混沌の力。カレンには環の魔力。2つの力が混ざり合い、目に見える程の凄まじいエネルギーとなつた。

ドゥームモンは後ずさり、悲鳴にも似た怒鳴り声をあげた。

「貴様ら、それはなんだ! そのありえない力はなんだというのだ!

!」

環は首を横に振つた。

「俺にもわからない」

「なにがわからない! それは、その力は我が力と同じもの、混沌の力のはずだ!」

「いいえ、違います」

今度はカレンが首を横に振つた。

「混沌の力は創造と破滅の両面です。あなたの破滅の力は不完全なものにすぎません」

「黙れ！ 破滅の運命を司る我が力以上のものは存在しない！」

ドゥームテーモンが手を2人に向けると、そこから稻妻が発せられた。それは2人に直撃したが、瞬時に2人の力に取り込まれた。そして、2人の目の前に巨大な闇の柱が出現した。環の左手とカレンの右手がそれをつかむと、その手から白い光が輝き、闇の柱はその光をまとつていった。

光をまとう闇の巨大な剣は2人の手でかかげられた。

「闇に！」

「帰れええええええ！」

咆哮と共に剣が振り下ろされた。

「ふざけるなあああああああああああああああ！」

ドゥームテーモンはそれを受け止めようとしたが、無駄だつた。その姿は闇と光に飲み込まれていった。

闇と光の剣が消え、環とカレンは一気に力が抜けたようにその場に膝をついた。ドゥームテーモンがいた所には、ぼろぼろになり、消滅寸前の闇王が倒れていた。

環はなんとか立ち上がり闇王の側まで歩いていくと、そこに腰を下ろし、その顔を覗き込んだ。

「俺達の勝ちだな」

「そうだ、貴様達の勝ちだ」闇王は苦しそうにうめきながら無理矢理笑つた。「最後に助言をしてやろう。私のほかにも魔族はまだまだいる、せいぜい気をつけることだ」

「ああ、せいぜい気をつけておくよ」

「それでもう一つだ」闇王は激しく咳き込んだが、それでも言葉を続けた。「私は実験体にすぎん。貴様とその女、せいぜい注意しておくのだな、は、ハハハハハ」

笑いながら、闇王の体は光となつて消えていった。環はその光景を見ながらどこか悲しそうだった。カレンは黙つて環の肩に手を置いた。

「タマキ様、帰りましょう

「ああ、そうじつ  
環は立ち上がった。  
」

闇王との戦いから半年。環はほとんどの時間を自分の部屋で魔法の研究に費やしていた。公の場に姿を現したのはエバンスと葉子の結婚式くらいなものだった。

「タマキ様、根の詰めすぎはよくありませんよ」

昼食を運んできたカレンは辞書と魔法書を交互に見ている環に声をかけながら、配膳をしていた。

「そりやわかつてるよ。でも覚えることが多いわせ」環は立ち上がりて食卓に着いた。「言葉がわかるのと一緒にでなんか知らんが字は読めても、意味まではわからないからなあ」

「それでも」カレンは環の机の上に詰まれた本を見た。「あれだけの量を読まるといふのはかなりのことだと思いますが」

「それでもわからることは多いけどね」環はパンを一口かじって、水で流し込んだ。「特にカレンの力に関するよつなことは全然本には載つてないな」

「そうですか」

「そう。あの意外と不便な瞬間移動とか、闇の剣とか。どれだけ本をひっくり返してもでてないね」

「それほど不便ではありませんよ。連續して使えないのと、それほど長距離は移動できないのと、それと目標の上空にしか出ることができるだけです」

「十分不便だと思うよ。闇の剣だって1回に1振りしかできないわけでしょ」

「一撃必殺といつやつです」

「ものは言いつやつです」

環は豆のサラダをスプーンですくつて口に放り込んだ。

「何よりも不思議なのは、誰がカレンにそれを教えたのかってこと。自分で覚えたわけじゃないんでしょ」

「はい。誰かは思い出せないのですが、私と長く一緒にいた人に、力の使い方と制御の仕方を教えてくれた記憶があります」

「それだよ、その謎の人物。そいつなら俺の知らないことをたくさん知ってるはずだよ。もちろんカレンの記憶だって取り戻せるだろ」カレンは少し首をかしげた。

「私の記憶がそれほど重要なものでしょうか」「

「重要かどうかは知らないけど、俺は知りたいね」

「知ると言いましても、どうするつもりなのですか？」

「当然、カレンと一緒にいたつて奴を探し出すんだよ。それが一番手っ取り早いだろ」

「旅に出るつもりですか」

「旅、いいなあ旅。最近引きこもりすぎだつたからちょうどいい」

「しかし、まだ魔族の脅威が去つたとは言い切れません」

「半年も大したことは何もなかつたんだから大丈夫だつて。雑魚ならあの新婚夫婦にでもまかせりやいいんだから」

「王がお許しになるかわかりませんが」

「許さなかつたらぐれてやる」

「それは困りますね」

「そういうわけだから、早速かけあいに行こうじゃないか」「環はパンをかじりながら立ち上がつた。

「旅に出ると、そう申されたか」

人払いをした謁見の間で、環とカレンを前にしてリチャード王は難しい顔をしていた。

「そう。闇王は倒したけど、まだ終わつてなんかいない。でも今は魔族もけつこうおとなしくしてゐるから、連中のことを探るにはちょうどいいと思うんだ」

リチャード王はそれに返事をせずに、うつむいて腕を組んだ。その傍らに立つエバンスが何かを耳打ちした。それを聞いたリチャード王は軽くうなづいた。

「わかつた。勇者タマキよ、そなたに魔族の動向を偵察する任務を与えよう。必要な人材や資材があれば遠慮なく申すがよい」

「それじゃ、一つ聞きたいことがあるんだ」環は自分の後ろに立つカレンをちらりと見た。「カレンがここに初めて来た時、一緒にいた人がいたと思うんだけど、その人のことを憶えてるようなことはないのかな」

「カレンを連れてきた人物とな？ 確かにそういう人物がいた。必ず役に立つと言われ、その通りにカレンは我が王国にとつて實に貴重な働きをしているが」

リチャード王は不思議そうな表情を浮かべて、何かを思い出そうとしているようだった。

「おかしい、それが誰なのか思い出せない。よく知っている人物のはずなのだが」

「やつぱりか」リチャード王の反応を見て環はつぶやいた。「王様、その人物を探すのがこの旅の一番の目的なんだ。何かの手段で人の記憶を封印している、王様とも親しかったカレンの育ての親らしい人物。こいつなら絶対に重要なことを知ってるはずだ」

環の言葉にリチャード王は重々しくうなづいた。

「よくわかつた。詳しいことはエバンスと相談するがよい。旅の無事を祈つてあるぞ、勇者よ」

リチャード王は立ち上がり、ゆっくりと退室していった。エバンスはそれを見送ると、環に向き直つた。

「タマキ、私の部屋に来てくれ」

エバンスが背を向けて歩き出すと、環とカレンもその後について行つた。そして、エバンスの部屋に到着し、ドアが開かれた。

「葉子さん、なにその格好」

環の視線の先には、侍女服とは違う、いわいのメイドさん的な格好をして忙しそうに部屋の掃除をしている葉子がいた。

「あら、環君。ここにちは」

「ヨウコ、タマキと大事な話があるんだ、君も一緒に聞いてくれ」

エバンスは別に動じていなかった。

「カレン、この2人つていつもこんな感じなのか？」

「そういう話は聞きます。別に悪いものではありませんよ」

環とカレンがひそひそ話していると、エバンスと葉子は人数分の椅子を用意していた。

「どうした？ 2人とも、とりあえず座つてくれ」

言われるがまま、2人は椅子に座った。エバンスと葉子はお茶の準備をしてから、椅子に腰を下ろした。

「タマキ、突然旅に出るとは、一体本当の理由は何なのだ？」

「さっき言った通り、カレンをここに連れてきた人を探すのが一番の目的だよ。つまり、カレンの記憶を探しに行くんだ」

「なるほどな。確かに私もカレンを連れてきた人物というのは憶えていない。だが、ただ者でないのは間違いないだろうな」

「そういうこと。そんだけ大した奴なら魔族のことだってよく知ってるだろ？ し、探して損はないって」

「だが、なにか探す当てはあるのか？」

「それならあるよ。知の都っていう所に行つてみようと思つてるんだ」

「知の都？」

葉子が首をかしげた。エバンスは少し困ったような表情を浮かべた。

「ヨウロ、Jの間説明したじゃないか。知の都エルドウェヌス共和国、最大の図書館を持つ、知の中心と言つていい国だ」

「そう、だからそこに行けば何かわかるかもしれない。だから紹介状か何か書いてもらいたいんだよ」

「そうか。紹介状ならいくらでも書くが、2人だけで行くつもりか？」

「ああ、そうだよ。大人数で行く気はないからぞ」

「タマキとカレンならば何も心配いらないだろ？ な」

「そうそう。年上がおすすめよ環君」

「その通りだな」

エバンスと葉子は見つめ合つた。環は頭をかいてカレンに小声で話しかけた。

「どうすんだよこの2人」

「あまり邪魔をするのもよくありませんね。準備もありますから、私達は早く失礼しましょう」

「言えてる」

翌日の早朝、城の裏の城門前。いつも通りの制服にマントで全身を包んだ環と、闇王と戦った時の装備を身に着けたカレン、それと荷馬車が1台、見送りはエバンスと葉子とバーンズだけだった。

「2人だけで本当に大丈夫か？」

「平気平気。仰々しくしたくないしさ」

エバンスの問い合わせに環は軽い調子で答えながら、バーンズから受け取つた荷物を荷馬車に積み込んでいった。そのうち剣を渡されたが、環は首を横に振つた。

「俺は武器は要らないよ」

「しかし、魔法が使えないような状況もあるかもしれないぞ。特にタマキの魔法は威力がありすぎるだろつ」

「ところがそうでもない。ミーミーファイアボール」

環はにやりと笑つて人差し指を立てた。その指の先に爪ほどのサイズの火の玉が現われた。

「受け止めて、ちょっと熱いけど」

指をエバンスに向けると、火の玉がゆっくりと飛んでいった。エバンスはそれを手で受けた。火の玉は軽く弾けて消えてしまつた。

「これは驚いた。ここまで加減できるものなのか」

「ま、1発なら火傷すらしないし、屋内でも安心して使えるよ。でも100発も撃てばこれでもけつこう威力があるんだ。この半年の研究成果だよ」

「武器のことは要らない心配だったな。荷物はこれで全部なのか?」

「はい。必要なものは積み込みました」

カレンはそう言って御者台に上った。環は荷台に乗り込んで、3人に手を振った。

「それじゃ、行ってきます」

「ちょっと待つて」

葉子が荷馬車に駆け寄つて、何かを環に差し出した。それは2つの同じ形をしたアミュレットだった。

「これは？」

「精霊の力を借りて私が作つたの。環君とカレンの旅の無事を祈つてね」

「そりなんだ。ありがとうございます」

環はアミュレットを受け取つて、さっそくそれを着けた。カレンも葉子の手からアミュレットを受け取ると、同じように着けた。

「ありがとうございます。これほど心強いお守りは他にありません」カレンは笑顔でそう言つと、静かに荷馬車を出発させた。

## 出合い

出発してから2日経った。道中は平和で、特に何事もなかつた。ちょうど昼食になつたので、カレンは馬車を止めた。

「そろそろ昼食にしましよう」

「あれ、もうそんな時間だつた」

環はそう言つて昼食用の道具と材料を持つて荷台から飛び降りた。適當な場所を見つけてその荷物を降ろした。カレンは馬を少し離れたところにある木に結わえつけると、環のほうに歩いていったが、途中で何かを感じて森のほうを見た。

「どうしたの」

「何か聞こえませんか」

「何か？」環は立ち上がりてカレンの見ている方向に目を凝らした。

「俺には何も、いや、聞こえるな」

「戦いの音のように聞こえますね」

「行つてみようか」

「いえ、少し様子を見ましよう。どうやらこちらに近づいていっているようですし」

しばらく様子を見ていると、戦いの音はどんどん近くなつてきた。そして、森から2人の人影が飛び出してきた。

「姉さんのバカヤロー！　なにが森に入つて軽く魔物退治でもしようだよ」

「あんなに出でくるなんてわかるわけないでしょ！」

環達のいる道と森はそれなりに離れていたが、それでも聞こえてくるほどの大声で2人は言い争つっていた。その後ろからは魔物が數十体続いていた。

「なんだあれ」

「見たところ、1人は剣士、もう1人は魔法使いでしょうか。おおかた魔物を狩つていて深入りしすぎたのだと思います。どうします

か？」

「そりゃ もちろん助けるさ」 環は1歩森のほうに踏み出した。 「ま  
ずは足止めだ。ミーミーアイスバイト、1000発くらい」

環の頭上に小さな氷の牙が大量に出現した。手を上げて、走つて  
くる2人に向かつて大声を出した。

「お前ら、伏せろ！」

2人は声に反応してとっさに伏せた。それと同時に環が手を振り  
下ろし、大量の小さな氷の牙が飛んでいった。それは伏せた2人の  
頭上を通り過ぎ、魔物達に降り注ぎ、その足を止めた。

「カレンつかまれ、一気に跳ぶぞ！ ストーンスキン！ バースト  
！」

環とそれにつかまつたカレンは伏せている2人と魔物達の間に一  
気に跳んだ。魔物達はミーミーアイスバイトで多少傷ついているよ  
うだったが、致命的な傷は負っていなかつた。

「これってピットデーモンとオーガだけ？」

「はい、オーガが3体もいますね」

「どうしようか」

「ピットデーモンのほうはタマキ様におまかせします。私はオーガ  
を」

「わかった」

環はそう言って、ゆっくりとピットデーモンが密集しているところ  
に歩いていった。ピットデーモンが飛び掛つてくると、手当たり  
次第に殴る蹴るで吹き飛ばし始めた。

カレンはショートソードを抜き放ち、オーガ3体と対峙した。ま  
ず一番近くにいるオーガに向かつて、カレンはベルトからナイフを  
抜いて投げつけた。ナイフはオーガの目に刺さり、その動きが止ま  
った。カレンは素早く走り、その喉のあたりをショートソードで一  
閃した。

オーガは声も出せずにつぶせに倒れた。後方のオーガはそれに  
かまわず左右から2体同時にカレンに突進してきた。カレンはショ

「トソード」雷をまとわせると、左のオーガにそれを飛ばした。それからすぐにショートソードに氷をまとわせ、長い氷の剣を作り上げると、右のオーガの振るつた腕をかいぐり、その胸元を深々と貫いた。そして、剣を抜き倒れるオーガから離れ、雷で倒れたオーガに近づき止めを刺した。

環のほうは、ピットデーモンを殴つたり蹴つたりしながら、それを1つの場所に集めていた。

「こんなもんでいいか、ライトニング！」

環が手を振り下ろすと、雷がまとめられたピットデーモン達を撃ち抜いた。集められたピットデーモンは全て灰になつて消えた。それでも少数残つていたピットデーモンが環に左右から襲いかかつたが、環は落ち着いて手を左右に広げた。

「バースト！」

両手からの爆発で残つたピットデーモンも吹き飛ばされた。背後の2人は呆然としてその戦いを見ていた。

「これで全部かな」

「そのようですね」

環とカレンはまだ立ち上がれない2人に視線を移した。

「おーい、大丈夫かい」

2人はその呼びかけに何かのスイッチが入つたかのように立ち上がつた。

「あ、あの、助けていただいてありがとうございます」

剣士風の少女は勢いよく頭を下げた。そして隣をちらつと見ると、突つ立つている魔法使い風の少年の頭を無理矢理下げさせた。

「あー、2人とも怪我はないの？」

環がそう聞くと頭を下げたのと同じくらいの勢いで少女は頭を上げた。少年の頭も上げさせた。

「いえ、大丈夫です、全然大丈夫です」

「そつか、それならいいけど。ああ、そういえばまだ名乗つてなかつたか、俺は環、でこつちがカレン」

「タ、タマキさんにカレンさんですね。私はミラとこります」

「僕はソラです。よろしくお願ひします」

「そういうえばさつとき姉さんとか言つてたけど、姉弟?」

「はい私が姉でこっちが不肖の弟ですよろしくお願ひします」

「比較的落ち着いているソラと比べると、ミラは落ち着きがなかつた。カレンは落ち着いているソラに声をかけた。

「あなた達の荷物はどうしたんですか?」

「荷物! そだ荷物! ソラ、見に行くよ!」

ミラはソラの腕をつかんで駆け出した。環はその後姿を見ながらなんとなく笑みを浮かべた。

「なかなか面白い姉弟じゃないか」

「はい、妙な2人組みですね。見たところ姉のほうはレザーアーマーを装備していますが、あれは要所に鋼のプレートが入っていますね、上等なものです。剣もただの剣ではないですね。弟のほうの服も上等なようですし、ロープには何か魔法がかけられている感じがしました。杖もそうですね」

「よく見てるね。それで、どうしようか、行っちゃったけどあの姉弟」

「戻つてくると思いますよ。昼食にして待ちましょ」

「それがいいか」

2人は荷馬車の場所まで戻つて、昼食の準備を再開した。そして、鍋の中のシチューがいい匂いを出し始めた頃、ミラとソラががっくりして戻つてきた。

「ああ、戻つてきたか。荷物はどうだったの?」

「それが、動物に荒らされたみたいで」ソラはぼろぼろになつた袋をよく見えるように持ち上げた。「食料もお金もほとんどなくなつてました」

ミラとソラはがつくりとうなだれた。カレンはその様子を見て、器とスプーンを取り出すと、シチューをよそつて2人に差し出した。「とりあえず食べて落ち着きましょうか」

ミラはうなだれたまま黙つて器を受け取ると、一心不乱に食べ始めた。ソラのほうは多少遠慮しながら、シチューを口に運んだ。環とカレンは自分達もシチューを食べながら2人の様子を見ていた。それからしばらくして、シチューを食べ終わった2人はだいぶ落ち着いたようだつた。

「落ち着きましたか？」

カレンがそう聞くと、2人とも首を縦に振つた。

「それでは事情を話してもらえますか？　話したくなればそれでもかまいませんが」

「はい、私達は家の事情で修行の旅をしているんです。家のことはわけあつて明かせないのですが、決して怪しいものではありません」ミラはだいぶ落ち着いたようで、しつかりした口調だつた。

「修行の旅ね。じゃあ森で魔物と戦つてたのもそういうわけなのか」「そうです！　世のため人のため私達のためです！」

ぐつと拳を握つて、ミラは力強く宣言した。

「姉さん、あんまりきまつてないよ、それ」

ソラは冷静な一言を発した。カレンは眼鏡の位置を直してから、2人の顔を交互に見て口を開いた。

「修行の旅ということですが、どこか目的地はあるのですか？」

「いえ、特に目的地は決めてません」

「そうです、私達が探しているのは場所ではなく人なのです」

「人つて？」

環の問いにミラは胸を張つた。

「もちろん師匠です」

2人は目を輝かせて環とカレンを見つめた。

師弟？

師匠といつ話はとりあえず保留にしておいて、4人に増えた一行は最寄の町を目指していた。環はカレンの隣に座って、荷台で何かを話している姉弟をちらつと見た。

「タマキ様、あの2人をどうするつもりですか」

小声でのカレンの問いに、環は空を見上げた。

「師匠なんて言われてもなあ。まあけつこう面白そつではあるけどね。そこらへんに置いて行くわけにもいかないし、町に着いてから考えればいいんじゃない」

「私としては、2人の力を見たいですね。見所があるのなら、連れて行くのもいいと思います」

「かなわないと思つて逃げるあたりはいいんじゃないかな」

「そうですね」

カレンがうなずくと、後ろからミラが顔を突き出してきた。

「なんのお話をしてるんですか？」

「ああ、次の町で補給しておく物の相談だよ」

環は適当にごまかした。

「あの、それで私達の弟子入りのことは、どうでしょうか？」

「それはさつきも言つたけど保留」

「そんなこと言わずにお願ひします！　お2人ほど強い方は見たことがないんです！」

「そうです、剣も魔法も次元が違います！　ぜひ僕達を弟子にして下さい！」

「わかったわかった」勢いよくせまるミラとソラに環は若干引き気味になつた。「その件は町に着いてからゆづくと話しえぬつか」

「雑用でもなんでもしますから」

「そうです、不肖の弟ですがこを使つてやつてください」

「姉さんもだよ」

「私のぶんまで弟が働きます」

「それなら今晚は働いてもらいますよ。町に着くのは明日ですから」

カレンはそれだけ言った。

「そうそう、2人とも今はゆっくりしておきなよ」

環がそう言つと、2人はおとなしく荷台のほうに戻つていつた。そして夕方、夕食の用意は環とカレンがやつていたが、テントの設営等はミラ、ソラの姉弟がやつっていた。

「真面目にやつてるな」

2人の様子を横目で見ながら、環はカレンに小声で言つた。カレンも2人の様子を見て、渋い顔はしていなかつた。

「野宿の経験はあるようですし、手際もそれなりですね」

カレンの言う通り、ミラとソラはそれなりにしっかりと働いていた。2つのテントを設営し終えた2人は、環達のほうに走つてきた。「テントはばっちりです。ほかにやることはありますか？」

「そうですね、ここ周囲でも見てきてもらえますか。地形や危険がありそうな場所をよく見ておいてください」

「はい、わかりました！」

ミラは元気よく答えてソラを引っぱつていった。カレンはその背中を一瞥して、夕食の準備を続けた。

「しかしあの2人、育ちはよさそうに見えるし、間違つても悪人には見えないよな」

「私も同感です」

「旅の道連れとしては悪くないかもね。賑やかだし」

翌日、一行はそれなりの規模の町に到着した。カレンは荷馬車と大きな荷物を厩舎に預けた。

「人がいるところは3日ぶりか。なんか久しぶりな気がするなあ」

環は町を体を伸ばしながら町を見渡した。小規模ではあるが、それなりに活気のある様子の町だった。

「で、カレン、これからどうするの」

「まず宿を確保しましょ。その後は必要な物の買出しですね」「わかつた。お前達はどうする？」

「それはもちー。うぐー。」

環の問いにミラが勢いよく答えようとしたが、ソラがそれを押さえた。

「僕達はお金もほとんどないので、できればこー一緒にさせてもらいたいのですが」

「ああ、いいよ」

そうしてたどり着いたのは宿兼酒場兼食堂といふような場所だつた。カレンがここの主のような中年の女のところに行つて、聞、環達は適当に座つて待つていた。すぐにカレンが戻ってきた。

「部屋は借りられました。上の2部屋です」

そう言ってカレンは鍵の1つをミラに差し出した。

「あなた達の部屋の鍵です、しつかり管理しておいてください」「は、はい。必ず守り抜きます！」

「いや、それほどのもんぢやないって」

環の一言はミラには聞こえなかつたようだ、その気合は少しもおとろえなかつた。ソラは特に何も言あつとしなかつた。

「荷物を部屋に置いてから買出しに行きましよう」

カレンは特にそれを気にすることもなく、自分の手荷物を持って階段に向かつた。環達もすぐにその後を追つた。

そして、買出しのため市場に来たのだが、そこでは環が妙に生き生きとする事態に遭遇した。

「この剣は俺が先に目をつけといったんだ」

「高い値段をつけたこっちのものに決まってるじゃないか」

2人の傭兵風の男が武器商人の軒先で1本の剣をめぐつて争つていた。環はそこにどんどん近づいていつて2人の間に割つて入つた。

「はいはい、待つた待つた」

いきなり割つて入つてきた環に、2人の男は思わず争いを止めた。環はいきなり争いの元になつている剣をつかんだ。

「この剣をどつちが買うのかでもめてるわけだ

「おい、あんた何を」

「1つ提案があるんだけどな。この剣の持主を決めるいい方法」

「いい方法だと？」

「実力があるほうを使えばいいじゃないか。その方法はこのミーミ  
ニアイスバイト」環はそう言って頭上に大量の小さな氷の牙を出現  
させた。「こいつを多く落とせたほうが買えるってことでどうかな  
傭兵風の男2人はその光景を見て驚いていたが、すぐに気を取り  
直して面白そうに笑った。

「それはいい。あんたもそれでいいだろ」

「ああ、面白そうだ」

「決まりだな。おっさん、それでいいよな」

環が武器商人にそう聞くと、商人は疲れた様子で首を縦に振った。  
「早く決めてくれるんならどつちもいいですよ  
よし、決まりだな。場所を変えよう」

町の広場には人だかりができていた。

「はいはい、危ないからそつち側には立たないようにね」

環は傭兵2人を適当な位置に立たせると、見物人を危険がないよ  
うに誘導した。それから自分も適当な位置まで歩いてから傭兵達の  
ほうに振り向いた。

「なんか人数が多いな」

傭兵2人に加えて、なぜかミラとソラも混じっていた。

「剣は欲しくないんですけど、私達の実力を見てもらいたいんです  
ミラの言葉にソラは無言でうなずいた。傭兵達は変なものを見る  
目で2人を見たが、環は特に気にする様子もなかった。

「まあいいか。それじゃ順番に始めよう。10発を連続で撃つから、  
一番多く落とした人が勝ちだ」

環はまず一番左の傭兵に指を向けた。

「始めよう

まず1人目は5発を剣で打ち落とした。2人目は4発。そしてミラの順番になつた。

「よろしくお願いします」

頭を下げるときの柄に手をかけて息を整えた。そして一気に剣を抜くと、それは淡い光をまとっていた。

1発、2発、3発と鋭い動きで順調に氷の牙を打ち落していく。4発、5発、6発、7発と続けて打ち落とし、8発目に剣を振り下ろそうとした時、剣がまとっていた淡い光が突然消えた。

「あれ？」

「は！」と、元気の抜けた声を出して、動きが鈍くなつた。その鼻二柱に、「ア、アイスバイトが直撃した。鼻を押さえてうずくまつたところに、さらに2発の氷の牙が迫り、見事に額に連続で命中した。

卷之三

一 残念、  
二 発たな。  
三 それじゃ次だ。

環境にすぐ堪能の力を放つておいて、ソトに指を向けた

卷之三

杖をかまえたソラに向かつて氷の牙が放たれた。だが、ソラは杖を振るう様子を見せずに、それを両手で持ち、地面にしつかりと固定した。

「風よ！」

## その声と

その声と共にソラの前につむじ風が巻き起こり、氷の牙は7発そ  
らされたが、突然風が消え、残りは見事に命中した。

「イテテテテテ」

ソラモリと同じような結果になつた。

「0発ですね」

カレンがそう言うと同時に、しまらない結果に見物人はどんどん去つて行つた。傭兵達もいたたまれなくなつたようで、結局剣は買わずどこかに行つてしまつた。武器商人はとうくに店に戻つてい

「タマキ様」誰もいなくなつてからカレンは口を開いた。「この2

人を連れて行くのも悪い考へではないと思います  
「そうだね。面白そうだし、一緒に旅をすることにしようか」

荷馬車に揺られながら、環はミラとソラに話を聞いていた。

「ミラの剣は聖剣ってやつなんだ」

「はい。選ばれた者しか使えない由緒正しい剣なんです」

「その力が町でやつてみせた剣が光るアレか」

「そうです、あの力を使うと古今無双の剣豪達に肩を並べるほどのが発揮できるんです」

「でもまだうまく使えない」と

「はい、恥ずかしながら」

ミラは少しつむいてため息をついた。環は今度はソラのほうに顔を向けた。

「で、ソラは風の精霊の力を使えるわけだ」

「いえ、僕は火の精霊の力も使えるんです」

「それは珍しいですね。2種類の精霊から加護を受けているというのは初めて見ます」

カレンは前を見たまま口を挟んだ。ソラは少しつむいた。

「はい、そうなんですけど。僕はまだ一度にどちらか片方の力しか使えないんです」

「だからあの時は風の力だけだったのか。で、やつぱり片方だけでも、まだうまく使えない」と

「はい、まだまだ未熟です」

「なるほどね。才能は抜群でやつだ」

「そんなタマキ師匠、おだてないでくださいよ」

「そう言わると恥ずかしいです」

盛り上がるミラとソラだった。

「今はまだまだですけどね」

カレンの一言ですぐに盛り下がった。ミラとソラは少しがっくりしたようだったが、すぐに顔を上げた。

「でも僕達の力はあんなものじゃありません」

「そうです、もつとちゃんと見てもらいたいんです」

「それでは、見せてもらいましょう」カレンはそう言つて馬車を止めた。「少し早いですが、昼食の準備もありますからね」

御者台から降りたカレンは、道から離れた場所まで馬を引っ張つていき、杭を地面に打つて馬をそこに結わえた。環達も必要な荷物を持つて荷台から降りた。

「カレン、こつちは俺がやつておくから、2人のほうはまかせるよ」環は食料や調理道具を下ろしながらそう言つた。カレンはうなずいてミラとソラに歩み寄つた。

「では、少し離れた場所で始めましょうか」

「はい、わかりました」

ミラとソラは声を揃えて氣合をいれると、カレンに向いて行った。カレンは適当な場所まで歩くと、振り返つてショートソードを抜いた。

「まずはミラ、あなたからです。自由に打ち込んでください」

「は、はい」

ミラは1歩踏み出して剣を抜いた。そして、上段から一気にカレンに斬りかかつていった。カレンは足と上体を少しだけ動かしてそれをかわすと、振り下ろされた剣を自分のショートソードで上から押さえつけた。

「本気で来てください」

カレンはそう言ってからミラの剣を自由にするといふと、数歩後ろに下がつた。ミラは剣を構えなおすと、息をゅつくりと吐いた。その手の中の剣が淡い光を発した。

「いきます！」

声と同時にミラは一気にカレンとの間合いを詰め、袈裟切りに剣を振るつた。カレンはそれを簡単に避けたが、すぐに逆袈裟の剣が襲いかかつた。だが、それも後ろに跳んでかわした。

「踏み込みが甘いですね」

カレンはそう言つて、さらに振るわれる剣を避けたり、ショートソードで受け流したりしていた。ミラはそれに答える余裕はなく、必死に剣を振るつた。だが、それもカレンには全く届かなかつた。

「やあああああ！」

ミラは気合と共に上段から渾身の力を込めて打ちかかつたが、途中で剣の光が消え、動きが鈍つた。カレンは横にかわすと、足をかけてミラを転ばせた。ミラはもろに顔面から地面に突つ込み、しばらくしてからやつと立ち上がつた。

「イタタ、ひどいですよカレン師匠」

「その剣の力は悪くありませんが、不安定ですね。それに力が消えた瞬間に動きが鈍くなりすぎですよ。実際の戦いでは命取りになります。剣の力を安定して使えるようなるのも重要ですが、元の実力もしつかり上げる必要がありますね。それができれば大きな力になりますよ」

「がんばります！」

「次はソラ、あなたの番です。精霊の力でも魔法でも好きなほうできてください」

「わかりました」

ソラは杖を両手でしつかり握り、地面に突き立てた。

「風よ！」

声と共に、強烈な疾風がカレンに襲いかつた。だがカレンは落ち着いてその疾風の規模を見極め、その線上から身をかわした。

「まだまだ！ 風よ切り裂け！」

今度は凝縮された風が刃のようになつてカレンに向かつて來た。だがカレンは今度は避けようとせず、正面からそれをショートソードで両断した。風の刃は真つ二つになり、カレンの背後にぱらぱらに着弾した。

「そこで休まず攻撃ですよ」

カレンはそう言いながら駆け出し、ソラとの間合いを一気に詰めた。ソラは少しあわてたような表情を見せた。

「風、じゃなくて火よ！」

ソラは田の前に炎の壁を出現させたかったのだが、あわてたせいか、それはせいぜい焚き火程度になってしまった。そうしていろいろにもカレンはどんどん迫ってきた。

「か、風よ！ つてうわあ！」

ソラは自分を風で横に吹き飛ばしてしまった。杖を手放して地面に転がったソラは顔面を打ったのか、しばらくうずくまっていた。

「あれくらいで失敗してしまってはいけませんよ」

カレンはショートソードを収めてからソラの手をつかんで立ち上がりさせた。

「それに、風と火の精靈の力を同時に使えるようになるべきですね。愛称がいい組み合わせですし、うまく使えればそれも大きな力になります」

「はい、がんばります」

「それでは戻りましょうか」

3人は環のいるところまで戻った。環はちょうど材料を入れた鍋を火にかけたところだった。

「ああ、戻ったんだ。それで、どうだつた？」

「2人とも課題はありますが、潜在的な力は大きいですね。それから、ミラは私が教えられますが、ソラはタマキ様が教えたほうが多いと思います」

「でも、俺は精靈の力なんて使えないけど」

「魔力の制御と似ているという話ですから、大丈夫ですよ」

「なるほど。それより、みんな立つてないで座りなよ」

3人は適当な場所に腰を下ろした。それから、ミラがおもむろに口を開いた。

「あの、師匠達はどこに向かっているんでしょうか？」

「あれ、言つてなかつたっけ」

「言つてませんよ。どうしますか」

「どうつて、別に言つても何の不都合もないよね」

「はい」

それを聞いたミラは身を乗り出した。

「それで、目的地はどこなんでしょうか」

「エルドゥネス共和国の首都だよ」

「知の都ですか！」

ソラが興奮した様子で乗り出してきた。ミラはいまいちピンとこない様子だった。

「ソラ、そんなに興奮すること？」

「姉さん、世界最大の図書館を有すると言われる知の都だよ。誰でも閲覧を許されるわけじゃない、僕達だけじゃまず入れないよ」

「そんなすごいところなの？ でも、師匠達は入れるんですか？」

「問題ないよ。まあコネつてやつで」

「コ、コネ？ すごいんですね師匠は」

「すごいのかな？ カレン」

「よくあることではありませんね」

その会話にソラはしばらく呆然としていたが、だんだん喜びが湧き出でたようだった。

「やった！ 図書館、まさかあの図書館に入れることになるなんて今にも踊りだしそうなくらい喜んでいるソラだったが、ミラはそれをなにか理解できないもののように見ていた。

「そうかそうか、それはよかつた」

環は楽しそうにそう言っているだけで、カレンは鍋の様子をしつかり見ていた。

## 知の都

一行は知の都と呼ばれるエルドウネス共和国の首都に到着した。城下町には本屋が並び、その城はほぼ全てが図書館という実に変わつたところだつた。

「なんかすご~いところだね、ここ」

環はそう言いながら、店を構えたものから露店まで、様々な本屋が並ぶ通りを歩いていた。ミラはあまり興味がなさそうだったが、ソラは興奮して店から店へ渡り歩いていた。

「本くらいでみんなに興奮するなんて理解できません」

「それはまあ、好きなやつは不自然なくらい好きなもんだからね。俺だってそれほど好きってわけでもないけど、この半年でずいぶんたくさん読んだよ」

「そういうものなんでしょうか」

「そういうもの。読んでおけば、何か役に立つこともあるかもよ」

「はい、わかりました!」

ミラはそう言って適当な本屋に駆け込んでいった。それを見送つた環も、カレンが戻つてくるまで時間を潰そつと、適当に本屋を覗くことにした。

しばらくするとカレンが戻つてきて、本屋を覗いている環に声をかけた。

「タマキ様、城の図書館の閲覧の許可が出ました

「そう、それじゃ行こうか

環は本屋から出てミラとソラを探した。2人はすぐに見つかって環に呼び寄せられた。

「これから城に行くよ」

「図書館に入れるんですね、やつた!」

「でも、宿はとらなくていいんですね?」

「城に滞在する許可も出でますから、その心配はありませんよ」

ソラはそれを聞いて踊りださんばかりに喜んだ。ミラは城に泊まれると聞いて、それは喜んでいるようだった。

一行は城の門まで到着した。カレンが守衛に声をかけると、城内に通じる扉が開かれた。中には受付のようなものがあり、カレンはそこに歩み寄ると、ショートソードとナイフ、ダガーを預けた。

「ミラとソラも武器を預けてください」

ソラはすぐに杖を預けたが、ミラは少しためらつてから剣を預けた。環は別に武器は持っていないが、マントを外して受付に渡した。それから案内人が来て、4人を奥へと案内していく。環は歩きながらカレンに小声で耳打ちした。

「魔法があるのに武器だけ預けるのって意味あるのかな」「形式的なものですよ」

「あの、それよりどこに向かってるんですか？」

ミラもその会話に加わった。

「館長のところです」

「館長？」

「この国のHのよひなものですね」

「そうなんですか。ソラ、あんた知つてた？」

「知つてるもなにも、館長に会えるなんて信じられないことだよ。本当に師匠達は何者なんですか？」

「じきにわかりますよ」

それからは無言で4人は歩いた。しばらくは廊下を歩いていたが、ひときわ大きな扉の前に着くと、その扉が開かれ5人は中に入った。中は巨大な本棚が並んでいる図書室だった。

「いらっしゃいです」

案内人はどんどん奥に進んでいった。ソラはしきりにまわりを見まわしていた。

「本なら後でたっぷり読むことができますよ」

「そろそろ、落ち着きなくきょろきょろするんじゃないの」「わかつてゐるよ」

そう言つてゐるうちに、本棚が並ぶ一番奥にある古びた扉の前に到着した。案内人は扉をノックした。

「館長、お客様をお連れしました」

「どうぞ」

穏やかな声がそれに答えた。扉が開かれると、本棚が並ぶ十分な広さのある部屋に初老の女性が座つていた。その机の上には開かれた本が数冊置かれていた。案内人は椅子を4個持つてきて並べると、礼をして部屋から出て行つた。

「みなさん、おかげになつてください」

初老の女性は落ち着いた声でそう言つた。4人が椅子に座ると、机の上から本を一冊手にとつて4人のほうに椅子の向きを変えて微笑を浮かべた。

「よく来てくれました。ノーデルシア王国を救つた勇者、タマキ様」「あのノーデルシア王国を救つた！」

「勇者が師匠！」

ミラとソラは裏返つた声を出して驚いた。

「ああ、まあそうだけど」

環は落ち着いたものだった。

「ミラ、ソラ、その話は後にしましょうか」

カレンにそう言わると2人は黙つてうつむいた。初老の女性は穏やかな顔でそれを見てから口を開いた。

「はじめてまして、私はこここの館長を務めているエリットです」

エリットは手に持つた本をカレンに差し出した。

「カレン、あなたと会うのは初めてですが、この日記の持主から話だけは聞いていましたよ」

「日記の、持主ですか」

カレンはその本を受け取つて適当なページを開いてた。そして、しばらくそれを読んでから顔を上げた。

「驚きました。私のことが書いてあるようですね」

そう言つたわりには、カレンはあまり驚いていないように見えた。

環はそれを見て首をひねった。

「カレン、その本は？」

「旅の日記です」

「つまり、それはカレンが一緒に旅をしていたつていう人の日記なのか」

「はい、そうです」

「で、それって誰なの」

「ハティス。私の少し変わった友人です」

環の問にはエリットが答えた。

「昔は大賢者などと呼ばれた人でしたが、ある時から人々が持つて  
る自分の記憶を封じてまわっていたんですね」

「記憶を？ なんのために？」

「目立ちたくないからだと言つていきましたけどね」 エリットは何か  
を思い出したように笑つた。「それも嘘ではなかつたのでしょうか、  
本当の目的は別にあつたのでしょうか。私の記憶は封じずに、その  
日記を残していくのですから」

「そのハティスって人に会えれば色々わかるんだな」

「あなた達が求めるものが何かはわかりませんが、ハティスと会え  
れば必ず助けになるでしょう」

環はその言葉にうなづいてカレンを見た。カレンは何かを考え込  
むようにして日記をじっと見ていた。

「それじゃあ、エリットさん。図書館を見せてもらつてもいいです  
か？」

「ええ、どこでも」「自由にご覧になつてください。まずはお部屋に  
ご案内いたしましょうか」

エリットはそう言って立ち上がつた。4人も立ち上がり一礼する  
と部屋から出た。それからそれぞれの部屋に案内された。それから、  
環はミラとソラを呼んだ。

「ミラ、ソラ、俺はカレンと一緒にこの日記を調べるから、2人は  
自由にしていいぞ」

「いいんですか？」

「ああ、楽しんできなよ」

「はい、姉さん行こう！」

「ちょっと引つ張らないでよ」

2人は廊下に消えていった。それを見送つてから、環はカレンの部屋のドアをノックして中に入ると、日記を持って椅子に座つていたカレンの肩に手を置いた。

「カレン、平氣か」

「平氣です。少し、驚いているだけですから」

「いきなりあんなことを知らされたら驚くよな。でも大丈夫だ、時間はあるんだからゆっくり調べよう」

「そうですね。ゆっくり、調べましょう」

カレンは少し笑つてから立ち上がった。2人はさつきの図書室に向かつた。

「何から調べようか」

「この日記を日付順に古いほうから、手当たり次第に調べていきましょう」

「そうすればハティスっていう人の足取りがよくわかるな。目的もわかるかもしねー」

「はい、私の記憶は封じられた影響のせいか、あまりあてになりそういうにありませんから」

「よし、早速始めよう」

## 自称天才魔導師

知の都に滞在して数日、環とカレンはハティスの日記のほとんどを調べ上げていた。足取りはかなりわかつたのだが、最後の日付は、知の都に訪れた4年前のものだった。

「これだと、今どこにいるかは絞り込めないな」

「そうですね。それに、あまり重要なことは書かれていないようです」

「カレンのことも詳しく述べてないな。10年も書いてるのに」

「6年前までは一緒だつたのですけどね」

「まあ、なんにせよ、これ以上ここにいてもわかりそうなことはないか」

環はそう言つて机の上に積み上げられた本を眺めた。

「問題はどうやって探すかだ。会う人全部の記憶を封じてるなら、人に話を聞いても決め手にはならないし」

「ですが、それは存在 자체を忘れさせるものではありませんから、全くヒントがないわけではありません」

「そうだよな。誰かに会つたけど覚えていないうちの、不自然なのを探せばいいわけだ。でもそれも、人に会つてればの話か。でも何もないよりはましかな」

「エリット様のお話では、変わった人のようですから、人里からは離れた場所にいるかもしません」

「とにかく動かないと駄目そうだね」

環は立ち上がりつて体を伸ばした。

「すぐに発ちますか？」

「そうしよう。俺はミラとソラを呼んでくるよ。受付で落ち合おう」「では、私はこここの片づけをしてから向かいます」

環はカレンと別れてミラとソラを探しにいった。2人はこの数日の間に定位置になつた机にいた。ミラは机に突つ伏して熟睡、ソラ

は魔法や精靈に関して書かれた本を手当たり次第に読んでいた。

「2人とも、そろそろ出発するぞ」

その一言に、ミラは勢いよく立ち上がった。

「やつたー！ ソラ、早く本返してきなさい」「対照的にソラはがっくりとつなだれていた。

「出発ですか。ああ」

それでもソラは立ち上がり本を抱え、元々あつた場所に返しにいった。ミラもそれを手伝い、手早く本を片付けて戻ってきた。

「それでタマキ師匠、どこが目的地なんですか？」

「それが決まってないんだけどね。とりあえずはここから一番近い町かな」

「わかりました。すぐに準備をしてきます」

ソラは立ち直つたらしかつた。

「じゃあ受付で集合しよう」

そう言つて環は2人に背を向けた。その向かつた先はエリットの部屋だった。環はドアをノックして返事は待たずに中に入った。

「おや、タマキ様。どうしました？」

「いや、そろそろ出発しようと思つて。だから挨拶にきたんですね」「ハティスを探しに行くんですね。どこから探しに行くつもりですか？」

「まず、一番近くの町に行くつもりですよ。そこからは一番長く滞在したつていう場所の近くの村に行くつもりです」「そうですか。旅の無事を祈りますよ」

エリットはそう言つてから、机の引き出しを開けて小さな箱を取り出して、それを差し出した。環はそれを受け取つて、それを開けた。

「これは、指輪」

「ハティスから預かっていたものです。カレンと一緒に自分を探しにくる者がいたら渡すようにと、頼まれていたのですよ」

「なるほど」環は指輪を取り出すとそれ左手のひとさし指にはめた。

「ぴつたりだ。」この指輪、きっと、なにか意味があるんだろうな」「そうだと思いますよ。では、幸運を祈ります」

「ええ、行つてきます」

環は立ち上がり部屋から出て行つた。

それから受付に来た環だが、そこではミラが大きな声を出して誰かと言い争つていた。その相手は陰になつていて見えなかつた。

「あんたみたいな怪しい奴を師匠に会わせるわけないでしょ！」

「ふん、半人前の剣士風情が。いいからさつと勇者とやらを連れてくるんだ」

環は離れたところでおたおたしているソラに声をかけた。

「ソラ、あれは何やつてるんだ」

「あ、はい。それがあの変なのが、勇者がここにいるはずだつて押しかけてきたみたいで」

「変なのね」

そう言いながら環はミラの背後に移動した。ミラと喧嘩で争つていたのは、長袖と長ズボン、小ぶりなマントに腰にはメイスを下げている、ミラやソラと同年代くらいの少年だった。

「探してるのは俺かな」

「な、師匠、なんでここにいるんですかあ！」

「いや、ここに集合つて言つたじやないか」

「そ、それはそうですけど、時と場合というものが」

「そうか、お前が勇者か！」少年は環に向かつて指を突きつけた。

「この天才魔導師ミニック様と勝負しろ！」

「勝負？」

「そうだ、勇者といづくらいいだから腕は立つんだろ？。僕が戦つてやるのにふさわしい」

「この、言わせておけば偉そうに」

飛びかからんばかりのミラを押さえながら、環はどうしたものかと考えていた。そこにタイミングよくカレンが来た。

「タマキ様、何があつたのでしょうか」

「いや、それが俺と勝負したいって言つんだよ、ここの子が

「勝負、ですか」

カレンはミニックをじっと観察した。

「とりあえず場所を変えたほうがよさそうですね」

4人にミニックを加えて、一行は知の都を出発した。ある程度都から離れ、見通しのいい場所に到着すると、カレンは荷馬車を止めた。

「ここのあたりなら思う存分できますよ」

「思う存分ね。面倒くさいな」

環は荷馬車から降りて歩いていへりミニックの後ろ姿を見ながらぼやいた。

「そうです。あんなの相手をすることなんてありません」「でも、あれだけ言つたらビのへりの実力があるのかちょっと興味があります」

ミニックのことが気にくわない様子のソラとは逆に、ソラはミニックに興味があるようだった。

「そうだな、俺のことを探しまわってたんなら、相手をしてやらないのも可哀想か」

そう言つた環は荷馬車から降りてミニックの後を追つた。ミリと

ソラもそれについていこうとしたが、カレンが2人を止めた。

「2人とも、あまり近づかないほうがいいかもせんよ

「どういうことですか？」

「見てればわかる、かもしだせん」

ミリは渋々、ソラは特に何も言わずにその言葉に従つて、荷台から環とミニックを見つめた。2人はある程度の距離をとつて対峙したところだった。

「いつでもいいぞー」

環は手を振つてそう告げると、体の力を抜いてゆつたりと立つた。ミニックは両手を前に突き出した。

「ファイアウォール！」

その声と同時に、ミニックの前に炎の壁が出現した。そして、それは環に向かつてどんどん伸びてきた。

「面白い魔法だな」

環は余裕を持つてそれを観察しながらつぶやいた。そうしているうちに、炎の壁は環を包み込むように広がった。そして、それは一気に環を中心に収縮した。

「どうだ！」

燃えさかる炎を満足気に見ながら、ミニックは膝に手を置いて肩で息をしていた。

「バースト！」

だが、環の声と共に炎は爆風によつて一瞬で吹き飛ばされた。

「今のはけつこうすじかったよ」

その傷一つない環の姿を見て、ミニックは慌てて体勢を立て直して、手を環に向かた。

「クソッ！ ライトニングボルト！」

だが、パチッといふ音がしただけで何も起こらなかつた。なんどやつても同じだつた。環はそれを見て空を見上げた。

「ちょっと寒いと思うけどね。ブリザードストーム、弱」

ミニックを中心として、いきなり小規模な吹雪が起こつた。環はそれを数秒ですぐに解除したが、ミニックはぼろぼろになつて地面に転がつていた。環はそれに近づき、しゃがんで状態を確認した。

「おーい大丈夫か？ ちょっとやりすぎたかなあ」

環の声にミニックはがたがた震えながらもしつかり反応して、その手をつかんだ。

「で、で、で、弟子に、してください」

### 3人の弟子達

「オリジナル魔法とは大したものだね」  
環は荷馬車に揺られながらミニーックを褒めていた。ミリは気に食わなそうな顔をしていたが、さつき先輩と呼ばれて気をよくしていたので、特につづかかることもなかった。

「しかし、それを1回しか使えないのは関心しませんね。それと、基本的な魔法は苦手なんですか？」

カレンの手厳しい一言にミニーックは頭をかいだ。

「えー、実は自分で考えた魔法以外は苦手でして」

「何種類くらい使えるんだい」

「3つ使えます。どれも威力抜群ですよ」

「まさかどれも1回しか使えないのではないでしょうね」

ミニーックは胸を張っていたが、カレンの言葉が図星だったようでもつむいでしまった。

「ところで、なんで俺があそこにいたって知つてたんだ?」

「それは僕の師匠から教えられたんです。知の都に行けば、そのうち勇者に会えるだらうつて」

「師匠?」

「昔は大賢者とか呼ばれてたらしいんですけどね。怪しい爺さんですよ」

「大賢者ですって!」

ミリがミニーックの言葉に反応して、その首をつかんで思いきり搖さぶつた。

「その爺さんについて知つてると全部吐きなさいー わあわあさあー!」

「姉さん落ち着いて」

ソラがなんとかそれを引きはがした。ミニーックはしばらく咳き込んでいた。

「こきなりなんなんですか」

「ミニーツク、その人の名前はわかるかな」

「はい、ハテイストっていいます」

その一言に、ミニーツク以外の4人は無言だが強く反応した。その雰囲気にミニーツクはとまどつたように全員の顔を見まわした。

「僕、なんか変なこと言いましたか？」

「いや、変なことじゃない。俺達はその人を探しに行くつもりだつたんだよ。今どこにいるかわかるか」

「商業都市エズラつていう町の近くで、けつこう遠いところです。僕は知の都に着くまで、そこから1ヶ月くらいかかりました」

環はそれを聞いて腕を組んで考え込んだ。

「大賢者という人には私達が何をするか、お見通しだったわけですね」

「そうらしい。ミニーツク、大賢者のところまでの案内をよろしく頼むよ」

その日の夕方、ミラ、ソラ、ミニーツクの3人はテントを張つていた。ミニーツクは手を止めて、地図を手に相談している環とカレンを見た。

「そこ、手を休めないで」

ミラに注意されても、ミニーツクは手を止めたまま口を開いた。

「ミラ先輩。タマキ先生とカレンさんはどんな関係なんですか？」

「関係つて、そりやあねえ」

ミラは含み笑いをしながらソラをつついた。

「なんで僕に話をふるんだよ」

「うーん、いやさあ、こうこう」とはなんかそういうことに興味なさそうというか、鈍そうなほうが説得力あるじゃん」

「なんなんだよまったく」

ソラはそう言ってテントを張る作業に戻った。ミラは舌打ちをした。

「我が弟ながらノリが悪い奴」

「あの、それで2人の関係は？」

「口・イ・ビ・トに決まってんでしょう」

「そうですかね。なんでそう思つんです」

「そのほうが面白い、んじゃなくて、テントだつて交互に見張りしてるけど1つだし、宿だつて2人部屋だけど同じ部屋だし」

「全然説得力ないですね」

「大体妙齢の男女が2人旅なんておかしいでしょ。勇者ならもつとお供をぞろぞろ連れててもおかしくないじゃない」

「お忍びなんでしょう」

「だからあ、駆け落ちとか考えたほうが面白いでしょ。まあ、実際はタマキ師匠もカレン師匠もめちゃくちゃに強いから護衛の必要がないのと、タマキ師匠の性格の問題だと思つけど」

ミーリックは少し感心したような顔をした。

「思ったよりも頭使つてるんですね」

「あんた、ケンカ売つてんの？」

ミラはミーリックに詰め寄りうとしたが、ソラがその間に入つて止めた。

「2人とも、早くしないと口が落ひるよ」

「はいはい、わかりましたよ」

ミラはミーリックから離れてテントを張る作業に戻った。環と話していたカレンは、その様子をたまに横目で見ていた。環との相談が一段落してから、カレンはそのことを口にした。

「あの3人はうまくやつていけそうですね」

「え？　ああ、ずっと観察してたの」

「はい、城に勤めて身に着けた技能です」

「なんでもありだなあ。でもミラとミーリックはよくケンカしそうになつてるよう見えます」

「あれくらいなら問題はないと思います。ミラにとっては生意氣な弟が増えたというくらいではないでしょうか」

環はカレンの言葉にちょっと笑つた。

「そうかもね」

「それに、ソラがうまく2人の間に入つてゐるようですから」

「しかしあま、まさか弟子なんてのができるとは思つてなかつたよ。おかげで退屈はしなむやつだけど」

「そうですね」

それから、2人は準備しておいた夕食の様子を見に行つた。その晩は特にそれ以上のこともなく、翌朝、環は全員を集めめた。「これからのことだけど、とりあえず行く予定だつた町にはこのまま向かうことにした。目的地はけつこう遠いから、それなりの準備が必要だしね」

「そのあとはまっすぐ商業都市エズラに向かうんですか？」

ミラの質問にはカレンが一步前に出た。

「そうしたいところですが、人数も増えましたし、隊商に同行できるといいですね。そのほうが旅の負担も少ないのでさうから」

「やう、だから町に着いたら護衛として同行できる隊商を探す。どうしても見つからなかつたら今まで通りに行くことになるね」

「エズラはけつこう有名ですから、たぶん見つかるんじゃないでしょうか」

「そう願いたいね」環はミニーチクの言葉につなぎいた。「それじゃ、出発しようか」

町に到着した一行は、宿を確保してから、手分けして条件の合ひ隊商を探すこととした。

「隊商なんてどこを探せばいいってのさー」

ミラはぶつくさ言いながら先頭を歩いていた。後ろを歩いているソラとミニーチクは宿から借りてきた町の案内図を見ていた。

「聞いてんのお2人さん」

「聞いてるよ姉さん。市場があるみたいだから、とりあえずそこに行けばなにか見つかるんじゃないかな」

「市場ね。なんか面白いもんでもあるといいけど」

「ミラ先輩、買物に行くんじゃないんですよ」

「わかつてゐるつての」

そうしていつに市場に到着した。市場はそれなりに賑わっていて、店舗も人も多かった。

「思ったよりちゃんととりますね。どうやって目的の隊商を探しますか」

「手分けして店の人にも聞くのがいいと思つたぞ」

「それでいいんじやないの」

ソラの提案通り、3人は別れて隊商の情報を探すこととした。しかし思つたよりも有効な情報はなかなか得られなかつた。ミラは聞きこみに飽きて、手近な壁によりかかつた。

「あ！」

いきなり市場の通りで叫び声がした。ミラは壁から体を放し、その声のしたほうに体を向けた。

「誰か！ ひつたくりだ！」

手荷物を無理矢理奪われて転倒した少年が大声で叫んでいるのが見えた。そして、その少し先には肩掛けのカバンを片手でつかんでいるひつたくりらしき人物がいた。ひつたくりは通行人を突き飛ばしながらミラのいるところにどんどん近づいてきた。

ミラは淡い光をまとう剣を静かに抜いた。ひつたくりはミラが立っているほうの手で、カバンの上部をつかんでいた。息を整え、すれ違はずまにミラはカバンをつかんでいる手のわざかに下を狙つて剣を振るつた。

切られたカバンの下の部分が地面に落ち、言葉にならないどよめきが起きた。ひつたくりはすぐには何をされたかわからなかつたようだが、自分の手の中にカバンの上の部分しかないと剣を持つミラを見て、手の中の残骸を放り投げると、ものすごいスピードで逃げていった。

ミラは剣を收めてから地面に落ちたカバンを上下とも拾つと、な

んとか立ち上がっていた持主の少年のもとにそれを持つていった。

「ありがとうございます！」

少年はミラ手からカバンを受け取ると、それを抱きしめて何度も頭を下げた。

「いや、取り戻すためとはいえ切つちやつたし、そんなに頭を下げないでも」

「そんなことはありません。これにはとても大切なものが入つてゐるんです。本当にありがとうございます！」

いつの間にか集まってきた野次馬に囲まれたまま、少年はまた勢いよく頭を下げた。ミラはそれを少し困った顔で見ていた。

「姉さん、何の騒ぎ？」

「ミラ先輩、何かやらかしたんですか？」

そこにソラとミー・ックが戻ってきた。

「この子が手荷物をひったくられたから、それを格好よく取り返しだだけ。それよりあんたら、隊商の情報はなんかあつたの？」

「隊商！？」

ミラの言葉に反応したのは頭を下げている少年だった。

「隊商を探してらっしゃるんですか？ なぜですか？」

「なぜって、ちょっと遠くまで旅をするから護衛つてことで同行させてもらおうとこいつことで」

ソラの説明に少年は一人で大きくなづいてから、自分の胸をドンと叩いた。

「そういうことでしたら僕にまかせてください！ 申し遅れました  
が、僕はジョアン。父は隊商のリーダーを務めているんです」

ジョアンを伴つて宿に戻つた3人だつたが、そこには環とカレンの2人と話をしている見知らぬ男がいた。

「父さん！」

ジョアンがそう言ってその男の前に飛び出した。

「ジョアン、どうしたんだ？ それに、そちらの方々は？」

「市場でひつたくりにあつたんですが、こちらのミラさんに助けていただいたんです」

「そうか、怪我はなかつたか」

「はい、大丈夫です」

男はそれを聞くと立ち上がりミラに頭を下げた。

「息子を助けていただきありがとうございます。私はレナルド、小さな隊商をやっているものです」

「えー、私はミラです。えー、修行中の剣士ですが、えー、ようしくお願いします」そこまで言つてから、ミラはカレンに助けを求めた。「カレン師匠一、助けてください」

レナルドは不思議そうにカレンを見た。

「お知り合いでですか？」

「はい、旅の連れです」

「あの、師匠っていうのは」

ジョアンの疑問にはソラが答えた。

「言つた通りの意味で、そちらのお2人は僕達の師匠です」それを聞いてレナルドは面白そうな表情になつた。

「ほう、縁というのは不思議なものですね。これはタマキさんとカレンさんの頼みも断れなくなりましたな」

「それじゃ、商業都市エズラまで護衛の件は了承してもういたつてことでいいのかな」

「はい、息子を助けていただきましたし、あなた達が信頼に足る人

物だといつのもわかりました

「あとはルートの調整ですね」

カレンの言葉にレナルドは笑顔で応えた。

「それはこれから相談しましょ。我々も商売がありますから

「それはわかります。ですが、我々としても、少しでも早くエズラに到着したいのです」

それから、カレンとレナルドは具体的な話にはいる雰囲気になつた。

「それじゃ、俺達はちよつとやこいらへんぶらぶらしてくるから、カレン、後は頼んだよ」

環はそう言つて立ち上がると、4人をつかまえて宿の外に出て行つた。

その日の夕方、話はまとまり、レナルドはジヨアンを連れて隊商の宿に戻つていた。環とカレンは宿の1階の食堂兼居酒屋のようなところに向かいあつて座つていた。

「隊商と同行はできるようになつたわけだけど、目的地まではどういうルートなのかな」

「多少遠回りになる部分もありますが、おおむね問題ありません。

考えていたよりも早くエズラに到着できそうです」

「安全な旅になると思う?」

「ほとんどは安全だと思います。多少危険な場所もあるようですが、問題になるほどではありません」

「もし魔物やらなんやらが出てきたらどうしようか」

「被害がないように、できるだけ隊商から引き離して相手をしたいですね。それに、タマキ様の正体は明かしていませんし、明かすつもりもありませんよね?」

「別に隠すつもりもそんなにないけど、言いふらうそとも思つてないからそれがいいか。まあ、巻き添えにするのもまずいし、できるだけ離れて戦うっていうのはいいだろ? ね。そういうえば隊商に護衛つて元々ついてないの?」

「いりますよ。固定で給料を貰つてゐるそりなので、私達の同行は歓迎していくても邪魔だとは思わないはずです」

「厄介ごとはなしか

環は少し残念そうな顔をした。

翌朝、環達の宿にはジョアンが使いとしてやつてきた。

「皆さん、準備は大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ。みんなは？」

「もちろん大丈夫です」

ミラは胸を張つて言い切つた。それから後ろのソラとミニーラクに振り返つた。

「あんた達は大丈夫？」

「もちろんですよ、先輩」

「姉さんのほうこそ、本当に大丈夫なの？」

「当たり前でしょ。さあ師匠、行きましょう！」

ミラを先頭にして、一行は宿を出た。そして、厩舎のある町外れで隊商と合流した。出発はすぐで、環とカレンは荷馬車、他の3人は隊商の馬車に乗つた。しばらく何事もなかつたが、荷馬車に護衛らしき2人が近づいてきた。

「よお、あんたらが今回限りの護衛かい？」

環が声をかけてきた人物を見ると、背中に長い剣を背負つている男と、弓を持つている女がいた。

「ああ、そうだよ。で、あんたらは？」

「こつちがショイラ、この隊商の護衛のリーダーだ。俺はエクセン、まあ副官だな」

「そりなんだ。俺は環、こつちはカレン。あとあつちの馬車に乗つてるのがミラとソラとミニーラク。まあよろしく頼むよ」

環はそう言つて軽く手を振つた。ショイラはその態度に少し眉をひそめた。

「他の人は見れば大体わかるけど、あなたは何が出来るのかしら？」

「俺？　俺は魔法使いだよ。けつこうすごい魔法使い」

環の口のききかたに、シェイラは明らかにいらついた表情になつた。エクセンは楽しそうにしていた。

「それなら、その腕前を見せてもらいたいものね」

「それじゃ、わかりやすく3倍チャージ連射バージョンファイアボール」

環は上空に向けて3発の火の玉を立て続けに放つた。その3発は派手な爆発をして空を彩った。シェイラとエクセンはそれを見て、しばらくの間言葉もないようだった。環とカレンは、特になんてことのないという表情だった。

「まあこんなもんだよ。納得してくれたかな」

「ああ、よくわかつた。あんたがいりや安心だ」

エクセンはそれだけ言つたが、シェイラのほうはまだ何も言えないうだつた。

「あー、シェイラさん、『感想は』

「あ、ああ、確かにこれなら安心だ」

それだけ言つてシェイラは立ち去つてしまつた。エクセンもその後を追つた。

「ちょっとやりすぎたかな」

「そうですね。あんなことは普通はできませんから。非常識ですね」そんな会話をしている2人だが、シェイラは遠くから、ほとんど恐怖に近い目でそれを見ていた。エクセンはあきれたような表情で口を開いた。

「あのタマキっていう奴はとんでもないな。魔法使いは知つてゐるけど、あんなもん初めて見たぞ」

「そうね。あれだけでこの隊商は軽く壊滅する」

「そういえば、ノーデルシア王国を救つたっていう噂の勇者がいたよな」

「とんでもない魔法を使って、一人で魔物や魔族を壊滅させたっていう噂ね。一人で戦つたからあまり人の目にもふれず、戦いが終わ

つてもほとんどの姿を見せないっていう、半年前なのに伝説みたいな存在

「ひょっとしてその勇者だつたりしてな」

「まさか。それならこんなところを旅してるわけがない」

「わからないぞ。その姿を正確に知っている者はほとんどいないんだから」

エクセンはそう言ってタマキをじっと見た。そんなショイラとHクセンのことを、馬車からじっと見る田があつた。

「ふふ、あいつらきっとタマキ師匠の実力を見て震え上がってるに違いない」

「この天才魔導師の僕の先生なんだからそれくらい当然ですよ」

ミラとミーリックはそう言って楽しそうに笑っていた。

「普通はあんなめちゃくちゃなファイアボールを見せられたらそうなるよ。あんなことできる人は他にいないだろうじ」

ソラだけは冷静だった。ミラは笑うのをやめて、頭の後ろで手を組むんで後ろによりかかった。

「でもあれじゃ、仮に魔物なんかがでてきても私達の出番がなさそうじゃない？」

「そうだけど、危ない目に会ひよりはいいじゃないか」

「甘いー」

ミラとミーリックは同時に声を出した。

「もし魔物が出てきたんなら、貴重な実戦訓練になるんだから、できれば僕達で相手をしてやりたいね」

「ミーリック、あんたもたまにはいいこと言つじやん。ソラ、そんな消極的な姿勢じや、いつまで経つても1人前になれないよ」

「わかったよ」

ソラはためいきをついて馬車の外を見つめた。

出発からちょうど20日、いくつかの町や村に立ち寄りながら、何事もなく隊商は進んでいた。そして、見通しのいい場所にさしかかった。

平和だな

「そうですね、と言いたいところですが、それでもなにかそうですね」とカレンはカレンの視線の先を見た。まだ距離はあつたが、何かが接近してきているのはわかつた。

「そうだな。それじゃ俺はまくつと行ってくるがいい」は頬むぎ  
「わかりました」

環とカレンは荷馬車から別々の方向に降りた。環はバーストで跳び、カレンはレナルドの元に走った。

「引きた返せとは、何があつたのでしょうか」

「おそらく魔物です。タマキ様が迎撃に向かわれたので心配はない」と思いますが、念のために引き返して距離をとったほうがいいですし

「わかりました、そうしましょう」

レナルドが隊商全体に引き返すように指示を出した。カレンは

「あなた達は一のまま嫁商を獲物にしてください、ソル、ミッケのところに足を運んだ。

「様子をみます」

「わかりました、任せてください！」

ミラは元気よく返事をして、後ろの2人を伴つて馬車から飛び降りた。コソコソと2人を見ながら、環が向うつ二方向をじつじつ見

つめた。

その頃環は、数100体はいる魔物の集団の前に立つていた。ざつと見たところ、特に手強そうな魔物は見当たらなかつた。

「お前らだけか？まあこれくらいならすぐ片付けられるからいいか」

環は自分の右手を魔物達に向け、魔力を集中させた。

「ミーミー・シリーズはこのために考えたんだよな。いくぞ、10倍！ マシンガンファイアボール！」

魔物達に向けられた右手から、小さな火の玉が凄まじい勢いで連射された。それは環の手の動きと共に、魔物を端から端まで掃射して小規模な爆発を数100発引き起こした。

火の玉の嵐と爆発がおさまった後には、魔物達の残骸しか残つていなかつた。環はそれを確認すると、隊商のほうに引き返そうと歩き出した。しかしそれは背後からの声で止められた。

「こ」の骸達をもつて姿を現せ、ボーンドラゴン」

振り向いた環の目に飛び込んできたのは、以上に魔物の残骸の中に立ち手を掲げる、異常に髪の長い女のようない存在だつた。女のよつなのの言葉に反応するように、魔物の残骸が動き出し、その頭上で何かを構築し始めた。

「あんたは何者だ」

環の問いに、女のようなものは薄ら笑いを浮かべた。

「理の外にある者、ノーテルシアの勇者。今の魔法といい、実に興味深いな」

「意味がわかるようにしゃべつてもらいたいな」

「そのうちわかる時が来る。今はこいつと遊んでいてもらおう」

女のようなものが指をならすと、集まつた魔物の残骸が一気に竜の形になつた。醜悪で腐臭の漂うボーンドラゴンだつた。

「私のことはイムトポールとでもしておいつ。また近いうちに会うことになる」

そう言ってイムトポールと名乗つたものは闇に消えた。後には腐臭漂うボーンドラゴンと環だけが残された。

「面倒なもん残してくれたよ」

一方カレンは、隊商が避難した後も動こうとせず、その場に止まっていた。その距離からでもボーンドラゴンの不気味な姿はよく見えた。カレンは動こうとしたが、何かの気配を感じ、ショートソードを抜いて勢いよく振り向いた。

「これが混沌の魂を持つ者。なるほど、興味深い」

環の前にも現われたイムトポールが立つていた。カレンは油断なく構えた。

「失礼ですが、あなたは」

「イムトポールとでも呼ばべいい。少し確かめさせてもらおう」

言葉と同時にイムトポールはカレンに飛びかかっていった。カレンはそれをかわしながら、その胴体を斬りつけた。だが、その一撃は皮膚にあつさり弾き返された。イムトポールは着地してから振り向くと、薄ら笑いを浮かべた。

「魔族ですか。手加減は無用のようですね」

カレンは眼鏡を外して、それをしまった。赤い瞳がイムトポールを見据えた。

「それでいい」

イムトポールは火の玉を作り出し、カレンに放つた。カレンはそれに炎をまとつたナイフを投げつけて爆発させると、その爆発の中を駆け抜け、雷をまとつたショートソードを振り下ろした。イムトポールはそれを横に跳んでかわし、側面からカレンに向けて氷の牙を3発放つた。

カレンはショートソードに氷をまとわせると、2発を打ち払った。さらにダガーを逆手で抜くと、それにも氷をまとわせ3発目も打ち払つた。そのままイムトポールにダガーを投げつけてから突っ込んで行つた。

イムトポールは投げられたダガーをつかんで投げ捨てると、上空に飛んでカレンの突撃をかわした。そしてそのまま一気に急降下した。斬撃を避けられたカレンは隙ができるように見えたが、振り下ろしたショートソードを握る手に力をこめると、闇の大剣を一

気に作り上げ、それを降下していくイムトポールに合わせて思い切り振り上げた。

避けようがないようなタイミングのはずだったが、イムトポールは何事もなくカレンから少し離れた場所に降り立つていた。

「なるほど。大した力だ」

「あなたも、どうやら下級の魔族ではないようですね」

カレンの一言にイムトポールは軽く笑つた。

「また近いうちに会うことになるだろう。それまで平穏を楽しんでおくといい」

それだけ言うとイムトポールは飛び上がり、空に消えた。

「バースト！」

環は爆発を利用して横に飛び、ボーンドラゴンのブレスをかわした。ブレスを浴びた地面は焼けただれ腐敗臭を放っていた。環はそれを見て苦笑いを浮かべた。

「これは浴びたくないな」

環はそう言ってから、ボーンドラゴンに向かつて両手をかざした。

「とりあえず落ちてもらおうか。5倍アイスバイト！ ダブル！」

その両手から巨大な氷の牙が飛び、ボーンドラゴンの片方の翼を貫いた。ボーンドラゴンは醜いめき声のよつなものあげると、バランスを崩し地面に落ちた。だが、すぐに体勢を立て直し立ち上がつた。

「立ち上がらせるかよ！ バースト！」

環はそれに突っ込んでいき、すれ違ひざまに思い切り頭を蹴り飛ばした。ボーンドラゴンは再びバランスを崩し、倒れた。環は着地するとすぐに振り返り、それに手を向けた。

「10倍マシンガンファイアボール！」

小さな火の玉がボーンドラゴンの体に次々に着弾し、その爆発が体を覆つた。だが、その中でボーンドラゴンは咆哮をあげると、傷ついた翼を渾身の力で動かして上空に飛び上がつた。そして、環を

圧殺しようつと一気に降下してきた。環はそのまま巨体に向けて両手をかざした。

「10倍プロテクション！」

環の両手を中心として展開された魔法の盾が巨体を食い止めた。

「10倍ブリザードストーム！」

その声と共に、魔法の盾を展開したままの環を中心として凄まじい吹雪が起こった。ボーンドラゴンはその吹雪に巻き込まれ、上空高く運ばれた。

「とどめだ！ 20倍！ メテオストライク！」

ボーンドラゴンが頂点に達した時、燃えさかる巨大な岩石がそれを直撃した。すさまじい爆発と共に、塵も残さずにボーンドラゴンの巨体は蒸発していた。環はそれを確認してから、カレンのいるところに戻つていった。

「激しい戦いだったようですね」

カレンは一人で環を迎えた。

「ああ、なんか変なのが出てきたおかげで大変だったよ」

「こちらにもイムトポールと名乗る魔族が現われました」

「そいつだ、臭い龍を呼び出してきた。また会うとか変なことを言つてたよ」

「私にもそう言いました。なかなか油断できない相手のようつです」

そこまで話すと、2人は無言で目を合わせた。

「標的は俺達かな」

「そう考えたほうがよさそうですね」

## 大賢者

魔物達と魔族との遭遇から12日。その後は何事もなく、隊商は商業都市エズラに到着した。一行は休む間もなく、ミニックの案内でハティスに会うために出発した。それから2日、町から離れた、小さな湖のそばに建てられた小屋が見えるところに、一行は到着した。

「あれ？ またずいぶんぼろいところに住んでるね」  
環は小屋を指差してそう言った。

「ええまあ、師匠は変わり者なんです。ずっと閉じこもつてたと思うと、突然どこかに旅に出たりで」

「じゃあ、今はいるのかな」

「さあ、たぶんいると思いますけど。僕が先に行つて確かめてきますよ」

そう言つてミニックは一人で小屋に向かつて走つていった。その後姿を見ながら、ミラは疑わしそうな表情を浮かべていた。  
「本当にこんなところに大賢者なんて人がいるんですかね」「いて欲しいもんだね」

環は腕を組んでそう答えた。しばらく待つていると、小屋に入つたミニックが出てきた。大きく手を振つて、待つている一行を呼んでいるようだつた。4人はそれに応じて小屋の目の前まで来た。

「全員来たのかね？」

小屋の中から、穢やかだがよく通る声が聞こえた。

「はい」

ミニックが大声で返事をすると、白いローブを着た、大柄で白髪の初老の男が小屋の中から姿を現した。男は一行をさつと見まわしたが、カレンのところでその視線を止めた。何かを言おうとしたが、何も言わずに視線を環に移し、その指にはまつてている指輪を見た。

「見たところ、君が勇者かな。待っていたよ

「ああ、俺は環。それでそつちが大賢者ハティスさんか」

環のストレートなもの言い方に、男は少し笑った。

「昔はそう呼ばれたこともあった。正直、気に入らなかつたがね」

「気に入らないってだけで、人の記憶をいじつた？」

そう言つた環の表情は変わらなかつたが、かえつてそれが怒りを抱えているように見えた。ハティスはそれを見てためいきをついた。

「君がどんな答えを期待しているのかはわからないが、おそらく、あまりいい返事はできないな」

環はそれを聞いてカレンのほうを見た。

「カレンはそれでいいのか」

「タマキ様、私のことでしたら」「心配なく。大丈夫ですから」  
カレンの返答に、環はしばらく黙つていたが、気を取り直すと再びハティスに目を向けた。

「まあこのことは置いておくとして、なんで俺達が知の都に行くのがわかつたのかな。こんな指輪に道案内まで用意しておいて」「」の世界で何かを知りたいと思つたら、あそこにたどり着くものだ。それに、ミニックの案内でここまで楽に到着できたりう

「でもあんたは、この指輪はカレンと一緒に自分を探しに来た者に渡すようにと、館長に託していた。ひょつとしたら勇者とやらは1人であそこに行つたかもしない。大体、あんたがこの指輪を館長に渡したのは俺が呼び出されるずっと前だ。ミニックだつて、ひょつとしたら何ヶ月も待ちぼうけを食うはめになつたかもな」

「勇者がいづれ呼び出されるのはわかつっていたことだ。待ちぼうけなら、路銀はたっぷり渡しておいたから心配はいらん。それに、一緒に旅をするほど、カレンに信頼されず、カレンことも信頼できないような者なら、私としては用がないし、それでは勇者としての資格がない。少なくとも私は認めん」

静かに断言するハティスに、環は苦笑いを浮かべた。

「一体カレンにどんな役割を背負わせてたんだ？」

「勇者を守り、共に戦うこと。ただし、それは私自身が見きわめる

」と

環の問いに答えたのはカレン自身だった。ハティスは重々しきりなずいた。

「その通りだ。そして、タマキ君、改めて言わせてもらおう、私は君を、君達を待っていた」

「それは、なんのために」

「もちろん世界を救うためだ」

「世界を救うね、スケールが大きすぎてピンとこないな」  
ハティスは環のことを不思議なものを見る感じで見た。

「そうでないなら君はなんのために戦つてきたんだね？」

「別に、そうできるから、目の前にいる人を守るだけだよ。確かに今は力があるけど、世界そのものなんて救えるとは思えないし、全てを守ることなんてできないんだから」

「ふむ。意外と冷めどるな」

「冷めてるんじゃない。全ては守れない、だからこそ、守れるんなら絶対にそうするんだ」

しばらくの間、環とハティスは無言で対峙していた。その沈黙を破つたのは環だった。

「封じた記憶は取り戻せるのか？」

「もちろんできる、そのつもりだ。ただ、ちょっと時間がかかるな

」//「とソラと//「ツクは小屋から離れた場所で適当に座つていた。

「あのさあ、本当にあの爺さんが大賢者なんて呼ばれてたの？」

「僕は知りませんよ。ただ旅先の人人が魔物と戦つてゐのを見たんで、それで弟子にしてもらつただけですから」

「弟子になりたくなるほどすごかつたのかい？」

「それはもう。まあタマキ先生ほどめちゃくちゃじゃないんですけどね」

「3人は一斉にうなずいた。

「3人で何を話してゐるんだ？」

そこに環がぶらぶらと歩いてきた。3人は話を中断して立ち上がつた。

「タマキ師匠、カレン師匠と一緒にやなくていいんですか？」

ソラの言葉に環は首を横に振つた。

「しばらく時間がかかるらしいからね。これからの戦いのために休んでおけだつてさ」

「これからに戦い？ 問題の魔族はもう倒したんじゃないですか？」

？」

ミラは不思議そうに言つた。

「魔族はまだいる。だからそれに備えないといけない、っていうのがあの爺さんの言いぶんなんだ」

「本當なんですか？ そうだとしてもノーデルシア王国を襲つてた闇王つていうのより強いのがいるんですかね」

「少なくとも1人、性質の悪そうなのがいるな」

環がそう言つた瞬間、その背後に何かが勢いよく落ちてきた。

「プロテクション！」

環は振り返るより早く魔法の盾を展開し、自分と3人を包んだ。それが落ちてきた何かが引き起こした爆発を遮つた。爆発の後に残された煙がひいた後、環が振り返ると、そこにいたのは髪の長い女のような魔族、イムトポールだった。

「またあんたか。一体何の用だ」

イムトポールはそれに答えず、無言で立つてはいるだけだった。環の後ろの3人はそれぞれ身構えた。環はそれを手を上げて制止した。

「3人は小屋に戻つてるんだ」

「でも！」

「姉さん！ ミニックも！」

ソラは踏み出さずとするミリックと魔法を使おうとしたミニックを止めた。

「僕達がかなう相手じゃない、足手まといになるだけだよ」

「早く行くんだ」

環の言葉に押されるように、3人は後ろに下がった。

「無理はしないでくださいね！」

ミラはそれだけ言つて小屋に向かつて走り出した。ソラとミークもそれに続いた。

「さて、もう一度聞こうか。一体俺に何の用だ」

「私と一緒に来てもらおう」

「あんまりうれしくもないお誘いだな。目的は何だ」

「来ればわかる。どうだ、これはお前にとつて悪い話ではないぞ」

「いいか悪いかは俺が決めることだ。それに、お前ら魔族に協力するつてことは、この世界の人間の敵になるつてことだな。それはできない相談だな」

「ほう、異世界の人間がなぜそこまでこだわる。無理矢理この世界に連れてこられたのだ、恨みを抱くのではないか？」

環はやりと笑つた。

「俺の前に呼ばれた人は、この世界の人間と結婚したんだよ」

「だが、その前に呼ばれた人間は我らの眷属となつた」

環はそれを聞いて、少し考え込むように沈黙してから口を開いた。

「なんとなく答えはわかる気がするんだが、一応聞いておこうか。それは誰だ？」

「お前が倒した、闇王と名乗っていた者だ」

環は目を開じて大きく息をはきだした。そして、全身に魔力を溢れさせ、目を開き、イムトポールをまっすぐ見据えた。

「くわしいことを教えるとこつても、言いやしないよな」

「私と共に来れば話してやる」

「それは無しだ。今ここで、力づくでも聞かせてもうつぞ」

## 強敵

カレンとハティスは小屋の中で向かい合って座っていた。

「では、始めよう」

「はい」

ハティスは右手をカレンに向かってかざした。

「カレンよ、お前に施した封印は少し複雑だ。時間がかかるが、いいな」

「問題ありません」

その時、爆発音が聞こえた。カレンは少し身じろぎしたが、それ以上は動かなかつた。それからしばらくして、ミリバ、ソラ、ミニックが駆け込んできた。

「大変です！ 魔族が！」

今度はカレンは勢いよく立ち上がつた。

「それはどこに？ タマキ様は」

「僕達を逃がして、魔族と」

ソラの一言に、カレンは外していたショートソードをつかんだ。

「待つんだ」

ハティスがカレンを止めた。カレンは今にも小屋を飛び出しきそうだったが、足を止めた。

「なぜです」

「今は記憶の封印を解くのが先だ。座りなさい」

強い調子で言うハティスに、カレンはショートソードを戻して再び椅子に腰を下ろした。

「はあ！」

環は拳に炎をまとわせイムトポールに殴りかかった。だがそれは手のひらで受け止められた。そしてイムトポールがその拳を握ると、闇がそれを覆い、炎がそれに吸い込まれるように消え始めた。環は

反射的につかまれた手を強引にもぎ放して距離をとった。

「これは」

環は自分の拳とイムトポールを交互に見た。

「どうした？ 力づくでくるのではなかつたか？」

「ああ、場所を変えるぞ、ついてこい。バースト！」

环は一気に湖の上を跳んだ。イムトポールはそれを見てから、ゆっくりと浮かび上がると、环を追つて一気に加速した。环が湖の対岸に着地すると、すぐにイムトポールも追いついてきて、その背後に着地した。

「10倍！ マシンガンライトニングボルト！」

振り向くと同時に、环の手から小ぶりな雷の矢が凄まじい勢いで連射された。だがイムトポールは避けるそぶりを見せず、棒立ちでそれを受けた。放電と衝撃で舞い上がった土煙が晴れると、以上に長い髪の毛で全身を包み込んだイムトポールが立っていた。無傷だつた。

「やつぱり、この程度じゃちちつとも効かないか」

环の言葉に反応するかのように、イムトポールは自分を包んでいた髪の毛を開くと、その一部を両方の手でもぎとつた。

「本気になれないようなら、そうできるようにしてやる」

手に握った髪の毛が刃物のように鋭利に硬くなつた。その切つ先が环に向けられ、投げる動作もなしで数十本が飛んだ。环はもちろんストーンスキンを使っていたが、それを受けることはせず、避けようとした。だが、2本は完全には避けられず、腕と脇腹をかすつた。服と皮膚が切られ、血が滲んだ。

「ちつ、アイスバイト！」

氷の牙を放つと同時に、环はイムトポールに向かつて走り出した。氷の牙は腕の一振りで弾かれたが、环は拳が届く距離まで踏み込んだ。そして、雷をまとった右の拳を振るつた。イムトポールはそれを自分の手で受けようとした。

「バースト！」

だが、その直前に振るつた拳からの爆発がその手を弾いた。イムトポールの手は弾かれ、その隙に環は左手をその腹に突きつけた。

「10倍！ ファイアボール！」

炎と爆風がイムトポールを包んだ。環はその爆風を利用して後ろに跳んだ。

「20倍！ ライト一イイイイイイイイイイイイ！」

雷がイムトポールを撃ちぬいた、よう見えた。しかし、それは両手をかかげ、その間に闇を作り出して平然と立っていた。その闇が雷を飲み込んだようだつた。両手が下げられると同時に、その闇も消えた。

「なんでもそりやつて消せるのか」

イムトポールはその問には答へなかつた。環は軽く笑うと、腰を落として構えた。

「なら、直接その体に叩き込んでやるまでだ」

「まだ終わらないのでしょうか。それに、私の記憶を戻すことに何の意味があるのでですか？」

カレンの問いにハティスは首を横に振つた。

「焦つてはいかん。お前の記憶はお前の力とも関係があるので」

「私の力、ですか？」

「そうだ、私は記憶と共に、力にも封印を施しておいた。人間の体では、それには耐えられないと考へたからだ」

「ではなぜ、今それを開放するのですか？」

「その力が必要になるだろうからだ。それが、運命だ」

「そうですか？」

カレンはそれだけ言つて口をつぐんだ。それから少しの間、環といムトポールの戦いの音らしきものがしても、カレンは微動だにしなかつたが、雷の轟音で立ち上がつた。

「もうしわけありませんが、私は、戦います」

それだけ言うと、カレンはショートソードをつかんで小屋から走

つて出て行つた。ハティスはそれを見送ると、大きくため息をついた。

「いいんですか？ カレンさんを止めなくて」

ミニックがそう聞いたが、ハティスは首を横に振つた。

「あの子が行くというなら、私には止められん」

ソラはそれを見て、手をぐつと握つてからミリのほうを向いた。

「姉さん、僕達も行こう！」

「そうだね。ミニック、あんたは？」

「もちろん行きますよ」

「3人も小屋を飛び出していった。

小屋を出たカレンは、音のしたほうに一直線に走り出した。湖の対岸で戦う環とイムトポールを見つけると、眼鏡を外し瞳を赤く光らせた。そして全身を闇のロープで覆うと、イムトポールの頭上に転移した。ショートソードに炎をまとわせ、一気に振り下ろしたが、それは生きているかのように動いた髪の毛に体ごと弾き飛ばされた。

「バースト！」

環が間髪要れずに爆風で飛び、空中でカレンを受け止めて着地した。2人は体勢を立て直してイムトポールと対峙した。

「カレン、記憶はどうした」

「まだ途中です。先にやつておきたいことができましたので」

「そうだな。今はこいつを何とかしなきゃな

「どの程度の強さでしょうが」

「闇王より強い。あいつの髪の攻撃はストーンスキンでも防げないし、魔法も防がれる」

「それは強敵ですね。どうしますか？」

「隙を作らせて一気に決めるしかない。俺に続いてくれ

「わかりました」

カレンがうなずくと同時に、環がイムトポールに突っ込んだ。炎と氷をまとわせた拳を立て続けに振るつたが、どちらも受け止めら

れた。そこにカレンが飛び込み、横から氷をまとわせたショートソードでその足元薙ぎ払つた。だが、それは足の裏で止められ、イムトポールはその勢いを利用して後ろに跳んだ。

距離をとつたイムトポールは髪で作った刃を左右3発ずつ飛ばした。カレンはそれを打ち払いながら走った。

「マシンガンアイスバイト！」

その後方から環は氷の牙を連射した。イムトポールはそれを髪をまとめてそれを防いだ。カレンはその反対側から袈裟切りに雷をまとわせたショートソードを叩きつけた。だが、それも逆の髪に防がれた。

「バアアアアストオ！」

そこに爆発で勢いを得た環が突っ込み、その顔面に膝を叩き込んだ。その衝撃でイムトポールは後方に吹き飛ばされた。カレンはナイフをベルトから抜くと、それに炎をまとわせ、飛ばされたイムトポールに向かつてそれを投げた。地面に叩きつけられたイムトポールは、そのままの体勢で腕を振つてそのナイフを弾くと、ゆっくりと立ち上がつた。

「見事だ。これでは闇王が敗れたのも無理はない」

小さいが不自然によく通る声だつた。イムトポールは楽しそうな笑みを浮かべさらに続けた。

「まさかここまで人間に楽しませてもらえるとは、予想以上だ。もつと楽しくしようじゃないか」

イムトポールが両手を広げると、その足元から闇が広がり、そこから魔物達が這い出してきた。

「パーティーだ。お前達のゲストも来たようだし、ちょうどいい」環が後ろを振り返ると、ミラ、ソラ、ミニックの3人がこちらに向かつて走つてきていた。

「あの魔物達は一体どこから」「ミラは這い出した魔物達に驚きながら走っていた。

「わからない。でもあれはまずいよ」

「たしかにあれはまずそうですね。地面から魔物が湧いてくるなんて、聞いたこともありますん」

「とにかく急ぐよ」

ミラはそう言つたが、その足は前方の地面に現われた闇によつて止められた。3人が身構えると、そこから10数体の魔物が這い出してきた。

「2人は後ろに、私のサポートをお願い！」

ミラは剣を抜いてソラとミニックの前に出た。ミニックは前に出ようとしたがミラはそれを手を伸ばして制止した。

「あなたはせいぜい2発くらいしか魔法つかえないんだから、チャンスがくるまで力を温存しておきなさい」「わかりました」

ミニックはミラの後ろに下がつてメイスを手に取つてかまえた。「あいつら大丈夫かな」

環は周囲の魔物達とイムトポールに気を配りながら3人を見た。「最初に会つた時よりはずいぶん強くなっていますが、まだ不安ですね」

「それじゃ、カレンはあつちを助けに行つてくれ」「わかりました」

カレンはうなずいて3人のほうに走り出した。1人残された環のこと�이ムトポールは笑いながら見ていた。

「お前1人でこの魔物達と私を相手にするつもりか」「かわいい弟子をほつとくわけにもいかないからな」「なるほど。それでは少し見物させてもらうとしよう」

イムトポールは後ろに下がり、魔物達が動き出した。

ミラ達の前の魔物も、ほぼそれと同時に動き出していた。

「ソラ、あんたは横のほうのやつらを牽制して、方法はなんでもいいから。ミニック、あんたは倒すことは考えなくていいから、とにかく1匹でもひきつけておいて」

ソラとミニックは黙つてうなずいた。

「いくぞ！」

ミラが気合を入れ、剣をかまえた。そこにピットデーモン3体が飛びかかってきた。

「風よ！ 吹き飛ばせ！」

ソラが杖を地面に突き立て叫ぶと、凝縮された空気の弾がその杖から3発撃たれ、ピットデーモンに向かつて飛んだ。1体はそれに弾き飛ばされ、もう1体は避けようとしたがそれにかすり、体勢を崩した。だが、最後の1対は完全にそれをかわし、ミラに襲いかかった。

ミラは落ち着いてその動きをよく見ながら、正面からそれに淡く光る剣を振り下ろした。鈍い音と共に剣はその頭部を切り、地面に叩きつけた。だが、それに続いて、体勢を崩していくもう1体が斜め前方から飛びかかってきた。

「おいしょっと…」

妙な掛け声と共にミニックがメイスを振るつて、そのピットデーモンを打ち返した。ミラは再び剣をかまえなおした。

「まずは1匹、この調子でいくよ！」

そこにイビルミストが氷の牙を放つてきた。ミラはそれを剣で打ち払った。

「ソラ、あいつを！」

「わかってる、風よ切り裂け！」

風の刃がイビルミストを切り裂き消滅させた。だが、残った魔物達はそれにひるむことなく3人にせまってきた。

「ミニック、あいつらの足を止める魔法を！ ソラは上の奴に集中

して！」

「わかった！」

「わかりましたよ」

ソラは上空のイビルミスとに風の刃を飛ばし、ミーツクはメイスを腰に戻すと意識を集中させた。

「ファイアウオール！」

炎の壁が出現し、それは一直線に魔物達に向かっていった。そしてその目の前で一気に大きな壁となり、魔物達を阻んだ。ミラはその側面に走り、端にいたオーガと対峙した。オーガはその太い腕を振るつてきたが、ミラはそれをかわすと同時に剣を振った。

オーガは形容のしようがない叫び声をあげ、切られていないほうの腕を振るつた。ミラはそれをなんとか剣で受けたが、その体は吹き飛ばされた。

「姉さん！ うわ！」

ソラがそつちに気をとられた一瞬、イビルミストから放たれた氷の牙がかすり、体勢を崩した。

「くそっ！ 火の精霊よ！」

倒れこみながらも、ソラは火の玉をイビルミストに向かって放つた。それが命中し、イビルミストは燃え上がって蒸発した。だが、別のイビルミストが氷の牙を放ち、それは倒れたソラに迫つた。ソラは思わず目をつむつたが、それは飛んできた炎の刃に粉碎された。そして、吹き飛ばされ、立ち上がろうとしているミラに突っ込んでいったオーガは後ろから首を刺し貫かれた。

「カレン師匠！」

ミラとソラは同時に声を上げた。倒れたオーガの背後に立つカレンは、3人の状態を確認するように1人1人を見た。

「怪我はないようですね。一気に片づけますよ」

ミラとソラは立ち上がり、身構えた。ミーツクも魔法を解除して、再びメイスをかまえた。カレンは飛びかかってきたスケルトンを簡単に切り捨て、どんどん魔物に向かって歩いて歩いていった。

飛びかかるピットモンは次々に切り捨てられ、ミワとミーチクがそれに止めを刺していった。イビルミストはソラの精霊の力の餌食になつた。順調に魔物は数は減つていった。

「あつちは順調みたいだな」

次々に襲いかかつてくる魔物を殴つたり蹴つたりしながら、環はちらちらと3人の様子を見ていた。

「ずいぶん余裕のようだな」

「そうでもないさ、よつと！」

イムトポールの言葉に答えながら、環はオーガの腹を思い切り蹴つて、その巨体を吹き飛ばした。

「そろそろこんな雑魚じやなくて、あんたが前に出てきたらどうなんだ」

「たいしいた自信だ。それではお言葉に甘えようか」

そう言つたイムトポールは、浮かび上がると環に向かつて刃物のようになした髪を飛ばした。環はそれと同時に跳びかかつてきたピットモンをつかむと、それにもかかつて放り投げた。鋭利な髪はその体を切り裂き、ほとんど勢いは落ちなかつたが、環はさらに殴りかかってきたオーガの腕をつかんで、それに向かつて叩きつけた。さすがにその巨体には髪の勢いも殺され、オーガの体内で止まつた。

「ファ イアボール！」

環はオーガの死体を放し、自分の後方に火の玉を放つた。後ろの魔物達は炎に包まれ、その足は止められた。環は両方の拳に炎をまとわせ、前方の魔物に突進していった。

ピットモンもスケルトンを殴り飛ばし、オーガを蹴り飛ばし、イビルミストを霧散させながら環は進んでいった。だが、イムトポールが目の前に現われると、その足は止められた。

イムトポールは自分の髪の根元をつかむと、そのつかんだ髪を硬質化し根元から折つた。それはいびつな形の刃になり、その手におさまつた。それが横殴りに振るわれ、環はなんとか後ろに下がつて

それをかわした。

「どうした？　これは受けられないのか？」

「そんなぶつそうなもんは勘弁してもらいたいな」

立て続けに振るわれたその剣をかわしながら、環は自分の右手に魔力を集中させた。そして上段から振り下ろされたそれをかわしながら、その右手をイムトポールに突きつけた。

「5倍！　バースト！」

大きな爆発でイムトポールは上空に打ち上げられた。環はさりげなく両手をそれにもかってかざし、魔力を込めた。

「ファイアボール！　アイスバイト！　ダブル10倍マシンガン！」こぶりな火の玉と氷の牙が上空のイムトポールに向かって連射された。それは確実に命中したように見え、イムトポールは無防備な状態で落下してきた。

「バースト！」

環は爆発を利用してその着地点に跳んだ。

「くらええええ！」

右の拳に雷をまとわせ、イムトポールに渾身の力でそれを叩きこんだ。

「これだ！　これを待っていた」

だがそれはイムトポールが自身の胴体に作り出した闇に飲み込まれていた。環は拳を引こうとしたが、それはできなかつた。

「無駄だ」

イムトポールは環の両肩をつかんだ。環は左の拳でその顔面を殴りつけたが、イムトポールはそれを微動だにせず受けた。

「無駄だと言つたろう。お前のことは完全に捕らえた。その力、私の闇が全て飲み込んでやろづ！」

## 捕らわれた勇者

右の拳を闇に引き込まれた環は、そこから自分の力が急速に流れ出て行くのを感じた。なんとか引き抜こうとしたが、腕は動かなかつた。魔法を使おうにも、急速に魔力を失っているこの状況では、それもできなかつた。環が首だけ動かして後ろを見ると、この状況に気づいたカレン達が向かつてきていた。

「あれはどういうことなの！」

「そんなことわからないよ、とにかく早く行かないと！」

ミラとソラは大声でわめきながら魔物達に突っ込んで行こうとしたが、カレンはそれを止めた。

「あなた達は下がつていてください」

カレンはそう言つて、ショートソードを握る手に力を込めると、魔物達に向かつて一人で走り出した。そして、魔物達の目の前で闇の大剣を作り出した。それを横に薙ぎ、前にいる魔物を一気に切り捨てるなど、そのままの勢いで魔物の中を走つた。

環までの距離はどんどん詰まつていったが、イムトポールの胴体に作り出された闇は、その体から離れ、人間をまるごと飲み込めるサイズにまで大きくなり、環の体がそれに引き込まれ始めた。それを見たカレンは歯を食いしばり、再び闇の大剣を作り出した。

「邪魔だ！」

怒声と共に剣が振り下ろされ、環とイムトポールがいる場所までの道が見えた。カレンはそこを走り抜け、右手を伸ばした。

「タマキ様！」

環も手を伸ばした。だが、お互いの手は届かなかつた。環はイムトポールの作り出した闇に全身を飲み込まれていつた。イムトポールも笑いながらその闇に身を沈めて消えていった。残つた魔物達も同じように消えた。

地面に片膝をついたカレンは、うつむき、無言で握りしめた右手

を地面に叩きつけた。3人はそのカレンの様子に、近づくとともに動きなかつた。

それからしばらくして、カレン達4人はハティスの小屋に集まつていた。カレンはすぐにも環を探しにいこうとしたが、それを3人が必死に止めた結果だつた。

「それでは状況を詳しく教えてもらえんかな」

「はい」

ハティスの言葉にミラが返事をした。

「遠くからだつたのであまりよくみえなかつたんですけど、魔族の体になんて言うか、真っ暗な闇が現われて、それがタマキ師匠の腕をとらえていたというか飲み込んでいたといふか」

「それでどうなつた」

「その後はその闇が大きくなつて、魔族の体から離れました。それで、タマキ師匠の体が完全にそれに飲み込まれて」

「消えたわけか。なるほど」

ハティスは腕を組んでしばらくの間考え込んだ。

「おそらくその魔族は魔力を含む力を吸収か、それともどこか別の空間に排出させて勇者を無力化したのだろう」

「それじゃあ師匠は今どこにいるんですか？」

「わからん。だが別の空間ということはないだう。この地上のどこにいるはずだ」

「場所はわからないんですねか？」

「何か目印となるものでも持つていればわかる可能性もあるが」

「師匠が渡した指輪じや駄目なんですか」

ミニックの問いにハティスは首を横に振つた。

「試してみたが、あれでは駄目だ。もっと強い力が宿つているようなものでなければ」

それを聞いたカレンは、自分の首にかけていた葉子の作ったアミニレットを外して、ハティスに差し出した。

「これはどうでしょ。精霊の加護を受けた方が作ったもので、タマキ様も同じものを持っています」

ハティスはアミコレットを受け取って、それをよく観察した。

「うむ。これならばかなり正確な位置がわかるかもしれん。対となるものならば精霊の力が引き合つ」

「時間は、どれくらいかかりますか」

「集中する必要があるから外で待っていてもらおう。なに、すぐわかる」

ミラ、ソラ、ミーツクは小屋の前に座り込んでいた。カレンは少し離れたところで腕を組んで立ち、遠くを見ていた。

「でもまさか、タマキ師匠がさらわれるなんて」

ソラは少し声を落としてそう言つとため息をついた。

「僕達が行つたのがまずかっただんですかね」

ミーツクも落ち込んだ様子でため息をついた。

「今更そんなこと言つたってしようがないでしょ。今はとにかくこれからのことを考えないと」

ミラの言葉にソラとミーツクはうつむいた。

「先輩、そつは言つても、あれだけの力を持つてる魔族に僕達がかなうとは思えませんよ」

「そんなもの、知恵と勇氣でなんとかするに決まつてんだしょ。どんな強い奴にだつて絶対に弱点はあるし、力を合わせればなんとかなるつて」

「そんな無茶な」

「無茶でもなんでもやるしかないでしょ」ミラはそこで声をひそめた。「あのカレン師匠の落ち込みぶりを見たら放つてなんてわけないじゃない」

「確かに様子は変だよね」

「田の前であんなことがあつたんだから、無理もないと思いますよ」3人はカレンの様子を見た。カレンは少しも体勢を崩さず、相変

わらず腕を組んで遠くを見ていた。

ミラは立ち上がったが、ちょうど小屋のドアが開いた。

「勇者のいる場所がわかつたぞ」

そう言つたハティスに、カレンは早足で近づいた。ミラ達3人もそれに続いた。

「どこでしようか」

「これを見なさい」

ハティスはカレン達に見えるように地図を広げ、その一点を指差した。

「ここから3日ほどの距離にある城の廃墟だ。このあたりでは魔族が拠点にするのに一番都合が良さそうな場所だな」

「けつこう近い場所なんですね。すぐに向かいましょう」

ミラはそう言つたが、ハティスは首を横に振つた。

「その前に、カレン。お前の記憶と力の封印を解かなくてはならん

「わかりました」

カレンはうなずいた。ハティスは小屋の中に戻り、カレンもそれに続いた。あとの3人はその場で出発の準備を始めた。

椅子に座つてハティスと向かい合い、30分ほどが経過した。それまで何もなかつたが、突然門が開いたかのように、様々な記憶の断片のイメージがカレンの頭の中に溢れた。ハティスはかざしていた手を下ろした。

「記憶の封印は解けた。どうだ?」

「いえ、まだ断片的なイメージばかりで」

「しばらく時間はかかるが、それはじきに落ち着く。それではこれから力の封印を解くぞ」

「はい」

ハティスは再び手をかざした。カレンは自分の中のなかが組み変わつていいくような感覚を感じた。それが数分続き、カレンは自分の力をより強く感じることができるようになつていった。ハティス

は手を下ろした。

「お前の力に施しておいた封印を解いた。これで今までとは比べものにならない力が使える。だが、注意しろ。お前の混沌の魂は人間では耐えられない力を簡単に引き出すことができるのだ」

「わかつています」

「もし制御に失敗すれば、その身が滅びるだけでは済まない。混沌に飲まれてしまえば、人間としてのお前の存在は消え、悪くすると新しい魔族が誕生することになるかもしけん」

カレンは黙つてうなずいた。

「この6年間だ。お前が私と別れてすごした6年がお前を支える力になるだろう。決して自分を見失つてはいけないぞ」「私にはやらなくてはいけないことがありますから、それまでは絶対に大丈夫です」

ハティスは強い決意を秘めたカレンの瞳を見つめた。

「それまでなどと言わずに、必ず戻つて来るのだぞ」

「はい」しつかりとした返事をして、カレンは立ち上がった。「それでは出発の準備をしてきます」

カレンは扉を開け、小屋から出て行つた。ハティスはそれを椅子に座つたまま見送り、

大きく息をはきだした。その顔には深い疲労と憂慮の色があつた。  
「私にもっと力があればな」

出発してから2日。城の廃墟まであと1日となつた。カレンは明日の戦いに備え、自分の武器を一つ一つ丁寧に手入れをしていた。ミラ、ソラ、ミーリックはそんな様子を見ながら夕食の後片付けをしていた。

「なんか雰囲気が重い」

「姉さん、それはしようがないよ。カレン師匠はタマキ師匠を助けることしか頭にないみたいだしさ」

「そんな時だからこそ、少しだけ、もっと盛り上げていきたいじゃない？」

「そんなこと言つのは先輩だけですよ。緊張感を持つてたほうがいいじゃありませんか」

「あんまり張り詰めすぎるのもよくないでしょ」

「緊張感がないのはもとと困りますよ」

ミラはこきなり自分の持つている食器をミーリックに押しつけた。「ちょっと話してくれる」

そう言つてカレンにどんどん近づいていった。

「師匠、明日のことなんですが」

ダガーに砥石をあてていたカレンは無言で顔を上げてミラの顔を見た。ミラは少し言葉に詰まつたが、気合を入れて口を開いた。

「どうするんでしょうか、何か作戦は必要ではないんですか？」

「作戦ですか、相手のことも状況もわからないのに考えても無駄でしょう」

「それはそうですけど」

「タマキ様ならば、とにかく全力でぶつかるだけだ、とおっしゃるでしょうね。非常識だと思うかもしれませんが」

「いえ、そんなことはありませんけど」

ミラの答えにカレンは微笑を浮かべた

「無理はしなくていいですよ。自分でも非常識なことを言っているのはわかっていますから」

「非常識なんかじゃありません！」//リラは大声で宣言した。「私もタマキ師匠ならそういうふうと思いますが、それは正しいと思います！明日はとにかく全力でぶつかりましょう！」

そうしてソラとミニックのところに走って戻っていくと、同じ調子で2人に気合を入れた。カレンはそれを見て再び微笑を浮かべると、ショートソードを抜いて、その刀身をじっと見つめた。

翌朝、早く目を覚ました一行は手早くテント等を撤収して出発した。それから数時間後、城の廃墟が見えてきた。

「昔は立派な城だったんだでしょうね」

ソラは廃墟となつて朽ち果てた城を見ながらつぶやいた。

「立派つて言つたて何100年も前の話でしょ。それより魔物の姿は見えない？」

「見えませんね。隠れてるんじゃないですか」「行けばわかるでしょう」

カレンはそう言つて荷馬車を進めた。そして、崩れた城門前に到着した。カレンは馬を近くの木に結わえ、他の3人も警戒しながら馬車を降りた。

「魔物は見当たりませんね」

ミニックは注意深く辺りを見まわしながらそう言つた。ソラは無言でうなずき、崩れた城壁をさわっていた。

「油断大敵、相手は魔族でとんでもない奴なんだから気をぬかないよつにね」

//リラはそう言つて剣に手をかけ城を見据えた。だがカレンは特に警戒する様子もなく、足を進めた。ソラはそれを見てあわててカレンを追つた。

「カレン師匠、もっと警戒していかないと危険ですよ」

カレンはそれに振り向くことなく答えた。

「大丈夫ですよ。何があつても負けないようになりますからね」

口調は普段と変わらないが、有無を言わせない雰囲気があった。

3人は顔を見合させて、どんどん進んでいくカレンに慌ててついていった。

そして城の内部に入つていった。ほとんど天井は抜けっていて、実際によく日光が入つてきていた。

「ほんと廃墟だね」

「当たり前のこと言つてないで、さつさと歩きなさい」

ミラは足元に転がるブロックを蹴りながらソラを振り返つてせかした。そうしているうちに、一行はかつては大きなホールであつたと思われる吹き抜け状態になつている場所に到着した。

「よく来たな」

そこには、なぜか真新しい玉座に腰かけたイムトポールが待ち構えていた。カレンは無言で眼鏡を外し、ショートソードを抜いた。

「このふざけた魔族め！ タマキ師匠をどこにやつた！」

ミラの大声にイムトポールは笑い、玉座から立ち上がった。

「それならここだ」

玉座に手をかけ、それを無理矢理回転させた。そこにはぐつたりした環が縛り付けられていた。ミラ達3人は声を失つた。カレンは険しい目でそれを凝視した。

「死んではいけない。この男の魔力と回復力は実に素晴らしいからな」

そう言つてイムトポールは玉座の向きを戻して、それに腰かけた。「余興だ。少しは楽しませてもらおう」

イムトポールの足元から闇が前方に広がり、そこから魔物達が4人の行く手を遮るように這い出してきた。

「ミニック、あれに向かつてファイアウォールを。ソラは合図をしたらそれを巻き上げるように風を起こしてください。ミラ、あなたは2人を守るのが仕事ですよ」

カレンの指示に3人は少し戸惑つたようになづいた。そして、

指示通りにミニックが動き出した。

「ファイアウォール！」

炎の壁が魔物達に向かっていき、それが到達した瞬間。

「ソラ！」

「はい！ 風よ渦巻け！」

ソラの叫びと共に大きな風が炎を巻き上げ火柱となり、魔物達を巻き込んだ。その中からでも飛び出してくれる魔物が少しだけいた。だが、それはカレンとミラにあっさり切り捨てられた。

火柱が消えると、這い出してきた魔物の半分以上は姿を消していった。ソラとミニックは思わず顔を見合わせた。

「本当に僕達がやったのかな」

ソラがそうつぶやくと、ミニックも同感といつた顔でうなずいた。「あれを1人でもできるようになれたら、一流ですよ。ミラもいい反応でした」

カレンはそう言つて、1歩踏み出した。

「あとは私がやります。あなた達は自分の身を守ることに集中していくください」

カレンはイムトポールを睨みつけ、その瞳が赤くなつた。ミラ達はただならぬ雰囲気を感じ、後ろに下がつた。

「たしかイムトポールと言いましたか。タマキ様に手を出したことを後悔させて差し上げますよ」

闇のロープが出現し、カレンの体を包んだ。イムトポールはそれを見て失望したような表情になつた。

「そんなものは私には通用しない」

それを聞いたカレンは口元にかすかな笑みを浮かべた。その眼光が一段と鋭くなり、瞳が赤から金色の輝きを帯び始めた。

「通用しないかどうか、確かめてもらいましょうか」

カレンの言葉と共に瞳の輝きが強くなり、闇のロープが開いた。「すごい」

ミラは驚愕してそれだけ言った。ソラとミニックは言葉もなかつた。カレンがまとっていた闇のロープは2つに割れ、風も受けずに、

まるで翼のようにその背中でたなびいていた。

さらにカレンはショートソードをイム・ポールに向けると、それに力を込めた。今までと変わらない闇の大剣が現われた、だけのよう見えた。だが、その大きなエネルギーの塊のようなものは徐々に収縮していき、まるで一本の、吸い込まれるような濃厚な暗黒の物質で作られたロングソードのようになつた。

それを見たイム・ポールは愉快そうな様子になり、玉座から立ち上がつた。

「そこなくては面白くない。お前のその力、じつへりと味合わせてもらおう」

「そんな口がきけるのも今のうちですよ。悪いことは言いません、タマキ様を解放して消えなさい」

「これだけ面白そうなことがあるといつのこと、そのようなことができるわけあるまい? 余計なことは考えずに、その力をぶつけてこい」

「後悔しますよ」

カレンは大きく息を吐き出し、イム・ポールを見据えた。

## 力の真価

戦いはまず、残った魔物達が動き出して始まった。殺到する魔物達に、カレンは正面からゅつくりと足を進めた。

まずピットデーモンが飛びかかってきたが、それは暗黒の剣の一振りで簡単に両断された。足を止めないカレンに、次々に魔物は襲いかかつたが、どれも同じように両断されていった。イビルミストが上空から放つた氷の牙も切り捨て、それに向けて剣を振ると、距離があるにもかかわらず、霧消した。

カレンはそのまま、魔物を切り捨てながら1歩1歩進んだ。ゆっくりと、だが確実に。そして、イムトポールまであと数歩のところまで迫り、それに暗黒の剣を突きつけた。

「こんな雑魚では相手になりませんよ。消えずにそこに座っているのなら、あなたが出てきてはどうです？」

「なるほど、それもおもしろい」

イムトポールは立ち上がり、カレンに向かって歩き出した。魔物達はそれに反応するかのように動きを止めた。イムトポールはそのまま足を進め、カレンの剣の目前に立った。

「さあ、その剣で私を斬るのだろう」

カレンは暗黒の剣を引き、イムトポールの胸めがけて横薙ぎに振るつた。だが、その体は飛び上がり、その一撃を避けた。カレンは上を見上げると、すぐにその後を追つて自分も飛び上がった。

「ほう、飛べるか」

イムトポールは壁を蹴り軌道を一気に変えた。カレンもそこと近い部分の壁を蹴り、それを追つた。それが何度も繰り返され、3度目でイムトポールは壁を蹴つてから空中で静止した。カレンもそれには突っ込みますに、いくらか距離をとつて静止した。

「ここまでついてくるとはな」

「お望みなら、抜かしてみせますが」

「おもしろい」

イムトポールはそう言って自分の髪の毛を束ね、それを巻り取ると硬質化させて剣のようにしてカレンに向け、加速した。カレンはその切つ先を暗黒の剣で逸らし、上昇して突撃をかわした。だが、イムトポールはその勢いそのまま、振り返りざまに硬質化した髪の毛を3発飛ばした。カレンも振り返ると同時に暗黒の剣でそれを次々に打ち払い、壁に背をつけたイムトポールに突っ込んでいった。そのままの勢いで暗黒の剣を叩きつけたが、イムトポールの剣がそれを受け止めた。

カレンは力を込め、それを押し込もうとした。イムポールは薄ら笑いを浮かべながら、その暗黒の剣を少しづつ押し戻していった。「それがお前の全力か？ そんなことはあるまい、もっとだ、もつと力を見せてみろ！」

カレンは無言で暗黒の剣にさらに力を込めた。力は再び均衡し、そして、押し戻されたぶん以上にイムトポールの剣をじりじりと押していく。

「そうだ、それでいい！」

イムトポールはそう叫ぶと同時にカレンの暗黒の剣を弾いて上昇した。カレンもそれを追つて上空に飛び上がった。それを見たミラは玉座に向かって走り出した。

「姉さんどうするの！」

「今のうちにタマキ師匠を助けるに決まってるでしょ！」

「そうですね」

ミニックはその後を追つて走り、ソラも少し遅れて続いた。残つた10体ばかりの魔物達がそれを阻止するために動き出し、その道を塞いだ。3人は足を止めた。

「2人とも、さっきのもう一度できる？」

「駄目ですよ。タマキ先生まで巻き込むかもしれない」

「1匹ずつ倒すしかないか」

「いいえ、手はあります。僕のもう一つの魔法なら、半分くらいは

なんとかできますよ」

「よし！ ソラ、あんたは私の援護」「わかった！」

ミラは淡い光を放つ剣を構え、魔物達の右側から切り込んでいった。

「風よ！ 弾け！」

ソラは風の弾丸を放つて、ミラが1対1で戦えるように援護をした。ミニックは左側の魔物達の前に立ちはだかり、メイスを腰のあたりに構えた。

「お前達の相手はこっちだ。いくぞ！ サンダーブラスト！」

ミニックのメイスが雷をまとい、それが横殴りに振られると、そこから雷のシャワーが魔物達に降り注いだ。それを浴びた魔物は口から煙を吐いて倒れた。

「ハッ！」

気合と共にミラの剣がスケルトンを碎いた。そこにオーガが襲いかかってきたが、それはソラの放った風で体勢を崩した。ミラは素早く体の向きを変えると、立ち直ろうとしているオーガの足を切りつけ、さらに下がってきた顔面を切り裂いた。さらにソラの火の玉がそこに直撃し、うずくまつたオーガの背中をミラの剣が貫いた。

「これで全部」

ミラは剣を引き抜くと玉座に駆け寄つて、すぐに環を解放した。

「タマキ師匠、しつかりしてくださいー！」

環はミラに背中を支えられながら目を開けると、かすれた声で小さくうめいた。ソラとミニックも心配そうにそれを覗き込んだ。

「俺の上着の内ポケットに、カードが2枚ある。それを」

ミラはすぐに環の上着に手を突っ込んで、言われた通りにカードを2枚取り出した。

「これをどうすればいいんですか？」

「俺にかざして、開放と言えばいい」

「はい」

ミラは2枚のカードを環にかざした。

「開放！」

2枚のカードが光になり、それが環の体を包んだ。その光が消えると環は自分の力で体を起こした。

「まったく、ひどい目にあつたな」

環はさつきまでの弱々しい様子ではなくなつていた。3人はそれを見て驚いたが、ミラが一番最初に立ち直った。

「大丈夫なんですか？ それに、今のカードは」

「1枚は俺の魔力を込めておいたカードだよ。もう1枚はインスタントスペルカードって名づけたカードで、1回だけ決まった魔法が使える。今のはヒーリングだ」

それを聞いたミニックは驚いた表情を浮かべた。

「そんなものがあるんですね。まさか先生が作つたとか

「そう、俺が作つた」

環はそう言つて立ち上がり、上空を見上げた。

「伏せろ！」

3人が伏せると、その目の前ににイムトポールとカレンが落ちてきた。環だけは立つたままその2人を見ていた。どちらも目立つた傷は負つていなかつた。そして、その顔が環に向けられた。

カレンは安心したような表情を浮かべ、イムトポールは不思議そ  
うな表情を浮かべた。

「なぜお前が立ち上がつていられる？」

環は笑顔で指を振つた。

「悪いけど、俺には切り札がいくつかあるんだ」

「なるほど、だが完全には回復していないな」

イムトポールが環のほうに体を向けると、カレンがそれを遮るよ  
うに動いた。

「タマキ様、ここは私に任せてください」

環は今までとは違うカレンの姿を見て、少し眉をひそめた。

「カレン、大丈夫なのか？」

「大丈夫です。必ず、勝ちます」

カレンは暗黒の剣を構えた。環はそれを見て頭をかいた。

「まいったな。まあ俺もこんな状態じゃ満足に戦えないし。ここは

カレンに任せるとよ、頼んだ」

「いいんですか、タマキ師匠？」

ソラは心配そうに聞いたが、環はその肩を安心させるように叩いた。

「カレンなら大丈夫だと思うよ。今の状態の強さは、俺よりもソラ達のほうがよく見てるだろ」

「そうですよね」

ソラはうなずいてカレンを見た。ミラとミニックも同じようにじた。

「俺達は下がつていよう」

環は手を上げて3人を下がらせた。カレンはその様子を一瞥すると、イムトポールと向かいあつた。

「お前一人で私の相手をするのか。だが、そのためにはもっと力が必要だぞ。できるかな？」

イムトポールの言葉にカレンは暗黒の剣を握る手に力を入れた。ミラ達3人はそれを見て息を呑んだ。場を緊張した雰囲気が支配した。だが、それは環によって破られた。

「そのまま戦えばいい、それで勝てるよ。リラックスしていく」「その気楽な声援に、カレンは口元に笑みを浮かべた。

## 目覚める闇の力

先にしかけたのはカレンだった。垂直に上昇すると、下降しながらその勢いでイムトポールに突撃した。それは髪の剣で受け止められたが、カレンはイムトポールの体ごとそのままの勢いで押し込んでいった。

イムトポールはそれをいなして飛び上がった。カレンは勢いを殺さずに飛び上ると、壁を蹴ってそれを追つた。そこに硬質化した髪の毛が3発飛ばされた。カレンは闇をまとったナイフを投げそれを1発弾くと、ダガーを逆手で抜いて残りの2発を振り払った。

だがそれに続いてイムトポールが急降下して、真上から髪の剣を打ち下ろした。カレンはそれを暗黒の剣でなんとか受け流して交錯した。カレンはなんとか体勢を立て直したが、床を蹴ったイムトポールがすぐに下から飛び上ってきた。

「くつ！」

今度は受け流せず正面からそれを受け止めた。そのまま勢いに押され上昇していつたが、カレンはイムトポールの体を蹴り、なんとか距離をとつた。

「さつきよりも動きが鈍いな。勇者が目覚めて気が抜けたか」「くだらない挑発はやめはどうですか。私の力を暴走でもさせようとしているのかもしれません、無駄ですよ」

「そのようだな。小細工はもうやめだ」

そこでイムトポールの雰囲気が変わった。髪の毛が広がり全身を包み、その大半が体に絡み付いてそのまま一体化した。今までの長髪の姿とは変わった短髪の魔族の姿が現われた。

「これ以上まわりくどいことはしない。お前の力があるべき姿に目覚めさせてやる！」

「今これが、あるべき姿ですよ」

カレンはそう言って動き出そうとしたが、イムトポールはそれよ

りもはるかに速く動き、カレンの暗黒の剣を弾いた。そのまま反対側の壁を蹴り、カレンの背後に迫った。なんとか体勢を立て直したカレン暗黒の剣を振るつたが、イムトポールはそれをかいぐぐると上昇した。

カレンはすぐに後を追おうとしたが、そこにイムトポールが急降下してきた。それはなんとか暗黒の剣で受け流し、ダガーを振るつたが、それは空を切つた。そして、すぐに下から上昇してきた突撃によつてそれは弾かれた。

「さあどうする？　お前の今の力では勝てないのはよくわかつただらう」

上空から見下ろすイムトポールにカレンは笑つてみせた。

「そうでもありますんね」

カレンは暗黒の剣を構えたが、それは不安定になり、かろうじて剣といえるような形の巨大な闇の塊になつた。

その闇の塊が振るわれると、衝撃波がイムトポールを襲つた。体勢が崩れ、カレンが突っ込んでいくと後ろに飛んだ。そのままカレンはそれを追つて闇の塊を横に薙いだ。壁がごつそりと削られたが、イムトポールは上に飛んで回避していた。

すぐに上空で方向転換したイムトポールが急降下したが、カレンは壁を蹴つてそれを回避するとすぐに下に向かつて闇の塊を振つた。衝撃波が床をえぐつたが、イムトポールは転がつてそれを避けた。そこにカレンは急降下して闇の塊を叩きつけた。だが、それはイムトポールがかかけた両手の間に発生させた闇に受け止められた。

「素晴らしい力だ。この私でもこれは吸収しきれん」

その闇から力が放出され、カレンは上空に打ち上げられた。体勢を立て直す前に、イムトポールが飛び上がり、カレンの首をつかんだ。

「予定とは違うが、これでもかまわん！」

イムトポールの体から闇がほとばしり、それが首をつかむ手からカレンの体に流れ込んだ。

「ぐうう！」

カレンはうめきながら闇の塊を振るおうとしたが、その瞬間さらに闇がその体に流れ込んだ。

「うぐうがあああ！」

その体が強張り、イムトポールは満足気な笑みを浮かべたが、そこに一枚のカードが滑り込んできて、光と共に爆発した。カレンの体は空中に投げ出されたが、飛び上がった環が受け止めて着地した。

「カレン、大丈夫か」

環が聞いてもカレンは目を閉じて苦しそうにうめいているだけだつた。

「邪魔をしないでもらおうか！」

そこにイムトポールが突進してきたが、環は落ち着いて腰のカード入れに手を伸ばし、そこにあるカードをまとめてつかんだ。

「開放！」

声と共にカードを目の前にばら撒いた。そこにイムトポールが飛び込み、腕を伸ばしてきた。その手が環とカレンにとどきそうになつた瞬間、ばら撒かれたカードが光と共に一斉に爆発した。

イムトポールは爆発で吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。環はカレンの様子をもう一度確認したが、やはり苦しそうにうめいているだけだった。

「力の暴走だな。うまくいくかわからないけど、やるしかないか」

環はそうつぶやくと、カレンの後頭部に片手をそえると、自分の額をカレンの額と合わせて目を閉じた。そのふれ合つた額から闇が流れ出し、それが環の体を包んでいった。闇はそのまま環の体に染み込むように消えていった。

そして、闇の後は光が額を中心に広がり、2人を包み込んだ。だが、イムトポールに環が蹴り飛ばされると同時に、その光も消えた。環は地面を派手に転がつたが、なんとか膝をついて状態を起こした。「余計な邪魔をしてくれたな、そんなにまた痛めつけられたいか」イムトポールは髪の剣を環に向けながら迫ってきたが、環は頭を

押さえ、少し顔をしかめながらも笑った。

「そうでもないさ、開放！」

カード入れから2枚のカードを取り出し、それを続けてイムトポールに向かつて投げつけた。一枚は髪の剣で切られ爆発し、もう一枚は後ろにそれた。

「いつまでもこんなおもちやが通用すると思つな」

イムトポールは環の目の前で足を止め、髪の剣を振り上げた。だが、爆音と共にカレンが猛スピードでその背後に迫り、ショートソードで斬りつけ、そのまま体当たりでイムトポールの体を突き飛ばした。

「まったく、あのカードは便利なものですね」

元の瞳に戻つているカレンはそう言いながら、環に手を差し出した。環はその手を握つて立ち上がつた。

「まあ、金庫番にはいい顔されないけどね」

「当然です。スペルカード一枚で魔法1発などといつのは非常識ですよ」

「黙れ！」

2人の会話をイムトポールの怒声が遮つた。環とカレンが見ると、それは背中からどす黒い血を流し、顔を歪めて立つていた。

「くだらないおもちやと、そんななまくらで私を傷つけるとは、いまいましい奴だ」

イムトポールの怒りにも環は冷静に微笑を浮かべた。

「あんた、怒りっぽくて駄目だな。ちょっと自分の思い通りにならなかつたからって、それはないだろ。このカードは俺の切り札だし、カレンの剣だってなまくらとはほど遠いぜ。そこらへんはちゃんと理解してもらいたいね」

「お前達は生かしておくようと言っていたが、気が変わつた。今ここで殺してやるわ」

イムトポールは両手を広げ、自分の前に闇を作り出した。そしてその中に足を踏み入れ、姿を消した。環はそれを見つめながら口を

開いた。

「カレン、どうも俺の頭の中が混乱してるんだけど、そつちまどりだ」

「私もです。どうやら記憶がおかしくなつていいよつで、見たことのない景色が浮かんできます」

闇の中から3倍くらいの大きさに膨れ上がつた足が出てきた。

「俺もだ。見たことのないはずの記憶が浮かんでくる。俺の育つた世界とは違う世界の記憶だ」

「同じです。私にもこの世界の記憶でない、違う世界の記憶が見えます」

さらに、鋭い爪を持つた太い腕が闇の中から現われた。

「俺たちの記憶が混ざったのかな」

「かもしれません。私の余分な力をタマキ様が体に取り込んだ時に、何かが起こつたのでしょうか」

「あいつに蹴られたからかもしれないな」

胴体と頭部が姿を現した。それは単純にイムト・ボールが大きくなつたものではなく、体に巻きついていた髪はうらじのようになり、頭に残されていた髪はまとまり、3本の角になつていた。顔は今までの人間のようなものではなく、醜い異形の容貌になつていた。

「死ぬ準備はできたか?」

今までよりずっと低い声が告げた。

## 2人の底力

「タマキ様、どの程度戦えますか」「でかい魔法を連発とかは無理だな。さつき取り込んだ力が使えるといいんだけど」

「それはあまり計算はできませんね」

「カレンのほうはどうなんだ」

「私は大丈夫です。ただ、あまり長時間は戦えそうにありません」「なら、決めるところで一気にいかないとな」

「相談は終わったか」

イムトポールの声が2人の会話を遮った。環はそれに笑顔を向けた。

「まだもう少しだ。あんたを確実に倒さなきゃならないからな」

そう言つてカードを投げつけた。だがイムトポールはその爆発をものともせず、ゆっくりと動き始めた。

環は魔力を全身に巡らせた。カレンは瞳を金色に輝かせ、暗黒の剣と闇の翼を作り出した。2人は左右に別れて走つた。イムトポールは2人の動きを確認するように首を動かし、腕を上げた。その腕が振り下ろされると、そこから放たれた衝撃波が環を襲つた。

「あぶねっ！」

環はそれをなんとか横つ飛びで避けたが、すぐに次の衝撃波が襲つてきた。

「プロテクション！」

なんとかそれは魔法の盾を展開して防いだが、それでも環は後ろに数メートル押された。イムトポールはさらに衝撃波を放とうと腕を振り上げたが、カレンが横からその足に斬りかかった。イムトポールは素早くそれに反応し、振り上げた腕をカレンに向かつて横殴りに振るつた。カレンは攻撃を止め、上に飛んでそれをかわした。

「3倍ライトニングボルト！ ダブルだ！」

そこに環が左右の手で雷の矢を放ちながら走ってきた。イムトポールは左右の腕を振るつてそれを打ち消したが、環は床を蹴つて跳び上がり、その顔面に回し蹴りを叩き込んだ。だが、鈍い感触だけで、蹴りが当たった顔はほんのわずかしか衝撃を受けている様子しかなかつた。

イムトポールは環の足を掴み、振り回して壁に投げつけようとしたが、環はその腕に手を当てた。

「バースト！」

爆発で環を掴んでいた手が緩み、環の体は投げつけられることなく放り出された。そこにカレンが急降下し、イムトポールの後頭部に暗黒の剣を振り下ろした。しかし、それはイムトポールがかげた腕に受け止められた。

「2倍！ バースト！」

そこに空中から爆発で加速した環が飛び込んできた。そのままイムトポールの足元に潜り込むと、その太い足に手を当てた。

「5倍！ バアアアスト！」

その爆発でイムトポールの足がゆらいだ。カレンは暗黒の剣を受け止めていた腕を蹴り、後方に跳んで床に着地すると、すぐにその床を蹴つて低い軌道でイムトポールの背後から迫つた。そして、その暗黒の剣が太い腕の付け根を切つた。

「ウグウグウオオ！」

凄まじい咆哮と共にイムトポールは腕を振り回し、環とカレンを弾き飛ばした。2人はなんとか着地し、態勢を立て直した。その位置関係はちょうど前後からイムトポールを挟み込むような形になつた。

「ファーアボール！」

まず環が火の玉を放つた。今までほとんど足を動かさなかつたイムトポールだつたが、いきなり上空に飛び上がつた。そのまま環を踏み潰そうと落下してきたが、環は前方に転がつてそれをかわした。イムトポールは素早く振り返り、環を攻撃しようとしたが、そこ

に正面からカレンが突撃してきた。腕が振るわれたが、カレンはそれをぎりぎりで回避して、そのままイムトポールと交錯した。カレンはそのまま直進しながら上昇し、壁に足を着けた。

イムトポールはそこに顔を向けると、口を開けた。そこから一條のエネルギーが放たれ、壁に向かつた。カレンは壁を蹴つてそれをなんとか避けたが、そのエネルギーは壁を削りながらカレンを追つた。

だが、それに闇の刃のようなものが投げつけられ、そこから爆発が起こった。それによってイムトポールの口は塞がれ、カレンを追うエネルギーは止まつた。

「うまくいったな」

そう言つた環が右手を握ると、その腕を炎のように揺らめく闇が包んだ。

「お前がカレンの力を暴走させようとした力だ。なかなかのもんだろ？」

環が右腕を振ると、その闇が飛び、大きな刃のような形になつた。イムトポールは片手を出し、それを受け止めようとしたが、それを受けると同時に体が後ろに押された。もう片方の手も添えたが、それでも止められず、どんどん押し込まれていつた。そこにカレンが暗黒の剣を構え、旗下の勢いそのままに迫つた。

「小瀕な人間どもがああああああああ！」

その絶叫と同時に、イムトポールは闇の刃を強く握ると、それを間近に迫つたカレンに叩きつけた。カレンはなんとか暗黒の剣でそれを防いだが、その衝撃で環の立つてゐるところまで飛ばされ、体勢を崩しながら着地した。

「なんか怒らせたみたいだな」

「好都合ですね。隙ができるはずですよ」

そこにイムトポールが一気に跳んできた。だが環は右腕を闇に包ませると、それでその巨体を殴りつけた。イムトポールは跳ね返され、立つていた地点まで転がつていつた。カレンは暗黒の剣を闇の

塊に変化させ、立ち上がろうとしているところに飛び、強烈な一撃を加えた。イムトポールはさらに壁際まで吹っ飛ぶことになった。

「カレン！ あれをやるぞ！」

「はい！」

カレンは環の傍らまで飛んで戻り、環が差し出した右手を握りつとした。

「グガアアアアアアアアアアアアアアアア！」

イムトポールは這いつくばつたまま、顔だけを2人のほうに向けると、口を自分の顔くらいの大きさまで開いた。そしてそこからはさらに太いエネルギーの塊が光線状に放たれた。

環とカレンはそれをなんとか左右にかわしたが、体勢を立て直す前に4つ足で飛んだイムトポールが迫った。2人はめちゃくちゃに振り回された腕に弾き飛ばされた。そのままの勢いでイムトポールは環に飛びかかっていった。環はそれをなんとか両腕で受け止め、さらにその両腕を闇に包ませた。だが、それでも少しづつ押されていった。

「潰れるー！ ツブレロー！」

イムトポールは絶叫しながら環を潰そうと、さらに力を込めた。しかし、そこにカレンが滑り込んできた。

「ハアツ！」

氣合を込めた暗黒の剣がのしかかるイムトポールの胸に深々と刺さった。そして環の体に左手を回した。

「飛びますよー！」

「よし、10倍！ バースト！」

魔法を使うと同時に、環も右手をカレンの体に回した。大爆発とカレンの力で、2人はイムトポールを上にしたまま、ものすごいスピードで上昇した。

「タマキ様、剣を握つてください！」

環はカレンの右手に自分の左手をかぶせて剣を握った。

「今、心と！」

「魂を1つに！」

剣に2人の力が注ぎ込まれ、イムトポールの体を強大な闇の剣が貫いた。その背中からは形を成せないほどの闇のエネルギーが噴出していった。

「光と共に！」

「消え去れえええええ！」

2人の重ねられた手から光が溢れ、闇は光となつて剣を中心に爆発的に広がつていった。その光が消えた時、イムトポールの体は跡形もなく消滅していた。

環とカレンは互いの体に手を回したまま、ゆっくりと床に降り立ち、その手を放した。

「師匠ー！」

ミラ、ソラ、ミニックの3人が笑顔で2人のもとに走ってきた。  
「3人とも無事だつたみたいだね。けつこう派手にやつたから巻き込まれたんじやないかと思ったよ」

環は少し疲れたような表情だつたが、明るい笑顔だつた。

「いえいえ、それは大丈夫です」

ミラは手を振つて自身たつぱりに答えた。それから目を輝かせてさらに口を開いた。

「それでタマキ師匠！ これからどうするんですか？ サラに魔族討伐の旅をつづけるんでしょうか？」

「別にそういうわけじゃないんだけど」

環がカレンをちらつと見ると、カレンは黙つてうなずいた。

「まあ、旅の目的は果たせたみたいだから、いつたん帰ろうと思つてる」

「ノーデルシア王国にですね！ そういうことならすぐに出発しますよ先生！」

そう言つたミニックが1人で走り出した。環はその背中を見ながら、上空をちらつと見上げ、ゆっくりと歩き出した。

## 2人の底力（後書き）

ここまでが第2部になります。

## 勇者の危機

イムトポールとの戦いから4ヶ月。環達はノーデルシア王国に戻つてきていた。ミラ、ソラ、ミニックの3人は環の弟子ということもあって、特に何の問題もなく受け入れられていた。

ミラとソラはエバンスと葉子の夫妻に気に入られ、剣術と精霊の使い方に関する指導されていた。ミニックは環の助手のようなことをして、魔法に関する理解を深めていた。

そんなある日、環はいつものように自室に引きこもっていた。ミニックは必要な物を買いに行くために、少し離れた町まで出かけていて留守にしていた。

「タマキ、いるのか？」

ノックの音とエバンスの声がした。

「ああ、いるよ。入るんなら勝手に入ってくれ」

環が答えると、エバンスがドアを開けて部屋に入ってきた。葉子も一緒にだった。

「どうしたんだよ2人で」

環は椅子を用意しながらそう聞いたが、エバンスは笑顔で首を横に振った。

「いや、特別なことがあるわけじゃない。ただ様子を見に来ただけだ」

「そうかい、まあ座つてよ」

エバンスと葉子は環の用意した椅子に座った。まず口を開いたのは葉子だった。

「環君、カレンと混ざった記憶についてのはどうなったの？」

「情報は交換しますけど、どうも混ざった時のショックでビックり断片的になつてるんですよ」

「そうなの。それは大変ね」

「まあ別に、それほど大変でもないですよ。俺の記憶だつてほつと

いたら消えそうだったし、カレンも記憶が取り戻せなくともそんなに気にしてる感じでもないし」

「本当に平気なのか？」

エバンスは心配そうに聞いたが、環は笑いながら手を横に振った。「平気だよ。カレンの記憶だったら、いざとなれば封印した張本人を締め上げればいいんだからさ」

「大賢者か。一体何のために記憶の封印などといふことをやつてるのだろうな」

「知られたくないことでもあるんじゃないかな。昔何かやらかしたとか」

「カレンは長い間一緒に旅をしていたのだろう？ なにかそういう記憶はないのか？」

「いや、それ以前に、カレンは全部記憶が戻ってるわけじゃない。あの爺さんに出会つ前の記憶はないみたいなんだ。それは別口の封印か、それとも元からなのかもしぬれない」

「生まれた場所も、子供の頃のこととも何も憶えてないのね、カレンは」

「いえ、特に問題ありませんから」と心配なく

いつの間にか部屋に入つてきていたカレンが、心配そうな表情の葉子に声をかけた。

「びっくりしたー、カレンいつ入つてきたの」

「今ですよ。昼食をお持ちしたのですが、お邪魔だったようですね」「いや、悪いが私達のぶんも持つてくれ、たまには食事を共にするのもいいだろつ」

「かしこまりました。お二人のお食事もすぐに用意いたします」

カレンは2人ぶんの食事をテーブルに置いてから一礼すると、部屋から出て行つた。しばらくして、カレンが同じものを持ってくると、ささやかだが、平和な食事が始まつた。

その日の夜。夕食を済ませた環は、カレンと向かい合つて椅子に

座つてくつろいでいた。

「記憶の照合は大体終わったと思うけど、大したものはなかつたね」「いえ、旅でどこに立ち寄ったかという記憶は重要かもしません。調べる手がかりになります」

「調べると言つても、何を調べるのかがわからない」とビリジョウもないよ」

「そうですね。動いたとしても無駄が多くなるでしょう」

「そういうこと。それに今はのんびりすゞしたいしさ」

「それもいいかもしませんね。それでは、そろそろ私は失礼します」

カレンは立ち上がり一礼すると、体の向きを変えた。しかし、背後からの音ですぐに振り返った。環が椅子から立とうとした時にバランスを崩したらしく、膝をついていた。カレンはすぐにその側に駆け寄り、体を支えた。

「どうしました」

「いや、なんか立ちくらみかな」

環はそれだけ言つたが、明らかにそれよりも状態は悪そうだった。カレンは環の体に手を回して、ゆっくりベッドまで運んだ。

「無理に動こうとしないでください」

そう言いながら環をベッドに横たえた。環は乱れた息をして、天井を見つめていた。カレンはその手を握つて、耳元で小さな声で語りかけた。

「タマキ様、どこが悪いのか、わかりますか」

「いや、苦しい、俺の体のなかで、何かが、走りまわってる、ような感じだ」

苦しそうな途切れ途切れの言葉を聞いたカレンは、うつむいて考えんこむよくな様子を見せた。それから、手を握っているのとは逆の手で環の額に手を当てて、目を閉じた。しばらくそのままの体勢でいてから、ゆっくり目を開けた。

「理由はわかりませんが、タマキ様の中で、力のバランスが崩れて

いるようです。少し我慢していくください、エバンス様ならこれを緩和できるかもしません

カレンは立ち上がり、急いで部屋を出て行った。そしてすぐにエバンスを連れて戻ってきた。

「タマキ！ 大丈夫なのか！」

エバンスはすぐにベッドに駆け寄り、環を覗き込んだ。その苦しいうな様子を確認すると、すぐにカレンのほうに振り返った。

「これはどういうことだ」

「タマキ様の中の力のバランスが崩れていると思われます。前に戦つた魔族の破滅の力を私から取り込んだことが影響しているのかもしれません

「しかし、それは4ヶ月も前のことだろう」

「はい。ですから原因かどうかはわかりません。ただ、今の症状には確実に影響を与えていると思われます」

「そうか、それで私を呼んだのだな」

エバンスはそう言うと、環の体に両手をかざした。

「水の精霊よ。この者内にある破滅の力を抑える力を我が手に」  
かざした両手を霧が包み始め、それは大きな手のような形になつた。そこからその霧が環の体に伸びていって、体を覆うように広がつていつた。環の様子は少しづつ落ち着いていつた。

「タマキ師匠が倒れたつた本当ですか！」

そこに、葉子とミラ、ソラが部屋に飛び込んできた。ミラとソラはすぐにベッドに駆け寄ろうとしたが、カレンに止められた。

「今、エバンス様が精霊の力で症状の緩和をさせています。集中を乱してはいけません」

「精霊の力なら、葉子様もソラも使えるじゃありませんか。1人より3人でやつたほうがよくなっていますか？」

ミラは興奮気味でそう言つたが、それに対しても葉子が口を開いた。

「癒しの力を使えるのは水の精霊だけなの。私の大地の精霊、ソラ

君の風や火の精霊にその力はないのよ

「そうなの？」

話を振られたソラはうなずいた。

「そうだよ。だから水の精霊は特に神聖なものとされてるんだ。話さなかつたつけ」

「聞いてないって」

「2人とも、静かにしなさい」

カレンの厳しい一言で、ミラとソラは黙つた。しばらくの間、沈黙がその場を支配したが、エバンスがかざしていた手を下ろしてその沈黙を破つた。

「とりあえず落ち着いたようだ。だが、原因がわからない」

エバンスは難しい顔をして、今は落ち着いて目を閉じている様子の環をじっと見た。

「何か、外からの働きかけがあったということでしょうか」

カレンの質問にエバンスは首を横に振つた。

「わからない。タマキの体内の力はかなり乱れていたが、こんなことは少なくとも人間の力ではできないはずだ。これは、嫌な感覚だな」

その不吉な言葉に、一同は黙りこんだ。

「魔族の仕業つていうことはないんでしょうか」

ミラがそう言つたが、エバンスは首を横に振つた。

「その可能性もあるが、おそらく違う。魔族ならばタマキの中にある破滅の力だけしか操れないだろう。だが、今は全ての力が乱れていた」

エバンスは環をじっと見つめた。

「これはむしろ病に近いものかもしれない。しかし、魔力の乱れで人が倒れるなどというのは聞いたことがない」

「しかし、タマキ様は特別です」

カレンはそう言って横たわる環を見つめ、ゆっくりと目を閉じた。

## 希望を探す旅立ち

環が倒れてから2日が経つた。症状は落ち着いていたが、目は覚めず、ずっとベッドに横たわっていた。その間、カレンは必要な世話をするためにだけに部屋を訪れ、それ以外の時間は環の症状の原因を調べることに力を注いでいた。

だが、それは何の成果もなかった。資料室には役に立つものはない、城内を捜索しても怪しいもの等は何も発見できなかつた。その夜、それでもカレンは疲れた様子もあきらめた様子もなく、今は環の枕元の椅子に座り、その様子を見守つていた。そうしてみると、ノックの音が響いた。

「はい、どうぞ」

カレンが立ち上がり返事をすると、ドアが静かに開けられ、葉子が入ってきた。

「まだ休んでいなかつたの」葉子は心配そうな表情をカレンに向けた。「環君が倒れてからずっと休まずに調べものをしたりしてたんでしょう？　早めに休んでおかないと体がもたないわよ」

「いえ、これくらいのことなら大丈夫です。ヨウコ様こそ、色々と公務もあるのですから、お早めに休まれたほうがよろしいのでは」「こうして様子を見に来ないと、エバンスも私も心配でしうがな

いの」

「そうですか。残念ですが、今のところ状況がよくなる様子も、改善する手段もありません」

カレンの答えに葉子はため息をついた。

「そうなの。でもカレン、あなたは何か考えがあるんじゃないの？」

葉子の問いにはすぐに答えず、カレンは環の顔を見つめてから口を開いた。

「はい、考えはあります」

それだけ言って、内容までは説明する気はないようだつた。葉子

もそれ以上の答えは求めなかつた。

「それじゃ、私は戻るから。カレンもちゃんと休まないと駄目よ」  
それだけ言うと、葉子はカレンを残して部屋から出て行つた。カレンは再び椅子に座り、しばらくの間、何かを考えているような様子で環の寝顔を眺めていた。

翌朝、カレンは狭い自室で自分の旅の装備をベッドに広げ、丁寧に手入れをしていた。それが一通り終わつてから、鏡を適當な場所に立てかけて、肩くらいまである自分の髪の毛を左手でまとめながら、右手でダガーをつかんだ。

そのまま一気に自分の髪の毛をダガーで切り落とした。その後は鏡を見ながら、何とか格好がつくよう「ダガーを使って髪を細かく整えた。それから侍女服を脱ぎ、ベッドに広げていた旅装を手早く身に着けていった。

数分後には、侍女としてのカレンではなく、旅の剣士としてのカレンの姿があつた。そのままドアを開け、まっすぐ環の部屋を日指した。すれ違う人は、カレンの格好と、その大雑把に切られた髪に驚いたような表情を浮かべていた。

カレンはノックもせずに環の部屋のドアを開けて中に入った。部屋にはミラとソラが来ていた。2人はカレンの姿に驚いたようで、しばらくの間、何も言えなかつた。

そんな2人にかまわらず、カレンはベッドの側に行くと、目を閉じている環の手を両手で優しく包み込んだ。

「タマキ様、私は旅に出ようと思います。必ずいい報せを持つて戻りますから、それまで待つていてください」

それだけ言って、カレンは手を放すと部屋から出て行こうとした。ミラとソラは慌ててその行く手を遮つた。

「ちょっと待つてください。旅にでるなら私達も一緒に行きます！」

「どうか、なんで旅に出るんですか？」

カレンは立ち止まって、2人の顔を見た。

「ハティス様を探しに行くんですよ。大賢者と言われたの方なら、この状況に関しても何かわかることがあるかも知れませんから」

「そういうことなら私達も一緒に行きます！」

ミラはソラの腕をつかんで力強く宣言した。ソラはまだ戸惑いながら口を開いた。

「そうは言つても、あの大賢者つて言つ人が今どこにいるかはわからんじやありませんか？」

「それなら心配ありませんよ。私の記憶によれば放浪癖のある方ですが、旅のルートは大体決まっていますし、拠点にしている場所はそれほど多くありませんから、そこを当たつていけば必ず見つけられるはずです」

「なるほど、わかりました。すぐに準備をしてきますから待っていてください！」

ミラは急いで部屋を出て行つた。ソラはすぐには追わなかつた。

「あの、僕達がついていつてもいいんでしょつか？」

「あなた達も強くなりましたからね。こちらから頼みたいくらいです」

「はい！ それで、集まる場所は  
「裏の門の前にしましょうか」

「わかりました！」

ソラも勢いよく部屋を飛び出していった。カレンはもう一度環の顔をよく見てから、静かに部屋を出て行つた。

部屋を出たカレンはまっすぐエバンスの執務室に向かつた。緊急ということで半ば強引にすぐに取り次がせた。何かを相談していたエバンスとロレンザは部屋に入ってきたカレンを見て、少し驚いた様子だつた。

「どうしたんだその格好は」

「それにその髪は、何かあつたのですか？ カレン」

カレンは黙つて一礼してから、顔を上げた。何かを決意したような、鋭い表情だつた。

「これから、旅に出ます」

その表情と声に、エバンスは姿勢を正し、カレンの顔をまつすぐ  
に見据えた。

「タマキのことで必要なことなのか」「はい」

エバンスはしばらくの間、机に目を落として考えているようだっ  
た。そして、その目を上げると、力強く首を縦に振った。

「わかった。必ずタマキを救う手段を見つけてくれ。必要なも  
のがあれば、何であれ持つていくのを許可します」

「ありがとうございます」

カレンは入ってきた時と同じように頭を下げた。そこにロレンザ  
が歩み寄つていった。

「カレン、こちらのことは心配せず、しつかり使命を果たしなさい」「はい、よろしくお願ひいたします」

そう答えるとカレンは頭を上げ、部屋から出て行った。ロレンザ  
はそれを見ながら、口の中で何かをささやいた。エバンスはそれに  
気がついた。

「どうした？」

「カレンの旅の幸運を祈つていました」

数時間後、カレンが指定した場所にはミラとソラが大きな荷物を  
足元に置いて待っていた。そこに、荷馬車に乗ったカレンがやつて  
来た。バーンズも一緒だった。

「2人とも準備はできましたか」

「はい、ばっちりです。それより聞いてくださいよ、ミニックにも  
声をかけてやつたんですけど、僕はタマキ先生の側についてる、と  
か言つて断つてきましたよ」

「そうですか。それもいいかもしませんね」

カレンはそれだけ言って、バーンズと一緒に荷物の整理と積み込  
みを始めた。ミラとソラもそれを手伝い始めると、そこにミニック

が何か言いながら駆けつけてきた。

「ああよかつた。まだ出発してなかつたんですね」

ミラは怪訝そうな顔で息を切らしているミニックを見た。

「あんた、一緒に来ないんじやなかつたの？」

「いや、ミラ先輩、それがタマキ先生が田を覚ましたんですよ」

その一言にその場にいた全員が手を止めた。

「田を覚ましたって！」

ミラはミニックに掴みかかった。だが、ソラがなんとか引きはなした。

「姉さん落ち着いて。それで、タマキ師匠はどうなんだい？」

「起き上がれはしないくらいだけど、意識はちゃんととしてますよ。それでカレンさんのことを話したら、お前も一緒に行けって言われて」

ミニックはそう言いながら、環がつけていたカード入れを取り出した。

「それで、これを持って行けって、渡されたんです」

カレンはそれをミニックから受け取り、中身を確認してからベルトに取り付けた。

「ところでミニック、あんた荷物は」

ミラにそう言われ、ミニックは背負っていた2つの袋を地面上に下ろした。

「僕の荷物は全部ここに入つてますよ。それより、行くと決まったからにはすぐに出発しましょう」

それから、自分の荷物を持つて荷馬車の荷台に乗り込んだ。それから少し作業を続け、全ての荷物の積み込みは完了した。

「これで全部ですね」

バーンズは手をたたきながらカレンにそう言った。

「はい。わざわざ手伝つていただいてありがとうございます」

「なに、カレン殿の頼みと勇者様のためですかね。できれば私も同行したいところですが」

「いえ、バーンズ様にはタマキ様を守つていていただかなくてはいけません」

「わかりました。私が全力でお守りします。では、旅のじ無事を願っています」

「くれぐれもお願ひします」

カレンとバーンズは固い握手をした。それからカレンは御者台に上り、荷馬車を出発させた。

「カレン師匠、一つ聞きたいんですが」

しばらくしてから、ミラが後ろから質問をした。

「なんですか」

「なんでわざわざバーンズさんにタマキ師匠のことを持んだんですか？」

「それは、あの城で一番信用できるのがエバンス様とヨウゴ様、そして、バーンズ様だからですよ」

ミラはその答えに納得したような納得していないような微妙な表情をしていた。カレンはそれにはかまわず、城を振り返ることもなかつた。

## 修行の成果

旅立ちから10日が経っていた。その間1つの村に立ち寄ったが、基本的には全て野宿だった。カレンは全く平気な様子だったが、他の3人には少々疲れが見えた。

「カレン師匠ー、そろそろどこかちゃんとしたところに泊まりませんか？」

ミラは荷馬車に寝転がりながらぼやき気味に言った。

「それなら、今日中に村に着くはずですよ。運がよければ、屋根のあるところで休めるでしょう」

「本当ですか！ それなら急ぎましょう」

ミラは起き上がってそう言つたが、ソラとミニックは特に何の反応もしなかつた。カレンも振り返ることはなかつた。

「早めに到着しないと色々と面倒なこともありますからね」

そう言って、カレンは少し馬車のペースを上げた。そして、その日の夕方というよりは早い時間、一行は小さな村に到着した。

カレンは荷馬車を村の入り口に止めて3人にそれを任せると、手近な村人をつかまえ、村長の居所を聞いてそこに向かった。残された3人は適当に村を見回していた。

「特に特徴のない普通の小さい村みたいですね」

「そんなことより、うまく泊まれればいいんだけどね」

ミニックとミラは多少疲れた様子で言葉を交わしていくが、ソラだけは難しい顔をしていた。ミニックはそれに気づいた。

「どうしたんです？ そんな顔をして」

「いや、どうもおかしい感じがするんだ。なんて言えばいいのかわからないけど、この村には何かよくないことが起きる気がする」

「精霊のお告げってやつ？ 今のところ変わった様子もないけど」

「村そのものが問題なんじゃないよ。ひょっとしたら魔物が近くにいるのかもしない」

「魔物ねえ。退治でもすればものすごい歓迎されたりするんじゃない」

そう雑談をしているうちに、カレンが戻ってきた。

「誰も使つてない家があるそなうので、そこを借りることにしました。ただ、条件つきですけどね」

「条件つて、まさか魔物退治ですか？」

そう言つたミラをカレンは不思議そうに眺めた。

「そうです。最近このあたりに魔物が出没することがあるので、それを退治して欲しいという話ですが、よくわかりましたね」

「いえ、ソラが妙なことを言つてたので、妙なこととは、どうこうことですか」

カレンはソラに目を向いた。

「いえ、どうも妙な感じがするんです。近いうちにこの村に何かよくないことが起こるような」

「そういうことですか。精霊の力が使えるソラの言つことなら、無視をするわけにはいきませんね。今日は警戒しながら休んで、明日になつたら魔物を探すことにしましょ」

その夜、最初の見張りはミラとミーリックがすることになった。2人は屋根に上つて、そこから村を見渡していた。すでに村人のほとんどは眠りについているようだつた。

「それにしても、泊めてもらう変わりに魔物退治なんて割に合わない気がしますね」

「別にそんなことはないと思つけど。大体、タマキ師匠だったら何もなくたつて、自分から首を突つ込んでいくでしょ」

「たしかにそうですね。これも修行だと思ってがんばりますか」

それからしばらくの間、2人は黙つて見張りをしていたが、ミラが自分にたかる虫を潰してから口を開いた。

「あー、せっかく屋根のあるところに泊まれたのに、これじゃ野宿と大差ないじやない」

「交代の時間になれば屋根の下で休めますよ」

「こんなことになったのも全部魔物が悪いんだ。あいつら、見つけたらギタギタにしてやる」

「そうですね、早いとこ片付けないと旅にも影響が出ますし、どうせなら、今晚来てくれるとな面倒がなくていいんですけど」

ミリはそう言つたミニックを、なにか測るような目で見た。

「ずいぶん自信があんのね」

「僕はこの数ヶ月間、ずっとタマキ先生の助手をして色々教えてもらつたんです。そこらへんの雑魚魔物なんて簡単に片付けて見せますよ」

「ああそう、それはすごい。張り切りすぎて山火事を起しきたり家を吹き飛ばしたりしないように気をつけてね」

「この僕がそんなことをするわけがないでしょ」

「この僕だからだよ」

その後は適当な雑談をしながら交代の時間までじした。交代の時間がくると、カレンとソラが家から出てきた。

「姉さん、ミニック、交代の時間だよ」

ミリとミニックはその声に応えて屋根から下りてきた。しかしその時、村中に大きな咆哮が響いた。ミニックはそれを聞いて笑顔になつた。

「本当にあつちから出でてきてくれるとは、手間が省けましたね」

「そんなこと言つてないで、すぐに行かないと村に被害が出るよー」

ソラはすぐに咆哮が聞こえた方向に走り出した。他の3人もすぐにそれに続いた。村のはずれには20体程度の魔物がいた。

「風よ！」

ソラは強風を起こして魔物達の足を止めた。3人はすぐに追いつき、それぞれの武器を構えた。

「3人とも、村に魔物を入れないよう注意して戦いなさい」

「もちろんです、ここから先には進ませませんよ」

ミラはそう答えて魔物の中心に向かつて走り出した。

「私が分断するから、2人は残りをお願い！」

ソラとミニックは左右に別れて、魔物と向かい合つた。カレンはその3人を後ろから油断なく見守る体勢をとつた。

ミラは剣を振るつて数体魔物を切りながら走り抜け、一気に魔物達の背後にまわつた。

「僕も負けてられませんね！ サンダーブラスト！」

ミニックもそれに続いた。メイスを軽く一振りすると、そこから放された雷が3体の魔物を打ち倒した。前に使つたものよりも雷は集中し、無駄がなかつた。

「風よ、炎を乗せて渦巻け！」

ソラが差し出した右手に火の玉が発し、それが一気に風に乗つて魔物に向かつていつた。そして、それは魔物4体程度を巻き込む小さな炎の竜巻になつた。

魔物達はそれぞれの攻撃を受けて混乱した。ミラは再びその中に切り込んでいき、また止めを刺すことにはこだわらずに、走り抜けながら剣を振るつた。

「よし！ サークルオブアイス！」

ミニックが地面に手をつけると、魔物達を囮むように、大人の背丈ほどもある鋭い氷の塊が地面から突き出した。

「ソラ！ 今だ！」

ミラが叫ぶと、ソラは杖を地面に突き立てた。

「炎よ、魔物達を包め！」

声と共にミラの杖から炎が噴き出し、魔物達を包むように広がつた。

「風よ、炎を運び魔物達を焼き尽くせ！」

氷の円の中で、炎の風が吹き荒れた。それが治まるごとに立つてゐる魔物は1体もいなかつた。ミニックはその中心に歩いていつた。

「こんな雑魚なら、10倍いたつて怖くありませんね」

そう言いながら振り返つたが、いきなりその横を、雷をまとつた

ナイフが通り過ぎた。ミニックが慌てて振り向くと、炎に巻き込まれなところに隠れていたらしいピットーモンにそのナイフが突き刺さっていた。

「油断をしてはいけませんよ」

カレンはそう言いながら倒れた魔物に近づき、ショートソードで止めを刺すと、ナイフを回収した。

「村長をやつている方から聞いた話からすると、おそらくこれで全部でしょう。念のために、もう一日この村に泊まって様子を見てから出発することにしましょうか」

それから、戦いの音で起きてきた村人達に事情を説明し、カレンとソラは最初から決めていた通りに見張りを続けた。

夜が明けてからは4人は村の周囲を見回り、その日の夜も見張りを立てて同じようにすごした。魔物は影も形もなく、村は平穏を取り戻していた。そして朝、4人は礼として受け取った食料等を荷馬車に積み込むと、村人達に見送られながら出発した。

## ある町での再会

村を出てから5日後。一行はパムロという町に到着していた。荷馬車を厩舎に預け、宿も確保したので、カレンは3人を解放して日が落ちるまで自由行動ということにした。ミニックは市場に向かい、ミラとソラは特に目的もなく町をぶらつくことにした。

「なんか、いまいちぱつとしない町ね」

「確かにそうだね。観光地になるような場所でもないし、地味だよね」

そう話しながら歩いていると、大きな建物に人だかりができるていた。2人はなんとなくそこに近づいていった。

「なんでこんなとこに人が集まつてんのかね」

ミラはそう言って首をひねっていたが、ソラはその建物に集まっている人にこれのことを聞きにいった。

「それで、何なの？」

ミラは戻ってきたソラにそう尋ねた。

「ここはこの町の集会所みたいだよ。それで今日は月に一度のバザーをやつてるんだってさ」

「バザーね。面白そうじゃない」

ミラは人をかきわけて奥に進んだ。ソラもなんとかそれについていった。建物の奥までくると、椅子とテーブルが並べられただけの休憩所があり、人はだいぶ少なかつた。ミラとソラは適当な場所に向かいあつて座つて、あたりの様子をじっくりと観察した。

「このバザーは町の人達が自由に店を出してやつてるらしいよ」

「なるほど。どうりでガラクタみたいのがけつこう売つてるわけね

「でも、普通じゃ見つからないような珍しいものもあるんじゃないかな」

「でもこの人じやあね。なんか探そうつて氣にもならない」

ミラはテーブルに置いてあるコップと水差しを取つて、コップに

水を注ぐと、一息に飲み干した。

「あの、ひょっとしてミラさんとソラさんじゃありませんか？」

突然声をかけられ、そつちに顔を向けると、そこには見たことのある少年が立っていた。

「ジョアン、久しぶりだね」

ソラはすぐに気がついた。だがミラはジョアンの顔をしばらくの間見てから、やっと反応した。

「ああ、隊商。またひつたくりにでもあったの」

「いえ、今日はこのバザーに掘り出し物を探しに来たんです」

ジョアンはそう言いながらソラの隣に座った。

「わざわざこのバザーのためにこの町に来たってこと？」

「バザーのためというわけでもないんですが、日程が合ったので滞在日を延ばしたんです。こういった普通の人人が店を出すものは、意外と希少なものが仕入れられたりするので」

「へえ、ソラいい勘してんじゃない」

「どういうことです？」

「いや、さっき同じこと言つてたからさ」

ソラを指差しながら、ミラはコップにもつ一杯水を注いだ。ジョ

アンは感心したようにソラを見た。

「それじゃあお2人とも、僕につきあつてもらえませんか？ きっと面白いと思いますよ」

その頃カレンは、宿の1階の食堂兼酒場のようなところでテーブルにつき、この町の近くを描いた地図を広げていた。環と話した自分の記憶では、この近くにハティスが拠点としていた場所があるはずだった。

しかし、正確な場所はわからず、おぼろげな地形の記憶を元に、地図にいくつかの候補地を書き込んでいた。そうしているうちに新しい客が入ってきた。カレンは顔を上げずに目だけでその客をちらつと見てから、再び地図に目を落とした。

しばらくして、さつきの客がカレンの座っている席に近づいてきた。

「奇遇ですね。またお会いすることになるとは思いませんでした」  
カレンはいきなり顔を上げてそう言つた。近づいてきていたシェイラとエクセンはカレンが気づいていないと思っていたので、少し勢いをそがれた。

「ああ、奇遇だな。あんたはまだ旅の続きなのか？」

「続きというわけではありませんが、旅の途中ですよ」

「そうなの。ちょっとここに座つてもいいかしら？」

シェイラの言葉にカレンはうなずいて、テーブルの上の地図をたたんだ。シェイラとエクセンは椅子に腰を下ろした。  
「で、今回は1人旅なのかい？」

「いえ、違います」

「それじゃタマキも一緒か。どこにいるんだい」

カレンはその問いに少し黙りこみ、眼鏡の位置を直した。

「タマキ様は今回は別行動なので、一緒ではありません。あとの3人は一緒にです」

「そうなのか。それは残念だな」

エクセンはそれだけ言つたが、シェイラはカレンの様子に不審の目を向けた。

「それじゃ、俺達は荷物の整理があるから先に失礼するよ」

エクセンはそう言つて立ち上がつたが、シェイラは座つたまま動こうとしなかつた。

「どうした、何か話でもあるのか？」

「そう、だから先に行つて」

エクセンは特に何も気にしてことなく宿を出て行つた。それを確認したシェイラは、カレンと向き合い、口を開いた。

「これは好奇心で聞くんだけど、何があつたのか教えてもらえないかしら」

カレンはその質問にわずかに肩をすくめた。

「面白いことなどありませんよ。それに、聞いてどうするんですか？」

「どうするってわけでもないけど。知らない仲でもないんだから、できることがあれば協力してもいいと思つてる。この町にはまだあと何日かは滞在予定だしね」

「そうですか。あいにく協力していただけることでもないのですが、タマキ様は今、病気のような状態です」

「それとあなた達だけで旅をしているのにどんな関係があるの？」

「それをなんとかできそうな方は放浪していて、どこにいるかわりにくらい人ですから。それに、一人旅は負担が大きくなりすぎますからね」

「なるほどね。その探してゐる人つていうのは何者なの？」

「かつて大賢者と呼ばれた、ハティスという方です」

「大賢者ハティス」

ショイイラはそうつぶやいたが、特に何も思いつかないようだつた。「知らないのが当然ですよ。人目にふれないようにしていきますから」「ずいぶん変わり者みたいだけど、どんな人なの？」

「一言で言えば、初老で白髪の男性です。真つ白なローブを着てるので、少し目立つかもしれませんね」

「初老で白髪の白いローブを着た男ね。あなたがここにいるということは、この町の近くにいるかもしれないってことなの？」

「その可能性はあります」

「わかった。それじゃあ、そういう人を見かけたら教えるから。しばらくここに泊まるんでしょ」

「そのつもりです。しかし、なぜ協力していただけるんですか？」

「さつきも言つたけど、知らない仲じやないし、それにあなた達との旅はけつこう楽しかつたし、町にいる間は私達はけつこう暇だから、まあそういうこと」

ショイイラはそれだけ言つと立ち上がつた。カレンも立ち上がり右手を差し出した。

「とにかく、協力ありがとうございます」

シニアはその手を握り返してから宿を出て行った。カレンは椅子に座り直して、再び地図を広げた。今度はそこミニックが戻ってきた。ミニックはカレンに気づいて声をかけた。

「今そこで前の隊商の人達と会ったんですけど、一緒にいたんですか？」

「ええ、少し話をしましたよ」

「そうですか、なんか知らないんですけど、護衛のリーダーのシニアさんがずいぶん張り切つてましたよ」

「そうですか。それより、明日からハティス様を探しに行くので、今日のうちに町で見たいところがあれば済ませておくのがいいですよ」

「それはもう済ませてきましたから、僕は一足先にのんびりさせてもらいます」

ミニックは上の部屋に引きこもりに行つた。カレンはそれを見送ると、地図に向かい合つた。

ジョアンと一緒にミラとソラが宿に戻った時には、すでに口は落ちかけていた。カレンは相変わらず1階で座っていたが、すでに地図ではなく、目の前のテーブルには夕食が置かれていた。

「カレン師匠！ 驚いたことに」

「前の隊商がいたんですか」

その一言にミラはがっくりした。

「知つてたんですか」

「ええ、護衛をやつていた2人に会いましたから」

「そうだつたんですか。ジョアン、もう入つてきいいよ」  
ミラが外に声をかけるとソラとジョアンが中に入ってきた。

「久しぶりですね。レナルドさんはお元気ですか？」

「はい、おかげさまで元気になります」

「そうですか。夕食がまだなら、ご一緒にどうですか」

「いえ、僕は違う宿なのでそれはご遠慮します。それじゃミラさんとソラさん、暇があつたらまたご一緒してください」

ジョアンはそう言って頭を下げると宿を出て行つた。ミラとソラはそのままカレンと同じテーブルについた。そうして二人とも、いつの間にかミニックも降りてきていた。

「ミニック、あんたまさか1日中ひきこもつてたの」

「僕が出かけたことは知つてるでしょ。ちょっと早く帰つてきてただけですよ」

そう言いながらミニックは席についた。それを待つていたかのように、3人の食事が運ばれてきた。それにある程度手をつけてから、ミラは口を開いた。

「それで、明日からはどうするんですか？」

「ハティス様がいるかもしない場所はいくつか日星をつけておきましたから、それを1つずつ潰していくつもりですよ」

「でもなんで最初にここに来たんですか？ 師匠はまだエズラの近くにいるかもしないのに」

「私の記憶では、ハティス様は4ヶ月以上同じ場所にいたことはありませんからね。それにエズラの次は大体ここに来ていましたよ」

「へえ、そうだったんですね？」

「そうだったんですかって、あんたは自称弟子なのにそんなことも知らなかつたの」

「僕は弟子入りしてからそんなに経つてないですから、そこまではわかりませんよ」

「まったく、役に立たない」

ミラはそう言いながら肉にフォークを突き刺して口に運んだ。

「でも、そういうことなら大賢者さんも簡単に見つかりそうですね」ソラは2人をとりなすようにそう言つたが、カレンは難しい顔をしていた。

「そう簡単にいつてくれるといいですね」

そこでハティスの話題は終わり、その後は適当な雑談で夕食の時間が過ぎていった。

そして夜、カレンとミラはそれぞれ鎧を外していた。ミラは鎧をベッドの横に置いて、ため息をついた。

「本当にあの大賢者っていう人は見つかるんですかね。それに見つかつたとしても、タマキ師匠を治すことができるんでしょうか？」

「それは正直、わかりませんね。ただ、あの方にそれができなくても、何かヒントになるようなことくらいは知っているでしょう」

ミラはカレンの答えを聞いてから、ベッドに座り込んで腕を組むと考え込むようになつむいた。

「なんか不安ですね」

「それはわかりますが、先のことを考えても仕方がありませんよ。今は目の前のこと集中すべきですね」

「そうですよね。よし！ 明日はがんばりましょう！」

「そうですね」

カレンはわずかに笑つて気合を入れて、ミラに答えたが、すぐにその表情は消え、外していたショートソードを掴み、窓を睨んだ。ミラはそれを見て、わけもわからないまま自分の剣を掴んだ。

「あの」

その言葉はカレンの口に指を当てる仕草で遮られた。カレンは足音を忍ばせ、窓にゆっくりと近づいていった。そして壁に背をつけ慎重に外をうかがっていたが、しばらくすると窓から離れ、ショートソードを自分のベッドに立てかけた。

「あの、何だったんですか？」

ミラは戸惑いながらそう聞いた。

「何か気配がしたと思つたんですね。どうも氣のせいだったようです」

カレンは特に表情を変えることなくそのまま答えて、ベッドに横になつた。

翌朝、一行は1階に集まって食事を済ませると、早速宿を出発した。

「まずはどこから探しに行くんですか？」

ミニックがそう聞くと、カレンは地図を取り出し、昨日つけた印を指差した。

「まずはこの場所からですね」

3人はそれを覗き込んで、ソラが口を開いた。

「どこもそれほど町からは離れてないんですね」

そう言つたソラの頭を、カレン半身になるといきなり押さえつけて下げさせた。次の瞬間、ナイフがカレンの体とソラの頭があつたところを通過していき、背後の家に突き立つた。

「これはなんのつもりですか」

カレンはショートソードの柄に手をかけ、そのナイフを投げたと思われる男を睨みつけた。男はケープを着けた短髪で、奇妙に不自然な笑顔をしていた。

「どういうつもりがって？ そのナイフは飾りじゃないんだぜ、それでわかれよ」

男はそう言つて腰の剣を抜いた。それを見た周囲の人々は一斉に距離をとり、男とカレン達は円状に空いた空間で対峙することになった。

「どうした？ 抜けよ、見世物としちゃなかなか面白いことになるぜ」

ミラがそれに反応して剣を抜こうとしたが、カレンは手を伸ばしてそれを制した。

「あいにく、町中で剣を振り回す趣味はありません。相手をして欲しいというなら、場所を選んではどうですか」

「こっちもあいにくなんだが、場所を選ぶ趣味はないんだよ」「動くな！」

剣を構えようとした男の動きを上からの声が止めた。カレンが声のしたほうを見ると、宿の3階からシェイラが弓を構え、男に狙いをつけていた。

「シェイラさん、下がっていてください」

カレンはそう言つたがシェイラは狙いを外そとはしなかつた。

男はいらついたような表情になり、その方向に剣を向けようとした。

「全員伏せなさい！」

カレンはその場に響きわたる大声を出し、腰のカード入れから一枚のカードを取り出した。

「開放！」

カードはカレンの手を放れシェイラと男の間に飛び、爆発を起こした。集まっていた人々はその爆発に全員地面に伏せた。カレンは一気に男との間合いを詰めながら闇の翼を展開し、その勢いのまま男を掴んで飛び立つた。

「追うよ！」

ミラはそれを見て、ソラとミニックに声をかけて走り出した。シェイラは爆発の影響で何が起きたかわからず、ただ呆然としていた。

カレンは町から十分に離れると、男を放り出してから着地した。そして、眼鏡を外すと、金色の瞳で地面に転がっている男を見据えた。

「いつまでそうして寝ているんです？　あなたが人間でないことにくらい、最初からわかつていますよ」

「なるほどなあ」

男はそう言いながらゆっくり立ち上がった。

「イムトポールを倒したってだけあって、大した力だ」

カレンはその名前に少し表情を変えた。

「あの魔族の知り合いですか。それが私に何の用で？」

「何の用？　何の用か」男は楽しそうに笑った。「いやな、派手に町1つを火の海にでもしながら戦つたら面白いんじゃないかと思つてよ。あの髪お化けを倒した実力があるんなら、たっぷり楽しめるだろ？　俺としちゃそれで十分」

「それは誰の指示なのか、教えてもらえますか」

「そんなことはどうでもいいだろ。おっと、そういうえば自己紹介がまだだつたな、俺のことはサロアとでも呼んでくれ」

そう言つてサロアと名乗つた魔族は剣を構えた。カレンも暗黒の剣を作り出し、それを構えた。

## 炎の魔族

カレンとサロアはお互いに剣を構え、しばらく睨みあつていた。先に動き出したサロアがゆつくりと剣を振り上げると、それは炎に包まれた。それが振り下ろされると炎が剣から伸び、まるで炎の鞭のようにカレンに襲いかかつた。

カレンはそれを横に飛んで避けたが、サロアが腕を動かすと、その炎はすぐにカレンを追つてきた。それも上空に飛び上がってかわしたが、炎もそれを追つてきた。そのまま空中で炎をかわしつづけながら、徐々にサロアとの距離を詰めていった。

「すばしっこいやつだな。それじゃ、こいつはどうだ」

今までの単純に剣を振る動作から、剣で空に円を描く動作に変わった。剣から伸びる炎はおさまったが、空中には次々に剣で描かれた円状の炎が出現した。カレンはそれにかまわず、サロアに向かって急降下していった。

「そうやって直線的にくるのはいいねえ、俺も楽しくなつてくるよ」  
サロアは余裕の笑みを浮かべてから、自分の作り出した円状の炎の1つを切り裂いた。それは人の頭ほどのサイズの火の玉に分裂する大さく広がり、カレンに向かって飛んだ。

カレン軌道を垂直に変えそれを回避すると、地面に激突する寸前でさらに水平に軌道を変えてサロアに向かつた。それに対してサロアはもう1つ、円状の炎を剣で切り裂いた。広がった火の玉がカレンに集中していつたが、今度はカレンはよけようとはせず、暗黒の剣を巨大な闇の塊に変えると、それを一閃した。

衝撃波が火の玉を爆発させ、カレンはその中に突っ込んだ。サロアは残りの円状の炎と共に飛び上がった。次の瞬間にはサロアの立っていた場所は闇の塊でえぐられていた。そこにサロアが2つの円状の炎を切り裂いた火の玉が殺到し、カレンは爆発に包まれた。

爆発が收まるときには闇の塊を振り切った姿勢のカレンが無

傷で立っていた。着地したサロアはそれを見て満足気に笑った。

「そいつの衝撃波で炎と爆発を吹き飛ばしたか。いいねえ、もつと頼むぜ！」

楽しそうに言うサロアをカレンは冷ややかに眺めた。

「どうもあなたの狙いがわかりませんね、私達を殺しに来たのでしよう。本気できたらどうです？」

「俺はそんなことはどうでもいいんだよ。ただ楽しめればいい、戦つてその感覚を味わえればそれでいい」

カレンはため息をついた。

「ただの変態ですか。何か情報でも得られればと思いましたが、これでは期待できませんね」

「いーや、俺のほうは期待した通りだ」

サロアのその一言が合図になり、2人の間に殺氣がみなぎった。サロアは残った円状の炎を全て切り裂き、自分の目の前に100を越える火の玉を作り出した。サロアが剣をカレンに向けると、それは大きく広がりながら動き出し、カレンを全方位から包囲した。

「さて、こいつはどうする？」

そう言つてサロアは剣を炎で包み、それを後ろに引いた。その剣が振るわれると、炎が伸び、さらに空中の火の玉も一斉にカレンに向かつた。だが、カレンはその場から動かず、落ち着いて剣の動きだけを見ていた。

火の玉が炸裂し、炎の鞭がカレンの立つていた場所を薙いだ。しかし、その中からサロアに向かつて氷をまとつたナイフが飛び出してきた。サロアはそれを剣で弾いたが、それを追つてカレンが炎の中から飛び出し、暗黒の剣を振り下ろした。サロアはそれを後ろに飛び退いてかわしながら、炎で包まれた剣を横に薙いだ。

カレンはそれを身をかがめてかわし、飛び退いたサロアに向かつて暗黒の剣を下段から振り上げた。それはサロアをかすめ、わずかにその額を切り裂いた。さらに暗黒の剣が袈裟切りに振り下ろされたが、それはサロアの右手の剣に受け流された。

サロアは左手をカレンに向けて伸ばし、そこから炎が噴出した。

カレンはとっさに上に飛んだが、炎はそれを捉えた。カレンは炎に包まれたように見えたが、そのまま上昇して炎から逃れると無傷だつた。そして、その手にあつた一枚のカードが光になつて消えた。

「そのカードは、町で使つたやつ以外にもあつたのか。おもしろいおもちゃだな」

それからサロアは自分の剣をよく確かめて舌打ちをした。

「こいつは結構気に入つてたんだが、これじゃ使い物になんねえな」そう言つて剣を投げ捨てた。カレンは用心深く、十分に距離をとつた位置に着地して構えた。サロアは左手を右肩に添え、そのまま指先までその手を滑らせた。それと同時に右腕は炎に包まれていき、腕そのものも炎に変わり、3倍ほどの長さになつていった。

「いくぜえ！」

サロアは地面を蹴り、炎となつた右腕を真上から振り下ろした。

カレンはそれを横に避けながら、暗黒の剣でそれを切り上げた。右腕と暗黒の剣は激しくぶつかり、カレンはすぐに暗黒の剣を引いて横に跳んで距離をとつた。サロアはそれを見てにやりと笑つた。

「重いだろ。俺の炎は熱くて重いんだよ！」

今度は右腕を横薙ぎにカレンに向かつて打ちつけていった。カレンはそれを暗黒の剣で受けたが、衝撃で後ろに飛ばされた。サロアはそれを追つて、さらに逆方向から右腕を振るつた。

カレンはそれを上空に飛び上がってかわしたが、炎はすぐに追つてきた。さらに上昇してそれもかわしたが、サロアは左手をカレンに向けた。

「逃がしゃしないぜ！」

その左手から、人間1人を飲み込めそうな火の玉が放たれた。カレンは上昇を止め、それに向かつて一気に急降下した。そしてその火の玉に暗黒の剣を振り下ろした。

火の玉はまっ�たつに割れ、カレンはその間を通してサロアに迫り、再び渾身の力を込めて暗黒の剣を振り下ろした。

だが、カレンの体はサロアの右腕に弾き飛ばされていた。地面に叩きつけられたカレンに向かつて、サロアはさらに左手から無数の小さな火の玉を放つた。カレンは倒れた状態で暗黒の剣を巨大な闇の塊に変化させると、その体勢のまま、なんとかそれを振るつた。火の玉の爆発が終わると、そこには致命傷はないものの、傷ついたカレンが倒れたままの体勢でいた。カレンはなんとか膝をついて立ち上がろうとしたが、サロアはそれにゅっくりと近づき、右腕を振り上げた。

「なかなか楽しかったぜ」

右腕を振り下ろそうとしたサロアの背後から、雷の矢と氷の牙が襲いかかつた。サロアはそれをまともに受けたが、倒れもふらつきもせず、無造作に振り返つた。そこにはハティスが立っていた。

「ちつ、興醒めだな」

そう言つてサロアは右腕を炎から普通の腕に変え、カレンのほうに向き直つた。

「お前との決着は次の機会だ。それじゃあな」

それだけ言つて、サロアは飛び去つていつた。ハティスはそれを確認すると、すぐにカレンに歩み寄つた。

「大丈夫か」

元の瞳に戻つたカレンは自力で立ち上がつた。

「はい、大丈夫です。それよりお話があるのですが」

「わかつた。それより少しじつとしていなさい」

ハティスがカレンに手をかざすと、カレンの傷が治つていつた。そこにミラ達3人が駆けつけてきた。

「カレン師匠、さつきの怪しい男は」

「今回は見逃されたようですが、おそらく近いうちにまた会う」とになるでしょう。その時は決着をつけなければいけません」

厳しい表情のカレンに、ミラ達も顔を引き締めた。ハティスはしばらくその様子を見ていたが、おもむろに口を開いた。

「カレン、私に話があるのだろう。家は近いからそこで話を聞こう

「はい、お願ひします」

カレンはショートソードを收め、歩き出したハティスに続いた。

カレン達はハティスが滞在しているあばらやに到着した。ハティスは先にそのあばらやに入り、大きな敷物を出してきた。

「いや、ここは人をたくさん入れられるようなものではないのでな」誰に言いわけするでもなく、家の前に敷物を広げた。カレン達4人はその上に腰を下ろした。ハティスも同じようにした。  
「さて、それではなぜ私のところに来たのか、それを説明してくれるかね？」

ミラが口を開こうとしたが、カレンの視線に気づいて口を閉じた。  
「要点だけ言いますと、タマキ様が倒れました」

「それは、病気、というわけではないのだね」

「はい。タマキ様の体内で力が乱れているのですが、おそらくその原因は外にあるのではないかと思います」

それを聞いたハティスは大きくため息をついた。

「そうか。そうなつてしまつたか」

カレンはその言葉に少し眉をひそめた。

「こうなることは予想していたのですか？」

「そういうことだ」

ハティスはしばらくの間、目を閉じて考え込むようにしてから口を開いた。

「まずは伝説の英雄の話から始めよう。500年前、当時はまだノーデルシア王国のような強力な国はなく、魔物の脅威も今よりも大きかった。そこに現われたのが、名前もわからない、ただ伝説の英雄として知られる人物だった」

「その英雄は凄まじい魔法で魔物や魔族を倒して平和をもたらし、ノーデルシア王国の基礎を作ったんですよね」

「ミニックの言葉にハティスはうなずいた。

「その通りだ。だが、その英雄は建国の後はいくつかのスペルカー

ドを残し、姿を消したのだ。その理由は不明とされている  
「500年前の話と今回のこと」が関係あるって言われても、どうな  
んだろうね姉さん

ソラは小声でミラにそう言つたが、頭をはたかれた。

「いいから黙つて聞いてなさい」

ハティスはそれに気づいていたようだが、かまわずに続けた。  
「私は人生を捧げて、姿を消した伝説の英雄の足取りを追つてきた。  
そして、その中で伝説の英雄と呼ばれた人物のことが少しづつわか  
つってきたのだ。まずその人物はな、カレン」

ハティスはカレンの名を呼び、その顔をじっと見た。

「おそらく、英雄はお前と同じ力の魂を持つていた。そして、その  
魔力は今の勇者と同等かそれ以上のものだつただろう」

「つまり、伝説の英雄というのは、タマキ様と私の力を併せ持つ存  
在だったということですか？」

カレンの言葉にハティスは重々しくうなずいた。

「集めた伝承によれば、おそらくその通りだろう。それほど強力な  
力を持つていたのだ」

それを聞いてミニーックは腑に落ちない顔をした。

「ちょっと待つてください、それならなんで王国の基礎を作るだけ  
で、王にもならないで姿を消したんですか？」

「そうできない事情があつたはずなのだが、それはわからなかつた。  
しかし、今回のことでの考へていた一つの可能性が現実味を帯びてき  
た」

「その可能性というのは、どういうことでしようか？　それに、そ  
のことがどうタマキ様と関係するのでしょうか？」

「残念だが、今はまだ言えん。確証を得るためにには知の都に行かな  
くてはいかんのだ」

ハティスはそこで言葉を切り、それぞれの顔を見まわした。そし  
て立ち上がろうとした。だが、それはカレンに止められた。

「ハティス様、お話しておきたいことがあります」

「なんだね？」

「まず、タマキ様は私の魂の一部を持つっています。の方を救うためにそうしました。そしてもう一つ、タマキ様と私の記憶は現在、混ざり合っています」

「うむ」

カレンの言葉に、ハティスはそれだけ言つてうつむいた。それからおもむろに顔を上げた。

「それも考えなければならぬことだな。とにかく、今は知の都を目指さなければならん」

「わかりました。では町に戻つて準備をしてから、明日の朝、お迎えに上がります」

カレンとあとの3人は立ち上がり、町に向かつた。

町に戻つた一行はとりあえず宿に集まつた。

「ここから知の都までは、まあ10日といつたことですから、食料の調達も必要ですね」

「また前の隊商と一緒に行くのはどうなんですか？」

ミニックがそう聞いたが、カレンは首を横に振つた。

「私達の出発は明日ですが、隊商はもつすこと滞在するよつので、残念ですがそれは無理ですね」

「そうなんですか。それじゃ、僕達だけか」

「そんなこと言つてないでさつと買出しに行くよ」

ミラがミニックを無理矢理引つ張つていつた。

「それでは私達はそれ以外の準備をしましょうか」

「はい」

残つたカレンとソラは厩舎に向かつた。2人はそこで荷馬車と備品類のチェックを始めた。

一方、ミラとミニックは食料の買出しのために市場に来ていた。

「あなた達」

その途中、後ろから声をかけられ、2人が振り向くと、そこには

シェイラが立っていた。

「今朝のあれは一体なんだつたの？　あなた達もあの変な男もすぐにどこかに行つてしまつたし、よければどういうわけなのか聞かせてもらえない？」

ミラとミーリックは少し顔を見合せた。

「どうします、正直に話すわけにはいきませんよ」

「別に明日出発するんだし、適当にごまかしておけば大丈夫だつて」

そう小声で言つてからミラはシェイラに笑顔で向き直つた。

「あー、いえ、大したことじやなかつたんです。そのなんというか、あれは勘違いだつたんです」

「勘違い？」

「そう、勘違いです。いや、どうもあの男は賞金稼ぎかなんかだつたみたいで、それで勘違いをしてあんなことになつたんですよ。あの後力レン師匠があの男を締め上げて誤解は解いたので何の問題もありません」

「賞金稼ぎ」シェイラはその単語にだけ反応した。「確かにただ者じゃない雰囲気だつたしね」

「そうですそうです、それで今言つたように問題は解決済みですから、大丈夫です」

「まあ、こうしてここに戻つてきてるつていうことは、少なくとも問題は解決したのね。あの男が賞金稼ぎなんでものだとは思えないけど」

「ははは」

いぶかしげなシェイラの様子に、ミラはなんとなく笑つてごまかした。ミーリックもなんとなく同じように笑つてごまかした。シェイラは2人の様子を見て、苦笑いを浮かべた。

「話したくないことがあるなら、無理にごまかしたりしなくてもいいから。それにカレンからあなた達の目的も聞いてるしね」

「え？　聞いてたんですか」

「大賢者ハティスっていう人を探してゐるんでしょ。残念ながら力に

はなれなかつたけどね

「いえ、それならもう大丈夫です」

「見つかつたの？」

「はい、それで明日にまーじを発つので、食料の買出しに来てたところなんです」

「そうだったの。今回は一緒にいけないけど、道中気をつけてね」  
そう言って、シーラは手を振つてその場を立ち去つた。ミラは頭をかきながら軽く息を吐いた。ミニックもため息をついていた。

「なんか、ぐつと疲れましたね」

「まあ、納得はしてくれたみたいだし、これでいいでしょ。魔族だなんだなんて言つたら、話がややこしくなりすぎるから」「ですね。じゃあ、早いところ買出しを済ませちゃいましょう」「そうそう。わざわざおまかせて、明日からの旅に備えてたつぱり休んでおかないとね」

## 知の都再び

出発してから9日。急ぎ氣味で進んでいたので、一行は予定していたよりも早く知の都に到着した。まずはカレンが一人で城に向かつた。

待つている間ハティスは一言もしゃべらず、公園のベンチに腰かけ、一步も動かなかつた。あの3人は適当に町を見てまわつていた。大した時間はかからず、カレンはすぐに戻ってきた。

「入城の許可が出ました。他の3人はどこに」

「うむ、近くにいるはずだが」

「探してきますので少々おまちください」

カレンは3人をすぐにつかまえ、5人そろつて城の前まで来た。門をぐぐり、受付で武器を預けると、カレンが先頭に立ち、まっすぐ館長のエリットがいる部屋を目指した。目的の部屋の前に到着し、カレンがドアをノックした。

「どうぞ」

中からエリットの声がして、カレンはドアをゆっくりと開けた。エリットは自分の座る椅子をドアのほうに向け、一行を迎えた。

「ようこそ、みなさん。特にハティス、あなたとはずいぶん久しぶりな気がしますね」

エリットは穏やかな微笑を浮かべた。ハティスはそれを正面から受け止め、若干険しい顔をしていた。

「さあ、椅子は用意しておいたから座つてください」

5人はエリットを囲むように置かれている椅子に腰を下ろした。エリットはそれを見まわし、カレンに視線を止めた。

「タマキ様はどうされたの？」

「今は病、のよななもので動くことができません。私達はそれを治す方法を探しているのです」

「そう。それは大変でしたね。ハティスが一緒なのはそういう事情

でしたか」

「そういうことだ。だから、あの部屋への入室を許可してもらいたいのだ」

「もちろんそれはかまいませんが、私から一つ条件があります。あなたに本を書いてもらいます。いえ、もちろんあなたの名前で書かなくてもいいのです。ただ、その知識をしつかりした形として残してもらいたいのですよ」

ハティスは滌い顔をしてうなずいた。

「わかった、本などいくらでも書こう」

その返答にエリットは立ち上がり、一つの古びた本を引き出しの中から取り出した。

「さあ、それではこの城で一番重要な場所にこ案内しましょ」

エリットを先頭に、一行は城の地下に降りていった。両脇に警備の兵士が立っている頑丈そうな扉の前まで到着した。

「鍵を」

エリットがそれだけ言つと、警備の兵士はそれぞれ鍵を取り出した。そしてその鍵を扉の鍵穴に差し込んで同時に回した。エリットは扉の中心にある小さな扉を開けると、その中にあるくぼみに持ってきた古びた本を差し込み、それを時計回りに回した。

「さあ、入りましょう」

兵士が重そうに扉を開け、一行がその中に入ると、重い音を立て扉は閉まった。中は薄暗かつたが、エリットが扉の横に行つて何かをするとき、灯がともり、室内の様子がよく見えるようになつた。

「これは、すごい」

ソラが室内の様子に感嘆の声を上げた。通常の閲覧室よりも重厚な本棚がところ狭しと立ち並び、入り口近くの8人程度が使えるテーブル以外は、密林のような感じだった。

「ここにある本はどれも貴重なものばかりです。みなさん、これを

エリットは薄手の手袋を取り出して全員に配つた。

「本は大切に扱ってくださいね」

ミラは用心深く本には近づこうとはせず、椅子に座つてあたりを見回していたが、ソラとミニックはすぐに本棚に近づいていった。カレンはハティスのことを見ていた。ハティスはゆっくり歩き出すと、本棚の間を通り、部屋の奥に進んでいった。

ハティスは探すべきものがどこにあるかわかつてゐるようだつたので、カレンはその後は追わずに、椅子に座り、同じように座つているエリットを見た。

「ハティスはここに入つたことがありますから、自分が探しているものがどこにあるかはわかつてゐるでしょう。あなたが知りたいことをきつと話してくれますよ」

エリットはカレンに向かつて微笑んだ。カレンはうなずいて待つことにした。

しばらくして、ハティスは抱きかかえるほどのサイズと、片手で持てる小さな2冊の本を持つて戻ってきた。それを机に置くと、ゆっくりと椅子に座つた。それを見たミラとソラは、本を見るのを中断してテーブルに着いた。

「ハティス様、その本は」

「これはな、大規模かつ特殊な結界のことを記した本と、城の詳細な設計図が集められた本だ」

「城の詳細な設計図つて、そんなものまであるんですか。もし流出でもしたら一大事でしょうね。でも結界というのは、そんなすごいものなのですか？」

ミニックが驚きながらもそう言つた。ハティスは落ち着いた仕草でその質問に答えた。

「大規模な結界といふのは町をまるごと一つ封鎖することも可能なのだ。使い方によつては極めて危険なものになる。もつともそれだけのものが使える者など、ほとんどいはずだが」

「そなんですか、それで、その2つがどう関係するんですか？」

「まずはこれだ」

ハティスは大きなサイズの本を開き、それを全員に見えるようにした。ミラはそれを覗き込んで首をひねった。

「これはどこの中城なんですか？」

「ノーデルシア王国の首都の城だ。もともと、この設計図は数10年前のものだから、今では細部はだいぶ違うはずだろ？だが、それは重要ではない。本当に重要なのはこの城の基礎にあたる部分と、ここだ」

ハティスが指差したところは地下にあり、設計図では空白になっていた。

「この図には何も描かれていないが、私の推測が正しければこの場所にこそ、勇者が倒れた原因があるはずなのだ」

一同の先を促すような視線を受けて、ハティスはもう一冊の小さな本を開き、自分の懐から紙とペンを取り出した。そして、その紙に本から何かを書き写し始めた。書き終わると、その紙を設計図の隣に置いた。

「この紙に描いたものと、設計図を重ねて見るとわかるのだが、この城の基礎というのは、ある目的を持って作られている」「結界ですか？」

カレンはすぐに気がついた。

「その通りだ。そしてこの結界の効果は封印。この空白の場所にあるものを封じ込めているのだよ」

「城をまる」と使った封印結界ですか。ハティス、あなたはこれがなんのためかも、予想がついているのではないですか？」

「それはここにある書物だけではわからなかつた。だが、各地に残つてゐる伝承をつなぎ合わせると、私には一つの可能性が考えられるようになつてきた」「これでこそし間を置いた」「これだけの結界を考え、実行できたものは伝説の英雄くらいしかいないはずだ。おそらくこの城の設計をしたのはその英雄、そして、それを使って封印されているのも、その英雄だと考へていい」「なぜでしょうか？」

そう聞いたカレンの顔をハティスはじつと見た。

「カレン、伝説の英雄はお前と同じ力を持つていたはずだと言つたな。つまり、それは破滅と創造という両面を持つている。もし、そのうちの破滅の力が大きくなりすぎたらどうなる？」

「おそらく私の体は耐えられない可能性が高いでしょう。あるいは魔族のようになってしまつか」

「そうだ。だが、もし大きくなつた破滅の力に耐えるだけの体と魔力を持つていたらどうなる？」

「体が耐えられたとしても、それはもはや人間とは呼べないものになつてゐるでしょうね。魔族よりも、もっと純粹な破滅の力を持った存在」

「そう、魔族は人間と悪魔の中間のよつた存在だ。それを超える、つまり悪魔がこの現世に出現することになる。通常ならば召喚には器を必要とし、それに縛られる存在のはずのものが、自由を得て生まれるのだ」ハティスは大きくため息をついた。「理由はわからないのだが、おそらく英雄は自分がそうなりつつあるのを知り、そのため自らを封印したのだろう」

部屋に沈黙が訪れた。その中で一番最初に立ち直つたのはミラだった。

「でも、なんでそのことがタマキ師匠に関係あるんですか？」

「たとえ強力な結界の中でも肉体は500年もあれば滅びるだろう。だが、魂は別だ。何らかの理由で結界が少しでも弱まれば、すでに悪魔の核とも言えるものになつてしまつてゐる可能性のあるそれは、新しい肉体を求めるだろう」

「そして、それが伝説の英雄に匹敵する力を持つタマキ様の体に影響を与えていけるわけですか」

カレンの口調は落ち着いていたが、テーブルの上に置かれた手は強く握り締められていた。

## 都への襲撃

夜、カレン達はそれぞれの部屋で「」していた。カレンが窓から外を見ていると、ドアをノックする音が聞こえた。

「//アですけど、少しいいですか？」

「どうぞ、開いてますよ」

//アはざことなく遠慮がちに部屋に入ってきた。カレンは自分はベッドの上に座つて、//ラには椅子を勧めた。

「座つてください。何の話ですか？」

「はい、では遠慮なく」そう言って椅子に座つた。「あの、これらのことなんですけど、やっぱりタマキ師匠のところに戻るんですね？」

「そうですね。あの話が本当だとするなら、やつあるしかありません。なにが出来るかは、わかりませんが」

「でも、例の結界つていつのを強化するとか、できるんじやないですか？」

「伝説の英雄が施した結界です。私達がそれに手を出せるのがどうか、そうできたところで、意味のあることができるのかどうか、わかりませんね」

そう言ってカレンは薄く笑つた。//アはざつう顔をすればいいのかわからぬようだつた。

「私達でなんとかできるんでしょうか？」

「なんとかするしかありませんね。今はとにかく、一刻も早くタマキ様の側に戻ることを考えましょ」

カレンは立ち上がり、窓のところに歩いていった。そこから外を見ると、たいまつを持った兵士が走りまわっているのが見えた。

「どうも妙な雰囲気ですね」

そう言ってカレンはドアを開け、外に出た。//ラもその後についでいた。カレンは走っている兵士を無理矢理引き止めた。

「一体、何の騒ぎですか？」

「見張りから魔物の姿を見たという報告があつたので、確認をしているところです。離れた場所に少數といつゝとなので、心配はありません」

そう言つて兵士は立ち去つていつた。ミラは安心したような表情を浮かべた。

「大したことじゃないみたいですね」

「そうだといいんですが、気になりますね。前の町の魔族の件もあります」

「武器を確保しておいたほうがいいんでしょつか」

「そうしておいたほうがいいでしょうね、ソラとミニックも呼んで来て下さい。私はエリット様に武器の件の許可を貰つてきます」

「わかりました！」

ミラは駆け出し、カレンは早足でエリットの部屋に向かつた。それから数10分後、4人はそれぞれの武器を手に、カレンの部屋に集まっていた。

「これからどうするんですか？」

ミニックがそう聞くと、残りの2人もカレンに注目した。

「私は外で警備に参加します。あなた達は武器だけは手元に置いておいて、今日は休んでおきなさい」

「でも」

反論しようとしたミニックをミラが止めた。

「これからのことを考えたら休めるうちに休んでおいたほうがいいつて」

ミニックは多少不満があるようだつたが、納得はした様子で立ち上がつた。

「それじゃあ、僕は先に休ませてもらいます」

ミラとソラもミニックに続いて部屋から出て行つた。

その後、カレンは見張り塔に立ち、夜の町を見渡していた。今までのところ特に変わつた様子はなかつた。

しかし、そこに突然上から熱風が吹きつけた。カレンが上を見上げると、そこには一つの人影が浮かんでいた。

「なんの用でしょ、うか」

カレンはショートソードに手をかけ、上空に浮かぶ人影、サロアを睨みつけた。

「あんたとまた遊ぼうと思つてな。おつと、今じゃなくてちょっと先だ。今度は邪魔が入らないようにお膳立てはしつかりしてある」「何もしなくても、私は逃げはしませんよ」

「邪魔が入らないようにしたいと言つたんだ。まあ、明日になればわかる」

それだけ言つとサロアは飛び去つた。

結局それ以上のこととは起ららず、夜が明けた。それは穏やかなものではなく、朝日とともに魔物の影が町に向かつて動き出していた。夜のうちにほとんど姿が見えず、湧いて出たような魔物達に対して、ヘルウドゥネス共和国の軍勢は慌しく出陣の準備を進めていた。その中でカレンはエリットのもとに急いでいた。

エリットは自らの部屋の前で、軍の首脳を集めていた。カレンはそれが終わるまで待ち、声をかけた。

「エリット様、どうされるのでしょうか」

エリットは穏やかな表情をカレンに向けた。

「もちろん魔物は迎え撃ちます。城にも町にも近づけさせはしません」

「そのことなのですが、この襲撃を主導しているのは1人の魔族だと思われます。そしてその狙いは、私です」

「それで、あなたはどうするつもりなのですか」

「町を守り、魔族を討ちます」

その言葉にエリットはうなずいた。

「では、司令にあなたのことは伝えておきましょ。よろしく頼みますよ」

「本当にそれでいいのか」

その声にカレンが振り返ると、険しい顔をしたハティスが立っていた。

「今は一刻も早くノーデルシア王国に戻るべきではないのか」「タマキ様ならばここで戦うでしょう。それに、ここまでやるからには、あの魔族が私を見逃すとも思えません」

カレンはそれだけ言うとエリットに向き直り、一礼をした。

「行つてまいります」

その場を立ち去り、城の入り口まで来ると、それを待ち構えていた3人が行く手を塞いだ。

「今度は私達も戦いますよ」

ミラを先頭に、ソラとミニックも気合の入った表情をしていた。

カレンは3人の顔を見まわしてからうなずいた。

「もちろんそうしてもらいますよ、ただし、魔族と戦うのは私だけです」

「なぜですか？ 私達だって強くなっています」

「大丈夫」カレンは笑顔を見せた。「私にも切り札の一つくらいはあります」

ミラ達はそれに何も言えず、4人は最前線、町の外れに向かった。カレンはすぐに軍を統括する司令官のもとに向かつた。

「あなたがカレン殿ですか、エリット様から話は聞いています」

「はい。早速ですが、どのように戦うのでしょうか？」

「まだ相手の全容がわかりません。しばらくの間はここで防御を固めて守りに徹します」

「そうですか、では私は敵の様子を探りましょ。町のこととはよろしくお願ひします」それからカレンは後ろの3人のほうを向いた。

「この3人はそれぞれ素晴らしい力を持つています。魔物達と戦う上で必ず大きな力になりますので、軍に加えてもらいたいのですが」「ノーデルシア王国の戦士たるあなたがそう言つのであれば、間違いないのでしきう。ありがたく、力を貸していただきます」

3人は軍に加わり、カレンは単独で魔物の中に入りサロアを探すこととした。だが、サロアは見つからず、魔物達の散発的な襲撃を防ぎ攻勢にされることもあったが、魔物を完全に打ち破ることはできず、容赦なく時間は経過していった。

そして、魔物が現われて7日。すでに多くを倒しているにも関わらず、次々に湧いてくる魔物達に、町を守る兵士達にも疲労の色が濃くなつてきていた。

「一体、あの魔物達はどれだけいるんでしょうが。これじゃきりがないません」

ソラは焚き火を眺めながら、ため息をついた。

「おそらく、前の町の魔族、サロアがどこかに隠れてこの魔物達を呼びだしているのでしょうか。ですが、この7日ずっと探しても、姿はまったく見当たりません」

「どうしてですか？ カレン師匠のことを狙っているのなら、すぐに姿を現してもいいじゃありませんか」

ミラは不思議そうに言つたが、それにはミニックが首を横に振つて答えた。

「たぶん僕達が疲れるのを待つてているんですよ。そうすればカレンさんのこと助けようなんて余力はなくなつて、1対1で戦えるでしょう」

「それもあるかもしません」カレンは脣間は魔物が満ちていた場所に顔を向けた。「ただ、もしタマキ様が倒れたことがハティス様のおっしゃった通りの理由ならば、裏で魔族が動いている可能性も十分にあります」

「じゃあ、真実、かどうかはまだわかりませんけど、それを知つている私達をここに足止めしておくのが目的かもしれないんですか」「可能性はありますね。まあ一番大きな理由はミニックの言つ通りでしようから、近いうちに決着はつけられます」

カレンは険しい顔で夜空を見上げた。

## 激突

翌日、今までよりもずっと多くの魔物が姿を現し始めた。  
「この様子では、今日が山場のようですね」カレンはそう言いながら眼鏡を外した。「私は決着をつけに行きます。ここは頼みましたよ」

「まかせといてください！」

ミラは大きな声で返事をした。

「でも、例の魔族がどこにいるんでしょうが」

ソラは不安そうに疑問を口にした。カレンは魔物達から田を離さず、それに答えた。

「あれだけの数です、一気に攻勢に出てくるつもりでしょう。おそらく、あの魔族は後ろでそれを見ていますね」

「そうだとすると、あの中を突破していくんですか？ カレン師匠ならあんなもの上から飛んで行けるんじゃありませんか？」

「私の力はあまり見せびらかすものではありません。それに、魔物を放つておくわけにもいきません。正面から突破して、出来る限り倒していきますよ」

「いや、まずは僕達が道を作りますよ」ミーリックは静かに言った。  
「あれだけの数です、ある程度中に入つていけば、ここからは見えません。そうすればカレンさんも思う存分力を使えるでしょう。それが一番早く、力を消耗することもなく、魔族のところにたどりつく方法だと思います」

「それはいい考えだと思うよ。カレン師匠、それでいきましょう」

ソラはそう言つてカレンを見た。

「わかりました。3人とも、頼みましたよ」

カレンはその計画を話すため、司令官のいる場所に向かつた。

そして1時間後、魔物達は町に向かつて動き出した。カレン達4人は、展開する軍隊の前に立っていた。

「さて、それじゃあ僕の魔法でもおみまいしてやろうかな」「ミニーック、ちょっと待つた。戦いは長引くかもしれないんだから、

ちゃんと魔力は残しどきなさいよ」

「わかつてますよミラ先輩。ソラ、君と一緒にやつたほうがよさそうだよ」

「そうだね。準備はいいかい」

「もちろん。すぐに始めようか」

ミニーックは右手を前方に差し出した。

「ファイアウオール！」

声と共に右手を地面に叩きつけると、そこから炎の壁がミニーックの前に出現した。ソラは杖を地面に突き立てた。

「風よ、炎をまとい魔物達を貫け！」

渦をまいた風が炎の壁にぶつかり、それをまとって魔物達に向かっていった。魔物達にまでその炎の風が到達すると、その風の進行方向にいる魔物は次々に炎に飲み込まれていき、綺麗に直線の空間を作つていった。

「よし！ 行きましょう！」

ミラはカレンを先導するようにして、その空間に向かつて走った。空間を塞ごうと動く魔物を剣で切りつけ、カレンの進む道を確保していった。

「ここまでで十分です、あなたは戻りなさい」

ある程度進み、すでに入ってきた空間が塞がれてからカレンはミラに並んでそう言った。ミラはつなづくと、方向転換をして来た道を戻り始めた。

「邪魔だ邪魔だ邪魔だあ！」

剣を振り回し、叫びながらミラは走った。その横を炎の風が通り過ぎた。

「姉さん！ こつちだ！」

ミラはわずかに走る方向を変え、その新しく作られた道を走った。魔物の中からもう少しで抜けられそうなところまで來たが、その前

を2体の魔物が左右から塞いだ。

「お前らも、邪魔だあ！」

ミラの剣がひとりわ強い輝きを放ち、その魔物達はあつさりと切り捨てられた。ミラは元いた位置に戻り、さらにソラとミーツクと一緒に軍隊が展開している位置まで下がつた。

「カレン師匠、必ず戻つてきてくださいよ」

ミラがそういうと同時に魔物達の中で何かが起こり、大量の魔物が盛大に吹っ飛んだ。それを合図とするように、ゆっくりと迫つていた魔物達は、一気にスピードを上げて突進してきた。

軍隊と魔物達は激突し、激しい戦いが始まった。しばらくの間、一進一退の攻防が続いたが、突然魔物達が崩れ始めた。

「あれは！あの軍はなんだ！」

誰かがそう叫び、ミラがその方向を見ると、魔物達の横から数100の軍勢が突撃しているのが見えた。

「我らはノーデルシア王国軍だ！王の命により助勢に参上した！」

大きな声で叫んだ先頭の騎士は全身を重厚な鎧で包み、大剣を振るうバーンズだった。魔物達は次々とその大剣の前に散つていった。

「増援だ！一気に押し返すぞ！」

司令官はそう叫び、兵士達もそれに答えるように雄叫びを上げ、魔物達を押し返し始めた。

カレンは金色の瞳を光らせ、魔物達を一気に突破していた。そして、人も魔物も見当たらぬ、町からだいぶ離れたひらけた場所まで到達してから、上空を見上げた。

「そろそろ姿を現してはどうですか？ここならば、邪魔も入らず、思う存分戦えますよ」

カレンの声に反応するように上空に闇が出現し、その中からサロアが姿を現した。

「気づいてたのかよ。それならもつと早く声をかけて欲しいもんだぜ」

「氣を使って差し上げたんですよ。今度はしっかりと決着がつけられるように」

暗黒の剣を構え、カレンはサロアの姿をじっと見た。

「お熱い視線をありがとうよ。それじゃ、始めようか」

サロアはそのままの勢いで、サロアを斬ろうとした。その軌道から数発の火の玉が飛んだ。カレンは地面を蹴って飛び、それを暗黒の剣で斬りながらサロアに迫り、真っ向から暗黒の剣を叩きつけた。

サロアはそれを地面に急降下してかわしたが、カレンもすぐにその後を追つた。カレンはそのままの勢いで、サロアを斬ろうとしたが、そこに炎の右腕が横殴りに襲ってきた。なんとかそれを暗黒の剣で受けたが、カレンの体は衝撃で横に吹き飛ばされた。そのまま地面に激突しそうになつたが、体勢を立て直した着地した。

「いいねえ。この間より気合が入つてるぞ。でもなあ、それじゃまだ俺には勝てねえぞ」

「そうでしょうね。しかし心配なく、あなたを片付ける方法くらい考えてありますから」

サロアは本当に楽しそうに笑った。

「なら、それをさつさと見せてもらおつか！」

サロアは左手をカレンに向かってかざし、そこから炎を噴き出させた。カレンは暗黒の剣を闇の塊に変化させ、それを振るつた。衝撃波で炎の軌道が歪み、その小さな隙間をかいぐぐつてカレンは突進した。

サロアは右腕を振り下ろしたが、それは再び変化した暗黒の剣に止められた。カレンはそれを跳ね上げると同時に、サロアの腹に思い切り蹴りを入れた。

「ぐうがあつ！」

うめき声を上げてサロアは吹っ飛び、そのまま地面を転がり、うつぶせに止まつた。カレンはそれに向かって闇をまとわせたナイフを投げつけた。だが、倒れていたサロアはそれを左手でしつかりと

掴み、ゆっくりと立ち上がった。

「今のはけつこう効いたぜ。いよいよ俺も本気を出さないとな」  
サロアは両手を広げた。炎となっていた右手が一度元に戻り、そ  
の全身から爆発的に炎が噴き出した。それが収まるごとに、その体の全  
てを炎としたサロアが立っていた。

「こいつが俺の本気だ。あんたの本気も見せてもらおうか」「  
いいでしょ」

カレンは構えていた暗黒の剣を下げる。目を開じた。

「タマキ様、私に力を」

そうつぶやき、鎧の中にしまっていたアミュレットを取り出し、  
それを握り締めた。

まず闇の翼の右側の片方が消し飛び、そこに闇の翼と同じ形の、  
光でできた翼が現われた。暗黒の剣は、その刀身の半分を光が覆つ  
ていき、片面が闇、片面が光の剣となつた。

そして、カレンの開かれた右目は白銀に輝き、左目は黒く、飲み  
込まれそうな闇の色になっていた。

「決着を、つけましょ」

カレンは闇と光の剣を構えた。

## 炎と灰

まず動いたのは炎の塊となつたサロアだつた。体ごとぶつかつてきたが、カレンはそれを素早く飛び越え、背後にまわつた。サロアの背中に向かつて剣が振るわれると、直接剣が届かない距離にも関わらず、その炎の体の一部が切り裂かれた。

サロアはそれにはかまわず、振り向きざまに口があつた部分から炎を噴き出した。カレンはそれを後方に素早く下がつてかわすと、上空に飛び上がつた。サロアもそれを追つて飛び上がつたが、上昇するカレンとの距離は縮まらなかつた。

サロアは火の玉を数発放つたが、カレンはそれを大きく弧を描くように飛んでかわすと、そのままサロアの後方から突っ込んでいつた。サロアは振り返り左手から炎を噴出させたが、カレンはそれを剣の一振りで散らせ、サロアとすれちがいざまに剣を横薙ぎにした。だが、それはサロアの急降下でかわされた。そのままサロアは勢いよく着地し、空中に静止したカレンと対峙した。

「なるほど、言うだけのことはあるな。今までとはレベルが違う」「それがわかってるのなら、今すぐ消えて、2度と姿を現さないでもらいたいですね」

「決着つける気満々の奴がよく言つ」

サロアは両手を広げ、その手を開いた。それと同時にそこから無数の火の粉が飛び、それは人の頭ほどの火の玉になつてサロアの周囲に浮かんだ。

「だが、勝つのは俺のほうだぜ！」

その声を合図に、火の玉は一斉に動き出した。だが、カレンは静止したままだつた。そこに火の玉が飛び、次々に爆発していった。だが、その中からカレンは無傷で飛び出し、急降下しながら剣を真上から振り下ろした。サロアはそれを飛び退いて避けたが、その立っていた地面は大きくえぐれた。

一度は飛び退いたサロアだつたが、すぐに地面を蹴つてカレンに向かつて飛んだ。右腕を斜め上から振り下ろしたが、それはカレンの剣に受け止められた。そのままの体勢で力比べが始まつた。

力は均衡し、至近距離での睨みあいが続いた。その間もサロアの炎はカレンの体をじりじりと焼いていつたが、それでもカレンは顔色を変えずに、徐々にサロアを押し込んでいった。

それに耐えられなくなつたサロアは後ろに下がり、カレンの剣を逸らそうとした。だが、カレンは素早く剣を一度引いて、踏み込んだ。

「ガアアアアア！」

下から振り上げられた剣がサロアの炎の左腕を切つていた。切り落とされた左腕は落ちた場所で燃え尽きたが、サロアはなんとか上空に逃れた。そして、切り落とされたはずの左腕は徐々に再生していつた。もちろん、カレンはそれを待たなかつた。

直線的に突進するのではなく、サロアよりも高い位置まで一気に上昇すると、そこからナイフを投げ、急降下した。サロアはナイフはかわしたが、カレンの剣を完全にかわすことはできずに、右肩をその斬撃がかすめた。

カレンはそのままの勢いで着地すると、すぐに再び飛び上がり、今度は下からサロアに迫つた。今度はかわそとせず、サロアは足からカレンに向かつて突つ込んでいつた。カレンはそれを急旋回して避けた。サロアはそのまま着地し、カレンは少し離れた場所に下りた。

サロアは左腕を完全に再生させ、それをカレンに向けた。

「貴様は！」

大地を揺るがすような声と共に、その左腕がよりいつそう激しく燃え上がつた。

「焼き尽くしてやる！」

サロアの2倍以上の大きさの炎の渦がカレンに向かつて伸びた。

カレンはその場から動かず、剣を振りかぶり、その炎の渦に向かつ

てそれを振り下ろした。炎と剣の衝突で衝撃波が広がった。

カレンは炎の渦を食い止めてはいたが、少しづつ後ろに押され始めた。そこにサロアがさらに力を込めた勢いが伝わり、体勢は崩さなかつたが、さらに押された。

しかし、そこでカレンの右目がさらに輝きを増し、左目は闇の深さを増すと、それに反応するように、その手に持つ剣が光と闇を大きくしていった。

「ハアッ！」

気合を入れて剣を振り切ると、炎の渦は散った。だが、カレンの視線の先にはサロアの姿はなかつた。すぐに上空を見ると、そこには自分の体の4倍以上はある火の玉を作り出したサロアがいた。

「よけたらこのあたりは火の海だぜ、よけるなよ！」

巨大な火の玉が放たれた。カレンは剣を構えると、少しの迷いもなくそれに飛び込んでいった。カレンは瞬時に火の玉を貫き、勢いにまかせてそのままサロアの胸に剣を突き立て、切り裂きながら交錯した。

サロアは切られた場所を手で押さえながら落ちていった。カレンはそれは追わず、火の玉の着弾地点に飛びぶと、勢いを失つたそれを剣で弾き返した。火の玉は見事に跳ね返され、上空で凄まじい爆発を起こした。

そこにサロアが飛び込んできたが、カレンは落ち着いてそれを横にかわすと同時に、その足に向かつて剣を振つた。

「ウゴオガアア！」

サロアの右足は切断され、バランスを崩して勢いよく地面に突っ込んで転がつた。カレンはそれを追つたが、サロアは転がりながらも両手から滅茶苦茶に炎を噴射しながら上空に逃れた。カレンは炎をかわして、距離をとつた。

「クソが！ クソが！ このクソがああああああああ！」

サロアはそう叫ぶと、左足を再生させ、その炎の体の全てをいつそう燃え上がらせた。

「俺が負けるわけはない！ 負けるわけはないいいいい！」

巨大な炎の塊となつたサロアは火の玉を撒き散らしながら、カレンに向かつて突進した。カレンはそれを横に跳んで避けたが、そこにも火の玉が飛来した。それを剣で切り払いながらカレンは走つた。だが、すぐにサロアが後ろから追いついてきた。カレンは上空に飛び上がりそれをかわしたが、サロアはすぐにターンして、今度は正面から迫つた。カレンはそれに剣を振り下ろしたが、体ごと弾かれて地面に叩きつけられた。

カレンは地面に片手をついて体を起こし、上空のサロアを見据えた。

「止めだああああああああ！」

そこにサロアが押しつぶそうともするように急降下してきた。カレンは後ろに飛び退いてそれをかわそとしたが、サロアは軌道を変えてそれを追い、カレンは炎に飲み込まれそうになつた。

しかし、次の瞬間、稻妻がサロアの体を撃ち抜いた。ショックでその勢いが殺され、カレンとの距離が開いた。カレンは飛び退いた位置から地面を蹴り、体ごとぶつかるようにして、剣をその胸元に深々と突き刺した。

「消えろおおおおおお！」

カレンの咆哮に反応して、剣は強く光りだし、サロアの体をさらに入れぐつた。

「馬鹿なああああああああああああああああ！」

サロアは悲痛な雄叫びを上げながら、なんとかその剣を両手でつかんだ。

「町も、貴様ら人間どもも道連れだあああああ！」

凄まじい勢いで飛び上がつた。その向かう先は知の都。カレンはなんとか剣に力を込めてそれを落とそうとしたが、サロアの最後の力はそれを許さなかつた。

そして、魔物達と激闘を繰り広げている最前線が見えてきた。そこで気が抜けたのか、一瞬サロアの力がゆるんだ。カレンはそのチ

ヤンスを逃さず、力づくで軌道を変えた。サロアは抵抗しようとしたが、すでに手遅れで、そのまま2人は最前線から離れた地面に激突した。

投げ出されたカレンは、なんとか膝をついて顔を上げた。すでに瞳は元に戻り、体にもいくつもの火傷や傷を負っていた。カレンの視線の先のサロアは、炎ではなく、ぼろぼろな状態で普通の体に戻っていた。それでもサロアはゆっくりと立ち上がった。

「なめたこと、しゃがって」

そうつぶやきながらカレンに向かつて1歩ずつ、ひどくゆっくりと足を進めた。

「今、止めを」

そこまで言つたが、その場に崩れ落ちた。その体は末端から灰になり、風に飛ばされていった。カレンはその光景を見届けてから立ち上がりわたしたが、そうすることはできず、その場に倒れた。

## 王国への帰還

カレンはほんやりと田を覚ました。どうやら馬車の中に寝かされているというのはわかつた。体を起こそうとしたが、背中に痛みが走り、中途半端なところで止まってしまった。

「よかったです、目が覚めたんですね」

嬉しそうなミラの声がして、カレンの胸中はその手で支えられた。カレンはそれに助けられて体を起こした。

「あれから町はどうなりました」

「ばっちり守りぬきました。バーンズさん達が応援に駆けつけてくれたので楽勝でしたよ。それにカレン師匠が魔族を倒してくれたんですね、あれ以上魔物が湧いてくることもありませんでした」

「それではこの馬車は」

「バーンズさん達が乗ってきたものです。今はノーデルシア王国に向かっています」

「そうですか」

「そう言つてカレンは田を閉じた。

「時間は、どれくらい経つていますか」

「あれから2日です」

「やはり、あればすこし無理があつたようですね」

カレンは頭に手を当てながらそつそつぶやくと、座りなおして馬車の中を見まわした。装備一式は綺麗にまとめられていた。

「とりあえず私の装備を取つてもらえますか」

「はい」

ミラが持つてきた鎧を、座つたまま器用に身に着け、ベルトのナイフやショートソード、ダガーをそれぞれ自分の前に広げて、確認してから装着していく。全てを身に着けると、カレンは少し背筋を伸ばした。

「ところで、ハティス様は一緒ですか」

「ええ、一緒です。ずっと図書館にこもつたおかげで、例の結界に関して何か見つけたみたいでけど」

「それは話を聞かせていただかなくてはいけませんね。今日の夜にでも聞きにいきましょうか」

「でも、体は大丈夫なんですか？」

「まだ戦えるほどではありませんが、大丈夫ですよ」

「わかりました。それじゃ、私はみんなにカレン師匠の目が覚めることを知らせます」

ミラはそう言って勢いよく馬車から飛び出して行った。カレンは足を崩して楽な姿勢をとった。

「失礼します」

そのまましばらくしてから、バーンズが馬車に入ってきた。バーンズはカレンの様子をざっと見てから、安心したような表情を浮かべて、馬車の中に腰を下ろした。

「もう鎧を身につけていられるほど回復したんですか」

「私の鎧は軽いものですからね。それよりも、なぜバーンズ様達が増援に来たのでしょうか？ 報せを受けてから出発したのでは、これほど早く到着することは出来なかつたと思いますが」

「それは、エバンス様と葉子様が精霊から知の都の危機を知らされたのです」

「精霊からですか。ソラも精霊使いですから、そのおかげかもしけませんね」

「ええ、ですが、大規模に軍を動かすのは時間的にも政治的にも難しいことだったので、一番足の速い私の切り込み隊だけを率いて來たんです」

「そうですか。しかし、バーンズ様に来ていただいて助かりました。出来るだけ早く戻らなくてはいけませんから」

「勇者様のことですね、話はミラ達から大体聞いています。伝説の英雄の魂とは、にわかには信じがたいことです」

「間違つていればいいとは思いますが、そうでない可能性も高いと

思います。そうだった場合、何が出来るかはわかりませんが、全力を尽くす覚悟だけはしておかなくてはいけません」

バーンズはカレンの言葉に深くうなずいた。

「そうですね。カレン殿は到着までゆっくりと体を休めていてください、雑事は全て我々が引き受けますよ」

「ありがとうございます」

カレンが頭を下げるとき、バーンズは馬車から降りていった。

それから4日後の夜、ノーデルシア王国まであと1日という距離まで到達していた。すでに動き回るのに支障がなくなっていたカレンは、焚火の前で自分の武器の手入れをしていた。その向かい側にはハティスが目を閉じて座っていた。

「いよいよ明日ですね」

そこにミラとソラがやってきてカレンの隣に座った。

「ええ、何があるかわかりませんから、2人ともしっかり準備をしておいたほうがいいですよ」

ミラはカレンの言葉に胸を張った。

「それなら心配いりません。何があろうとばっちり対応してみせますよ」

「僕も、できるだけのことはします」

「もちろん僕もそうしますよ」

ミニックも2人の後ろから顔を出したそう言つた。カレンはそれを見てわずかに微笑んだ。

「頼りにしていますよ」

それからカレンは武器をしまって、ハティスに顔を向けた。

「ハティス様、あれから何か新たにわかつたことがあるなら、教えていただけませんか」

ハティスは目を開けてカレンを見ると、ため息をついた。

「大したことがわかつたわけではないのだよ。だが、重要なことはある。あの結界は500年程度では、その力を失うわけがないの

だ

か

「その通りだ」

「ハティス様以外にも結界の存在に気がついた者がいるのか、それとも、最初からそのことを知っていたのか」

「ちょっと待ってください」ミニックが口を挟んだ。「最初つて500年前でしょ？ それを最初から知ってるなんていつたら」

「少なくとも人間ではありませんね」

全員が黙り込んだが、答えはわかつていた。ミラが体を伸ばしてから軽い調子で口を開いた。

「まーた魔族ですか。しつこい上に懲りない連中ですね」

そして深夜、カレンは静かに馬車から出ると、ハティスが休んでいる馬車に向かつた。ハティスは馬車の中ではなく、少し離れた焚火の前に座っていた。カレンはその隣に腰を下ろした。

「少し聞かせていただきたいことがあるのですが」

ハティスは黙つてうなずいた。

「ハティス様がしてきた、伝説の英雄の研究について、その詳しいことを教えていただけないでしょうか？」

数分間、ハティスは何も言わなかつたが、おもむろにその重い口を開いた。

「そう、私はずっと伝説の英雄という存在の研究をしてきた。そして、その存在がこの世界のものではないということです」

「タマキ様のように召喚された者だつたということですか？」

「いいや、違う。おそらくは、ただ迷い込んできたのだ。なぜなら、異世界からの召喚の術を作り出したのはその英雄だからだ。そして、それを現代に復活させたのが、私だ」

カレンは黙つたまま続きを待つた。

「6年前、お前と別れた後、私は1人の青年を異世界から召喚した。

いい青年だったが、彼は魔族に魅入られてしまった。そして彼は人間にとつて脅威となる存在になつた

「それが闇王ですか。しかし、なぜ召喚などということを」

「あの頃から魔族の脅威は存在していた。しかし何より、私は英雄をこの目で見たかったのだ」

「身勝手なことは、思わなかつたのですか」

静かだがわずかに怒りをにじませたカレンの言葉に、ハティスは疲れたような表情を浮かべた。

「わかつていて、今はよくわかつていて。だから私は召喚の術はそれ以降使わなかつた。だが、闇王に対抗する手段として、その術をある人物に託した」

「私の力だけでは魔族に対抗できなくなつた時のための備えというわけですね。そして、その術を託されたのが、ノーデルシア王国の賢者と呼ばれるロレンザ様ということですか」

「そういうことだ」

そう言つとハティスは口を閉ざした。カレンはしばらくしてから立ち上がつた。

「最後にもう1つ聞かせていただきたいことがあります。今回タマキ様やヨウコ様が召喚されたのと、城の封印の力が弱まつたことは関係があるとお考えですか？」

「それはわからないのだ。だが、もし関係があるとしたら、全てのことは魔族が裏で手をひいていたのかもしれないな」

カレンはそれには答えず、黙つてその場を立ち去つた。

一行は昼頃に城に到着し、カレンはまず環の部屋に向かった。護衛の兵士に軽く手を上げて下がらせてから部屋に入ると、すぐにベッドに近づいていった。

環は今は意識が無く、出発した時よりも弱っているように見えた。カレンはベッドの脇に膝をついてしゃがむと、環の額に自分の右手を乗せた。

「タマキ様、私が最初に考えていたよりも、事態は複雑で厄介なようです。ですが、必ず解決してみせます。それまで待っていてください」

それだけ言うとカレンはまっすぐ部屋を出て行った。それからハティスと合流し、エバンスの執務室に向かった。護衛の兵士に取次ぎをさせ、2人は室内に入った。中ではエバンスと葉子が2人で書類仕事をこなしているところだった。

2人は手を止めて顔を上げた。室内に入ってきたカレンを見てからハティスに目を移すと、エバンスは表情を変えなかつたが、葉子は軽く首をかしげた。

「カレン、そちらの方は？」

「この方が大賢者と呼ばれていたハティス様です」

カレンに紹介されたハティスは頭を深々と下げた。

「王子には初めてお目にかかります」

エバンスは立ち上がり、ハティスの前まで歩くと、右手を差し出した。

「あなたの話は聞いている。タマキのことで力を貸してもうえると、そう考へてもかまわないのだね？」

ハティスは差し出された手を握り返してうなずいた。

「もちろんそのつもりです」

「それならば、すぐに話を聞かせてもらおう」

エバンスは自分の机に戻った。カレンは自分とハティスの椅子を用意して、2人はそれに座つた。まずはカレンが口を開いた。

「今回タマキ様が倒れた原因ですが、この城そのものに原因がある可能性があります」

「この城に？」

「はい。これはハティス様の研究からの推測ですが、この城そのものが巨大な結界で、その効果は封印です」

エバンスは黙つてうなずいて先をうながした。

「それはかつての伝説の英雄が施したもので、封印されているのはその英雄です」

「それがなぜ問題になるのだ」

「英雄が自分を封印したのは、自身の力が破滅の方向に傾いてしまうのを止められなかつたからです。長い時間で肉体は滅びたはずですが、その破滅の力に満ちた魂はまだ存在しているはずです。そして、その魂は新しい肉体を求めていて、その力が伝説の英雄に匹敵する魔力を持つタマキ様に影響を与えているのだと思われます」

「そうか」

エバンスはそれだけ言つと、うつむいて考えをまとめているようだつた。しばらくしてから顔を上げた。

「話はわかつた。その伝説の英雄が封印されている場所というのはどこなのだ」

「この城の地下です。おそらく誰にも知られていない場所なのではないでしょうか」

そこでハティスが一枚の紙を取り出してエバンスに手渡した。それには簡略化した城の図が記され、英雄が自らを封印したと思われる場所に印がつけられていた。

「確かに、このような場所は私も知らない。すぐに確認しなければならないな」

エバンスは立ち上がりて葉子に顔を向けた。

「私はしばらく席を外す。ヨウコ、悪いがしばらくここを頼む」

「わかりました」

葉子は微笑んで3人を送り出した。

途中でバーンズと合流し、4人は城の地下の最深部まで降りていた。ほとんど倉庫としてしか利用されていない地下は空気が淀んでいた。目的の場所には到着したが、もちろんそこには入口のようものは見当たらなかった。

ハティスは壁に手を当てながら、ゆっくりと探るように辺りを調べていた。そして、一通り調べ終えると、壁のある地点に両手をついた。

「おそらくこのあたりでどうな」

エバンスはその場所に近づき、片手を壁に当てた。

「こんな場所に英雄が自らを封印していたとはな。今まで、誰一人として気がつくものはいなかつたのか」

「結果には人の認識を阻害する効果もあるのではないか。どうでしようか、ハティス様」

「カレンの言う通りと考えたほうがいいかもしませんな。結界の力が弱まつていなければ、こうして存在を感じることも難しいかつたはずでしょう」

ハティスは全員の顔を見まわしながらそう言った。

「とにかく、この壁を破らなければいけませんね。あまり人を使うわけにもいかないでしようから、私がやりましょう」

バーンズはその場から立ち去り、手に巨大なバトルハンマーを持って戻ってきた。

「倉庫にあつた古いのですが、壁を破るには十分でしょう」

そう言つてバーンズは壁をバトルハンマーで崩し始めた。カレンも眼鏡を外してその瞳を金色に輝かせると、自分の拳を使って壁を崩すのに協力し始めた。

そして、壁が崩されると、その先には4人の想像とは違つもの、

さらに地下へと続く洞窟があつた。

「行きましょう」

カレンは眼鏡をかけてから壁の松明を取り、先頭に立つて洞窟に足を踏み入れた。洞窟は蛇行しながらも確實に地下に続いた。

そうして、かなり地下深くまで到達した。徐々に道がなだらかになり、幅も広くなつていて、その先に光が見えてきた。

「これは驚きました。地下にこれだけの空間があつたのですね」  
その光の向こうに到達したカレンはそう言つて、その空間を見回した。その広さは城の訓練所ほどもあり、中央には強い光を発する、人間一人を余裕で中に入れられるようなサイズの球体が浮いていた。後ろの3人もその光景に驚いていた。

「ここが英雄が封印されている場所なのか」

エバンスはそう言いながら光る球体に近づいていった。3人もそれに続いた。

「この球体が封印なのか？」

「おそらくそうでしょうな」

ハティスは球体を見上げてそう言つた。

「城を1つ使ってこのサイズの結界です。かなり強力なのはまちがないのでしようが、やはり私が推測していたよりも力は弱くなっていますな」

「その通り。さすがかつては大賢者と称せられたハティス様」

突然背後から声が聞こえ、4人は振り返った。そこには薄ら笑いを浮かべたロレンザが立っていた。エバンスが1歩前に出た。

「なぜここに来たのだ。誰も近づけないように指示を出していたはずだが」

「ええ、指示は間違いなく出されていましたよ。ですが、私にとつてはそんなものは影響のあるものではありませんね」

そう言つたロレンザは薄ら笑いのまま、どんどん近づいてきた。カレンがそれに向かって走り、行く手を遮るように立ちはだかった。バーンズはエバンスを守るようにその前に立ち、腰の剣に手をかけ

た。

「どうこうとか、わかるように説明していただけますか」  
カレンは腰のナイフに手を伸ばし、ロレンザから田を離さないようとした。

「おや、カレン。鋭いあなたのことだから、私の目的くらい、答え  
なくてもわかるのではないですか？」

「それは買いかぶりというものですよ。私がそれほど鋭ければ、今  
あなたとこうして対峙することもなかつたでしょうから」

「そうして謙遜することもないでしよう。あなたが私のこと心底信  
頼していたことなどなかつたのですからね。そのおかげで多少苦労  
させましたけど、今の状況はこの通り」

ロレンザが指を鳴らすと、その背後の空中に闇が広がり、そこか  
らミラ、ソラ、ミニックの3人、そして環が地面にゆっくりと下ろ  
された。4人とも意識が無いようだつた。

「この3人は私の邪魔をしてくれましてね。必要はなかつたんですね  
が、観客として連れてきたのですよ。何しろ、あなた達の弟子です  
からね」

「今すぐ、その3人とタマキ様を解放しなさい」

カレンは静かに、不自然なくらい抑えた声を出した。ロレンザは  
それを軽く聞き流した。

「さて、そろそろ始めましょうか。魔王の誕生を」  
ロレンザは手を部屋の中間にある球体に向けた。

## 魔王の器

ロレンザがかざして右手から一條の光が走り、それが球体を照らした。光を浴びた球体はよりいつそう強く光りだした。

「あなたの言う魔王というのは、ここに封印された伝説の英雄の魂を使って、タマキ様を魔族にする、といふことでしょうか」

「魔族？」

ロレンザはカレンを馬鹿にするように笑った。

「ただの魔族ならば魔王などと言うわけがないでしょう。おとなしくして、その目で見ていれば答えはすぐにわかりますよ」

「そんなものは見たくもありませんね」

カレンは眼鏡を外して、ショートソードを抜き放った。

「おやおや、あなたのこととは前から冷静ぶつてるだけだと思つてましたが、それは当たつていきましたね。確かにここは戦うには十分な広さも強度もあるでしょうが、あなたは7人の人間を守りながら戦えるつもりですか？」

「そうしなければならないのなら、そうするだけです」

ショートソードを構えると、カレンはサロアと戦つた時と同じよう、右目は白銀、左目は黒い闇、そしてその2通りの光と翼という姿になつた。ショートソードは片側ずつ光と闇に覆われていつた。「そんな力まで得ていたとは、言つだけのことはあるということでしょうかね」

そう言つたロレンザに、カレンは躊躇なく斬りかかつていつた。だが、ロレンザは落ち着いて環の体をつかむと、一瞬でその姿を闇に消した。そして、その姿はエバンス達が立つてゐる反対側、球体の向こう側に現われた。光を発する右手は相変わらず球体に向けていた。

「残念なことです、あなたの相手より先にすることがすることがありますからね」

ロレンザは球体の反対側にいるエバンス達に向かって左手をかざすと、そこから雷が放たれた。バーンズがとっさに前に出ようとしが、ハティスがそれよりも早く動いた。その手から魔法の盾が展開され、雷を防いだ。

「おや、がんばりますね。もう若くはないのですから、あまり無理はしないほうがいいですよ、大賢者さま」

嘲るような調子で話しながら、ロレンザは雷の勢いを強めた。だが、ハティスは1歩も引かなかつた。

「全てお前の思惑通りだつたのか？ 私が召喚の術を完成させたのも、それで呼び出したあの青年を魔族に墮としたのも、召喚の術を私がお前に教えたのも、そのため新たに勇者が呼び出されることになつたのも！」

「細かいことを言えば、全てが思惑通りとは言えませんがね。まあそんなことは500年という歳月に比べれば大したことではありますでしたよ」

そこにカレンが上空から斬りかかつたが、ロレンザは左手をその方向に向け、魔法の盾でその一撃を受け止めた。

「今の勇者は魔法の威力を限界以上に高める方法を編み出しましたね。私も、使わせてもらいましょうか。20倍、バースト」

左手の魔法の盾が爆発に変わり、カレンは吹き飛ばされて壁に叩きつけられた。その余波で、ハティス達も入口付近まで飛ばされた。ロレンザはそれを確認すると、両手を球体に向かえた。

「さて、そろそろ始めましょう」

かかげられた両手から、今までよりも強烈な光が発せられた。それを浴びた球体の面が、徐々にぼころび始め、そこからどす黒いにかがのぞいた。カレンはすでに立ち上がりついて、それを止めようとしたが、球体が発している何かに遮られ、ロレンザに近寄ることができなかつた。

そうしている間にも、球体の中にあつたどす黒いものは徐々にその外に出てきていた。それは球体の外に完全に出ると、不定形で実

体があるかどうかわからない、なんとも形容しがたいものとして空中に存在していた。

ロレンザはそれを恍惚とした表情で見つめながら、両手を高々と上げた。

「破滅を司る悪魔、ドゥームデーモンよ。この破滅の力に染まつた強き魂を喰らい、力とするのだ！」

両手の間に闇が広がり、そこから実体のない霧のような存在が現われた。そして球体から出たどす黒いものに向かい、それを取り込み、まるで全てを飲み込む虚無のようになつた。

「さあ、ここにある強き肉体を捧げよう！ 今こそ、この世界にその持てる力の全てと共に姿を現せ！」

虚無のようなものは環の体に入り込んでいった。その体はわずかに震えただけで、それを受け入れた。

数秒の間の後、環の目は開かれ、その体が動き出した。カレンは無理にロレンザに近づこうとするのをやめ、それをじっと見ていた。環は自分の手を見つめ、その体を一通り確認してから口を開いた。「不完全とは言え、一度は我を打ち破つたこの肉体、悪くない」

その声も、立ち振る舞いも、すでに環のものではなかつた。カレンは感情を押し殺し、それに向かつて歩き出した。今度は何にも阻まれず、球体の脇に立ち、ロレンザと環だつたものと対峙した。

「一度は倒された悪魔を呼び出すとは、どういうつもりでしょうか」「倒された？ 実におめでたいことですね。あの程度の器では本来の力の10分の1も出せているかどうか怪しいといつのこと」

ロレンザは薄ら笑いでそれだけ言つと、音もなく後ろに下がつていつた。

「まあ、見せてもらいましょうか。カレン、あなたの力を」

そして、そこには環の姿をしたドゥームデーモンとカレンが残された。カレンは剣をドゥームデーモンには向けずに、ただその姿を睨みつけた。

「貴様と戦つたのは少し前だったが、その時よりも力をついている

ようだな

ドゥームデーモンは1歩、カレンに向かつて足を踏み出した。カレンもそれに応じるように1歩踏み出し、剣を構えた。

「始める前に言つておきます。タマキ様の体からすぐに出で行きなさい、あなたのようなものが好きにしていい体ではありませんよ」

ドゥームデーモンはそれに対し、ただ笑った。

「それならば、貴様の力でやつてみせろ」

そして地面を蹴つて跳んだ。凄まじい勢いでカレンに迫り、すれ違いざまに無造作に腕を振るつた。カレンはそれをなんとか剣で受けたが、その力に体勢を崩された。ドゥームデーモンはそのまま壁まで到達すると、そこを蹴つて今度は背後から襲いかかった。カレンは体勢を崩しながらもなんとかその方向に体の向きを変え、勢いのまま繰り出された蹴りを剣で受け、逸らそうとした。

だが、剣は碎かれ、ドゥームデーモンの蹴りがカレンの肩をかすつた。カレンはわずかによろめいたが、すぐに振り返つた。しゃがんだ状態で地面に着地したドゥームデーモンは、ゆっくりと振り返りながら立ち上がり、自分の体を確認するように見まわした。

「この世界でこれほどの力が使えるとはな」それから、カレンに田を移した。「貴様の力も大したものだな。今のをしのげるとは思つていなかつたぞ。だが、次はない」

カレンは中ほどから碎かれたショートソードを投げ捨てた。

「次、ですか。残念ですが、それでは終わらせませんし、あなたをそのままにもしません」

カレンは手を自分の胸の前で組んだ。その瞬間、そこを中心として光と衝撃がほとばしった。そして、それが止むと、そこには両方の瞳と翼を白銀に輝かせ、髪の毛もそれと同じ色に変わったカレンが立つていた。

「ほう、面白い」ドゥームデーモンはにやりと笑つた。「しかし、それは貴様にもかなりの負担があるだろう。なんのためにそこまでする？」

「私は私の望みをかなえるために戦うだけです」カレンは微笑を浮かべた。「タマキ様、これが終わったら、今度は目的のない旅でも始めましょう」

「そのようなこと、ビリセイの男には聞こえていないぞ」「いいえ、そうではないことをこれから教えてあげましょう」カレンとドゥーム・デーモンの間の緊張が一気に高まった。

## 限界への挑戦

対峙するカレンとドゥームデーモンはまだ1歩も動いてはいなかった。だが、その間の空気は張り詰め、いつ何が起こっても不思議はない雰囲気だった。それを動かしたのはカレンだった。

カレンはその場の雰囲気とは対照的に、ゆっくりと歩き出した。それを見たドゥームデーモンもゆっくりと歩き出した。そして、2人は互いに手が届く距離まで到達すると、同時にその拳を突き出した。

拳同士が激突し、衝撃波が空間を満たした。その衝撃で双方とも後ずさったが、すぐに踏み込み、再び拳を激突させた。再び双方とも衝撃で後ずさったが、カレンは地面を蹴つて跳ぶと、ドゥームデーモンに回し蹴りを叩き込んだ。

それはドゥームデーモンの腕に防がれた。ドゥームデーモンは蹴りの威力に少し押し込まれたが、それを強引にはねのけた。そして、間髪入れずに、空中のカレンに向かつて踏み込んでまっすぐに蹴りを放つた。カレンはそれを腕をクロスさせて受けたが、凄まじい勢いで後方に飛ばされた。

しかし、カレンは壁に足をつけ、そこを蹴つてドゥームデーモンに向かつて飛んだ。その勢いのまま、右足を突き出し、強烈な蹴りを見舞つた。それはドゥームデーモンの胸元に完全にきまり、その体を後方に吹き飛ばした。

ドゥームデーモンは地面に手をついて、その勢いを殺してから顔を上げた。

「いい攻撃だ。だが、まだ足りん！」

そこにカレンが一気に間合いを詰め、頭めがけて回し蹴りを放つた。ドゥームデーモンはそれを後ろに飛び退いてかわして地面を蹴り、隙ができたカレンに向かつて跳んだ。そして、そのままの勢いで頭突きをした。

カレンはそれをまともに受け、のけぞりながら数歩後ずさつた。

ドゥームテーモンは続けてカレンの腹に向けてパンチを放った。カレンはそれをまともにくらつたが、こらえて体勢を立て直すと、その次の顔面に向けて放たれた拳は自分の腕で受け止めた。

ドゥームテーモンはすぐに腕を引くと同時に、カレンの腹に向かつて正面から足を突き出した。カレンは後ろに跳んでその衝撃をやわらげた。いったん間合いをとつた両者は、そのまま円を描くようにして歩き、互いの位置を入れ替えてから再び構えた。

ドゥームテーモンは素早く動き腕を振るつたが、それはカレンに向かわず、飛んできた氷の牙を碎いた。

「余計な邪魔はするな」

ドゥームテーモンはロレンザを睨みつけてから手をゆっくりと引いた。カレンはその間、全く動こうともせずにその光景を黙つて見ていた。

「もう一度余計なまねをしたら、貴様も我の敵だ」

ロレンザは一瞬口元に笑いを浮かべてから、深々と頭を下げた。ドゥームテーモンはそれを見ようともせず、すぐにカレンの方に向き直つた。

何かを言おうとしたのかもしれないが、それは目の前に迫つたカレンの右の拳で遮られた。避けることはできず、拳が顔面を捉えた。さらに左の拳がきれいにその顔面に直撃した。ドゥームテーモンはぐらつかなかつたが、その脇腹にカレンの右足が叩き込まれ、少し体勢を崩した。そこにカレンの左足が高く上がり、その頭の側面に迫つた。ドゥームテーモンはなんとか下がりながら腕を上げ、その蹴りを防いだ。

攻撃を防がれたカレンは、すぐに後ろに下がつて間合いをとらうとした。だが、ドゥームテーモンは体勢を完全に立て直そうとはせずに距離を詰めた。まず右の拳を振るつてカレンを殴りつけると、さらに左の拳で腹を、再び右の拳を下から突き上げた。カレンは3発目をかわすと同時に、後ろ回し蹴りをドゥームテーモンの腹に決

めた。

両者は距離をとつて、動きを止めた。どちらもそれなりのダメージはあるようだったが、カレンのほうが大きいようだった。だが、カレンは全くひるむことなく、ますます気合を充実させていた。それはドゥームデーモンも同じだった。

ドゥームデーモンは腰を落とすと、低い姿勢で地面を蹴った。カレンはそれを上空に飛んでかわしたが、ドゥームデーモンは素早く方向転換してすぐに追つた。カレンは天井に手と足をつけて反転すると、勢いをつけてそれに向かった。

そのまま右膝を突き出し激しく激突したが、それはドゥームデーモンの腕に防がれていた。ドゥームデーモンはカレンの足をつかんで振り回し、地面に向かつて投げつけた。カレンはぎりぎりで地面に激突するまえに体勢を立て直したが、そこに真上からドゥームデーモンが降ってきた。

「ガハッ！」

足がカレンのみぞおちを捉え、地面に押しつけた。ドゥームデーモンは再び上空に飛び上がり、今度は膝を落とそうとした。カレンは横に転がつてなんとかそれを回避すると、膝をついて体を起こした。

そこにドゥームデーモンの回し蹴りが追い討ちをかけた。カレンはそれをなんとか腕で防護したが、その勢いを受け止めることは出来ず、地面を勢いよく転がつた。カレンは体勢を立て直そうとせず、ただがむしゃらに上昇して、自らの背中を天井に叩きつける形で止まった。

それでもドゥームデーモンは追つてきたが、カレンの動きが予想外だったのか、ほんの少しだけ遅れた。カレンが両手を広げると、光がその手を覆つた。そして、襲ってきた拳をわずかに頭を動かしてかわすと同時に、その両手をドゥームデーモンの胸に押しつけた。「これで！」

カレンの声と一緒にその手の光が炸裂し、ドゥームデーモンは地

面に叩きつけられた。カレンはゆっくりと降下したが、地面に足がつくと同時に瞳と髪の色が元に戻り、その場に膝をついた。

そして、仰向けに地面に倒れているドゥームデーモンは動く様子がなかつた。

ロレンザはそこに近づこうとしたが、素早く飛び退いた。その空間を水の刃が切り裂いていった。

「これはエバンス様、一体どういうおつもりですか？」

そう言つてロレンザはエバンスの方に顔を向けた。エバンスは剣を構えて立つていた。

「その2人に近づくことは許さん」

「残念ですが、あなたの力では私は止められませんよ」

「どうかな！ 水よ！ 我が剣に宿り邪悪なものを切り裂け！」

エバンスが剣を振るうと、そこから水の刃放たれ、ロレンザに向かつて飛んだ。1発目は簡単にかわされたが、エバンスは剣を素早く振り続け、次々に水の刃を放つた。

「こんなものでは」

ロレンザはかわし、打ち碎き、全くそれをよせつけなかつたが、側面からバーンズが走りこんできた。

「覚悟！」

バーンズは真っ向から剣を打ち下ろしたが、ロレンザはそれを横に動いてかわした。

「同僚にひどい仕打ちですね」

ロレンザはバーンズに手を向けたが、そこに反対側から火の玉と氷の牙が襲いかかった。ロレンザはバーンズに向けていた手をそちらに向けると、魔法の盾を発生させてそれを打ち消した。

「大賢者様もですか。みなさん頑張りますね」

ロレンザは呆れたような表情で苦笑した。それからバーンズとハイテイスに手を向け、そこに火の玉を発生させた。だが、それは竜巻と雷によつてかき消された。さらにそれを追つようにして輝く剣を持ったミラが高く飛び上がり、正面から渾身の力でそれを振り下ろ

した。

ロレンザはとっさに後ろに下がったが、その額とロープを//リの剣がわずかに切り裂いた。//リは着地するとすぐに後ろに下がり、剣を構え直した。

「雑魚が邪魔をしてくれますね」

ロレンザはそう言つてから正面の//リに向けて手をかざした。

「まずはあなた達から片付けてあげましょ！」

ロレンザがかざした手から衝撃波がミラに向かつて放たれた。ミラはそれに吹き飛ばされ、エバンスの横まで転がった。ロレンザは続けざまに衝撃波を放ち、次々と自分を包囲していた者達を倒していった。

そして、最後にエバンスが残つた。

「さて、エバンス様。あなたは次代の王です。私に協力していただけるのなら、悪いようにはしませんよ」

「そのようなことが聞けるわけがないだろ？！」

「それは残念です。1人ずつ止めを刺していくば、考えも変わるでしょうか？」ロレンザはなんとか立つているバーンズに手を向けた。「どうしますか？」

「エバンス様！ 私にはかまわずに！」

「これは忠義というものですか。実に感動的ですが、エバンス王子、あなたが首を縦に振らなければ、どうせ全滅ですよ」

ロレンザはエバンスとバーンズを嘲笑した。エバンスは険しいが冷静な表情を崩さなかつた。

「お前達魔族に従つてしまつたら、それは滅んだのと同じだ」

「それでは戦いますか。勇者は悪魔に取り込まれ、あなた達の切り札であるカレンも動けないこの状況で」

「まだ終わつてなどいない。終わらせるつもりもない」

エバンスは剣を振りかざした。ロレンザはそれを見て大げさにため息をついた。

「聰明と言われても、所詮この程度ですか。それならば、まずはあなたから処分してあげましょう」

ロレンザが手をかざし、エバンスは振りかざした剣を振り下ろした。そこから今までにない大きさの水の刃が放たれたが、それはロレンザの放つた衝撃波で散らされた。

「それではさよなら、王子」

エバンスに向かつて雷の矢が放たれようとしたが、そこに1枚のカードが滑り込んできて、ロレンザの手元で爆発した。舌打ちと同時に、ロレンザはカードの飛んできた方向を見た。

「カレン、そこで寝ていればいいものを」

まだ立ち上がりせず、膝をついたままのカレンがいた。ロレンザがドゥームテーモンのほうに目を移すと、それはちょうど動き出したところだった。

「どうやらあなたの戦いも無駄だつたようですね。見てみなさい、すでに悪魔は復活していますよ」

ロレンザの言葉通り、ドゥームテーモンはゆっくりと立ち上がりつた。それを確認したロレンザは満面の笑みを浮かべてエバンスに手を向けた。

「そろそろ退場していただきましょうか」

手から再び雷の矢が放たれようとしたが、いきなりロレンザを魔法の盾が円状に覆つた。だが、ロレンザの雷の矢は止まらなかつた。「プロテンション！ 反転！」

その声と共に雷の矢は魔法の盾に衝突し、その内部で消滅した。ロレンザは驚愕の表情を浮かべ、声のしたほうを見た。そこにはロレンザに向かつて手をかざしている、ドゥームテーモンであるはずのものがいるだけだつた。

「まさか、そんなバカな」

ロレンザの絶句を合図とするかのように、ゆっくりとそれは立ち上がつた。そして、その顔を上げた。

「タマキ様！」

カレンはそう叫んだ。環はそつちに顔を向けて笑顔でうなずいてから、ロレンザに顔を向けた。ロレンザは見るからに混乱していた。「お前は悪魔にその体を奪われたはずだ！ なぜ、なぜ元に戻れた！」

環はその問いに自分のあごをなでて、じばらく考えるような仕草

をした。

「どうしてかは俺にもあんまりよくわからないな。まあ、カレンのおかげだつていうのだけは間違いないと思うんだけどさ」「しかし、悪魔はどうした！ その体から追い出すなど不可能なはずだ！」

「いや、追い出してなんかいないぜ」

そう言つた環は左手の人差し指にはめている指輪をロレンザに向けた。それは普通の指輪だつたはずが、今は黒い闇をまつとしたものになつていた。そこから声が響いた。

「そうだ、我还是まだこの体の中に入ってる。だがまあ、なんというかな、この男と契約を結ぶことにした」

「契約だと？ 私との契約があるだらつ！」

「さつきそこの女と戦つてるときにな、創造の力を打ち込まれた。どうもそれがこの男の魂に反応して我的力を封じ込めたらしい。それで、さつきまでこの男と話していたのだが、これがなかなか面白かった」

「面白かつただと？ 馬鹿な！」

「馬鹿だらう。だが、お前などよりこの男のほうが面白そつだからな、こいつと契約することに決めたのだ。私はこやつと一緒に、我が世界とは全く違うこの世界をじっくりと見させてもらひつ。戦いしか求めない貴様よりもよほど条件がよいのだ」

「ま、そういうことだよ」環は手を戻した。「わかつただろ、あんたのたぐらみは失敗したんだ」

そう言つた環はロレンザを無視して、カレンに近づいていつて右手を差し出した。

「大丈夫か、カレン」

「はい、タマキ様こそ大丈夫ですか」

「体中痛いけど、なんとか平氣だよ」

環はカレンに右の肩を貸して立ち上がらせた。その光景を見ながら、ロレンザは冷静さを取り戻していった。

「そうですか、今回は失敗ですか。まあいいでしょ、今回はカレン、あなたの魂で我慢しましょう」

ロレンザはそう言って笑った。そこにエバンスの水の刃が飛んできたが、それは片手で弾いた。

「エバンス、俺達なら大丈夫だ。みんなをそこに集めて、見ていてくれよ」

環がそう言つと、エバンスは黙つてうなづいて、ロレンザの攻撃を受けた仲間達を助けに行つた。

「余裕ですね、勇者タマキ。あなたの体はカレンとの戦いでかなり消耗しているはずです。すぐに消してあげますよ」

その言葉に環はにやりと笑つて、左手の指輪を顔の高さまで上げた。

「おい、早速お前の力を貸してもらうぞ」

「好きに使え」

環の体から闇が溢れた。それは禍々しい力だった。ロレンザは再び驚愕した。

「まさか、その力、悪魔の力を使えるとでも言つのか」

「当たり前じゃないか。それ以上のこともこれから見せてやるよ」

「ありえない！ そんなものは私は認めないぞ！」

「そんなこと言つたつて、できるものはしょつがないじゃないか」

環はにやりと笑つてカレンの顔を見た。

「カレン、決めるぞ！」

「はい、わかりました！」

カレンはそう言つて瞳と髪を白銀に変えた。そして、環とカレンは肩を組んだまま手を広げた。環の手は闇をまとい、カレンの手は光をまとつた。

「破滅の力」

環は闇をまとつた左手を前に差し出した。

「創造の力」

カレンは光をまとつた右手を前に差し出した。

「それをつなぐ、絆の力」

2人が声を合わせると、その差し出した手の間に闇と光の道が出来た。そして2人は手の平を向かい合させて、ゆっくりとそれを近づけていった。

「今こそ1つに」

2人の手がやわらかく握りあつた。闇と光が一体になり、そのどちらとも言えないものがその場を満たしていった。

「こんなものが！ なんだというんだ！」

ロレンザは両手に魔力を集中して、何かの魔法を放とうとした。だが、環とカレンはそれを見よつともしなかつた。

「全てを生み出し混沌よ」

「今こそ、その力を示せ」

環とカレンの姿が闇と光が一体になつたものに包まれていった。そして、それは2人の握られた手に集中していった。

「死ねええええええええ！」

ロレンザの手から闇が光線のように放たれた。それは環とカレンを飲み込もうと凄まじい勢いで2人に迫つたが、その握られた手にぶつかると完全に止められた。

「これで」

「終わりです」

環とカレンの静かな言葉と共に、2人の手から闇と光が一体となつたものが放たれた。それは闇の光線を飲み込み、さらにロレンザをも飲み込んでいった。

## 2人の旅立ち

3ヵ月後、環は慌しく部屋の整理をしていた。そこにカレンが入つてきて乱雑な室内を見回した。

「ひどい有様ですね。明日には出発ですが、これで大丈夫なのですか」

「大丈夫にするために、こうして片付けてるんじゃないかな」

「手伝いを頼むべきではないでしょうか」

「危ないものもあるし、下手に頼めないよ」

「他人には見られたくないものもあるわけですね」

環は天井を見上げて少し考えこんだ。

「まあ、あるかな」

それを聞いたカレンはため息をついた。

「私がお手伝いしますよ。今さら何があつたとじぶん驚きはしませんから」

「自分の準備があるんじゃないの」

「もう済ませました」

カレンはそれだけ言いつと環の返事を聞かずに、どんどん部屋を片付け始めた。そこに葉子がドアを開けて部屋に入ってきた。

「あれ、邪魔だった？」

「いや、別にそんなことはないですけど、どうしたんですか？」

環の問いに、葉子は一つのアミュレットを取り出した。

「環君に頼まれてたやつなんだけど、やつとできたから届けに来たのよ」

「ああ、そうだったんですね。忙しいのにありがとうございます」

環はアミュレットを受け取って、それをよく見た。狼のようだが、丸みがあるデザインで、なんとなく愛嬌のある顔立ちをしていた。環はそれと左手の指輪をくつつけた。すると、指輪がまとっていた闇がそのアミュレットに吸い込まれていき、それはまるで生きてい

るかのように動き出した。

「これが我的新しい窓か」

「そういうことだ」

環はアミコレットを首にかけた。

「だが、これは精靈の気配がするな。我にどつてはあまり居心地のいいものではないぞ」

「別に死ぬわけじゃないんだからいいじゃないか」

「タマキ、貴様、最近我の扱いが悪くないか」

「全然悪くない。まあ、部屋の片付けを手伝つて言つんなら、少し考えてやつてもいいよ」

「それは遠慮しておこう。旅に出るのだらつゝ、それと済ませろ」「わかつたから黙つてろ」

「それじゃ環君、カレン、私はちょっと仕事があるから」

「ああ、はい。どうもありがとうございました」

環とカレンは同時に頭を下げて葉子を送り出した。それから2人は黙々と部屋の整理を続けた。

夜になると、片隅に箱が積み上げられている以外は、部屋の中はすっきりしていた。テーブルには夕食が並び、環とカレンは向かい合つて座っていた。

「タマキ様、帰つてこないわけでもないのに、なぜこゝまで部屋を整理したのですか」

「いや、今度はけつこつ長い旅になるわけだし、この部屋もだいぶ散らかってたからね。いい機会だから大掃除したんだよ」

「それはしつかり言つておかないと、もう帰らないものと勘違いされますよ」

「わかつてゐるよ、明日になつたらそつする」

翌日、環はエバンスの私室に訪れていた。そこにはエバンスの他にも葉子、バーンズ、ハティスとミニックが集まっていた。ミラとソラは1ヶ月前に里帰りしていたのでこの場にはいなかつた。その

なかで、まずはエバנסが口を開いた。

「昨日は一日中部屋を整理していたと聞いたが」

「まあ、長く空けることになるしね。いい機会だから綺麗にじとじうと思つただけだよ。帰つてきたらまた使わせてもらつからね」

「そうか、必ず戻つてくれよ」

エバансは安心したように言つて、手を差し出した。環はそれを握り返してから、まずハティスに顔を向けた。

「ようしく

「そうだな。エリットとした本を書くという約束もあることだし、私も腰を据えようと思っている。君も達者でな」

2人は握手をした。次はバーンズだった。

「旅の無事を願っています」

「バーンズさんのほうも元氣で」

「旅先でミラやソラと会つことがあつたら、私がよろしく言つていたと伝えてください」

環はうなずいて手を差し出した。バーンズはその手を軽く握った。それからミニックの方に向いた。

「タマキ先生、こつちのことは心配しないで、ゆっくり旅をしてきてください。僕がしつかりやりますから」

「そうだな。頼んだよ」

環は腰につけていたカード入れを外してミニックに手渡した。

「役に立つこともあるかもしれないし、持つておいてくれ

「はい！」

ミニックはそれを受け取つてから、環が差し出した手を握つた。

最後に環は葉子の方に向き直つた。

「葉子さん、みんなのことによろしく

「ええ、環君も元氣でね」

環は葉子が差し出した手を握つてから1歩下がつて全員の顔を見回した。

「それじゃあ、明日の出発の準備があるから、俺はこれで  
そう言つて環は足早に部屋から出て行つた。その日の残りは明日  
の出発の準備に忙殺された。

そして次の日の早朝。環とカレンにバーンズとミニックは城門の  
前で荷馬車に最後の荷物を積み込んでいた。

「これで全部かな」

「はい、今の荷物が最後です」

環は荷馬車を眺めてから、カレンのことをよく見た。

「剣だけじゃなくて、鎧も新しくしたんだ」

「ええ、前の戦いでぼろぼろになつてしましましたから」

カレンは真新しいレザーアーマーと腰の剣を見下ろした。レザー  
アーマーは今までのものと大した違いはなかつたが、剣はより長く、  
重厚なものになつていた。一方、環も今までのブレザーではなく、  
革のジャケットを着ていた。

「そつか。それじゃ、そろそろ出発しよう」

環は荷台に飛び乗つた。カレンも御者台に上つた。環はバーンズ  
とミニック、そして城壁の上にいるエバンスと葉子に向かつて手を  
振つた。

「じゃあ、いつてくるよ」

「先生！ ご無事で！」

ミニックだけが大声を出して環とカレンを送り出した。

そして、数10分の間は2人とも無言だつたが、街からだいぶ離  
れてからカレンが口を開いた。

「タマキ様、どこに向かいますか？」

「どこがいいかな。カレンはどこか行ってみたいところはないの？」

「私は特別行きたいというところはありません。タマキ様はどこか  
行ってみたいところはないのですか」

「どこか魔族が暴れているような場所に行くべきだらう」

環はしゃべるアミュレットを握りしめて黙らせた。

「そうだなあ、とりあえず北のほうに行つてみたいな

「わかりました。それでは行ける所まで行きましょう」

「そうしようか」

荷馬車はゆっくりと、着実に道を進んだ。

## 2人の旅立ち（後書き）

当初考えていたところまで書けたので、完結ということになります。個人的には短期間で書き上げられたという満足感があります。読んで楽しんでもらえたならうれしいことです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5063/>

---

ノーデルシアの勇者 第一章

2011年4月27日15時40分発行